第十四　けく活について

一　質　問

或人から次のやうな質問を受けた。

暖かし　寒し　と　暖けし　寒けし　とは、記傳三十七巻に「あきらか　さやか　のどか　ゆたか　などの類、古言には　あきらけし　さやけし　ゆたけし　と云ひて、あきらか　さやか　のどか　ゆたか　などは云はぬ格なる故に、萬葉三なる紫の綿者暖所見などもあたゝけくと訓むべきなり」といはれたやうに、只時代の相違のみで、意味は全く同一のものと心得てよろしかるべきか。をこがましいが、辞書では、暖かし　寒し　は　暖かいもの　寒いもの　の實狀を率直にいふので、暖けし　寒けし　は　暖かさうだ　寒さうだ　と其物の狀態を傍から推量して云ふので、かしとけしは意味に相違があるやうに思はれるが、どんなものでせうか。

或人の説に、暖かに　柔らかに　等語の末がかにとなるものは、けしとなるが、さうでないものにけしの語尾を添へるのはあやまりである。それだから暖けしは云はれるが、寒けしは云はれぬといふ事を聞いたが、いかゞでせう。果してさうであるなら、あざやかに　にこやかに　等も、あざやけし　にこやけし　と云はれさうであるのに、そんな例は見た事も聞いた事もない。あたゝかのかがけに轉ずるのは、五音共通でありさうな事だが、その下に接するにの助詞が　く　し　き　に轉ずる理由がわからず、且形容詞の語根の末音とそれに接した助詞とが連合して一形容詞の語尾に轉ずるといふ事は、如何にも奇怪な感がするが、あり得る事でせうか。

右「暖けしは云はれるが、寒けしは云はれぬ」といふ或人の説を聞いて數日後、徒然草十九段に「すさまじき物にして見る人もなき月の寒けくすめる二十日あまりの空こそ心細きものなれ」とあるのを提示したら、其返事に

寒けく徒然草に有之候とて御示し、それは確證とはならず早く誤られ居り候ものにて、そのあしきといふ事は今定説に相成居候。

との事であつたが、腑に落ちず、御多忙の折柄はなはだ申兼ねますが、右概略の御批判を御願致します。

誠に雖しい問題である。前に別の人から「國定新讀本に靜かさ　靜けさ　二様の語があるが、三矢博士の高等日本文法によれば、靜かさは誤の様に思はれるが何うか。」といふ問を受けて、

靜かさや岩にしみ入る蟬の聲を初として、江戸期には靜かさといふ語が、相當用ゐられて居るから、語の變遷を認める以上誤とは認め難い。

と答へたことがある。又、記傳の説も再檢討を要するので、平常考へて居た事を基礎とし、少々調査した所を答へる。（　）の數字は後に引用した例證に當るもの。

一、あきらか　ゆたか　は書紀の訓にも見え(1522)、左夜可爾伎吉都　淸見者　は萬葉に用ひてある(67)。奈良朝には　のどにといひて、のどか　のどけし　共に見えない(31 32 33)。平安朝に入つて兩語共に見える(34—38)。

あたゝかは孝德紀の訓にも見えながら（1）、あたゝけし　あたゝけき　は奈良朝に見えない。平安朝に入つて兩語共に見える（2 3 4 5）。

二、あたゝけし　ゆたけし　といふ語は新撰字鏡に見えるけれど（4 21 30）。歌文中に終止に用ひた例はない樣である。さやけし　はるけし　は用例がある（8 13 40）。あたゝけき　ゆたけき　等は連體の用例のみの樣である（5 17 23 24 25 26）。さればけしをかにより古い格といふ記傳の說は從ひがたい。從つて萬葉三の暖所見は　暖けく見ゆ　暖かに見ゆ　いづれに訓むべきか輕率には斷じかねる。

三、暖けしと暖かしとは時代による變遷であるが、寒くと寒けくとは時代的變遷ではない。寒けくは寒きことの意で（62 63 65 66）、元來寒くとは用法の異なることが多い。但し寒けき　寒けし　といふ形容詞は、平安朝末期よりの用法である（67—73）。

四、奈良朝の古きをのみ正しとする說又は三代集以前のみを取る說に從へば、寒けくすめるといふ形容詞の副詞的用法は誤となるが、語の變遷を認めて少くとも新古今頃迄を取るならば、寒けくはもとより　寒けし　寒けき　なども誤ではない。

三矢氏（高等日本文法）品田氏（歌學講座）等　寒けくすめる　寒けき　等を離じて居るけれども、絶對に拒否するのではないやうである。「後世の語だから萬葉の訓などには避けるがよい、歌にもよまぬがよい」といふ說と認められる。

五、寒しは寒き事な直示し、寒けした寒げなる意といふ貴說（大言海なども同樣）は、露けしなどに特によく當るやうであるが、さやけく　はるけし　のどけく　等には當らぬやうである。

六、要するにけくはかにの轉ではない。本居說でもけしの方が古いといふのであるから、かにの轉ではない。元來きことの意であること、かけまく　いはく　思へらく　見らく　のくに似てゐる。故に體言としてのみ用ゐるのが古の格である。後に副詞乃至形詞（く　し　き）に轉化したが、中には十分の發展を遂げない者もあつて、くのみ又は　く　き　のみを用ゐ或は　く　し　き　を用ゐるやうになつた者である。此の類の語の中、露けしのみが露けゝれどといふ用例があつて（78）、他の語には已然の用例が全然ない事も合せて考へるべきことであらう。

次に此の類の語の用例を掲げる。

二　かにともけしともなる語

○印は名詞的　◎は形容詞的

奈良朝以前

暖　○1 原夫天地陰陽（クヅヌレバ・サムクアタ・カニシテ）不使四時亂（孝德紀）

平安朝以後

○2 松の雪のみあたゝかげにふりつめる（宋摘花）

○3 空のあたゝかなる程はかくしありきて（後院）

◎4 阿太々介志（新撰字鏡）

さや○6君が上は左夜加爾伎吉都思ひし如く（二〇）
○7朝月夜清爾見者（一下）
◎8射る的形は見爾清潔之（萬六一）
◎9秋風の清夕（二〇四三）
◎10佐夜氣久負ひて來にし其の名ぞ（四四六七）
◎11立浪のよらむと思へる磯の清左（一二〇一）
○12立浪のよらむと思へる濱の淨矣日（一二三九）

明○15分明欲知其狀（允恭紀）
◎16以清白意敬奉神祇（孝德紀）
◎17明久吾知事乎（三八八六）
◎18安伎良氣伎名に負ふ伴の緒（四四六六）
○19明らかなる火影を流石に耻ぢ給へる（横笛）
○20明らかにましまさば（明石）
◎21分明、佐也介志　明介志（宇鏡）
◎13淵も瀬も清くさやけし（續紀三十）
◎14分明　佐也介志　明介志（宇鏡）
◎5あたゝけき春の山邊に（大江千里集）

寛○22五穀豐饒…百姓富寛（仁德紀）
◎23己伎婆久母由多氣伎可母（四三六〇）
◎24海原の由多氣伎見つゝ（四三六二）
◎25寛　見乍ものもひもなし（二九六）
◎26寛　公をおもふこの頃（一六一五）

のど○31能杼爾波不死と云ひ來る（第十三詔）
○32流るゝ水も能杼にかあらまし（一九七）
○33立浪も篦跡丹は立たず（三三三九）
ノドカ　ノドケシ　共に見えない。」
○27翁やうやうゆたかになり行く（竹取）
○28殘の齡ゆたかに經べき心がまへ（若紫）
○29袂ゆたかにたてといはましを（古今）
◎30傀　美也盛也　偉也勢也　由太介志（宇鏡）
○34のどかに思ひならば（帚木）
○35のどかに袖かへす所を（花宴）
○36彌生三日のどかにてりたる（枕草紙）
◎37花に似ずのどけき者は（貫之集）
◎38綠の空ものどけくて（朗詠下）
○41悠　長也　遐也　波留加爾（宇鏡）
○42はるかなる山里に住みけり（伊勢）
○43はるかなりつる桂川（土佐）

遙◎39子規鳴きとよむなる聲の遙佐（一四九四）
◎40子規鳴くおと波流氣之（三九八八）

静

○47 構幽宮於淡路之洲寂然長隱者矣（神代紀）
◎48 敢へて漕ぎ出む海上毛之頭氣師（三八八）
◎49 靜母岸には波はよりけるか（一二三七）
◎50 靜雲　君にたぐひあすさ（もがも（三〇一〇）

けさは一旦けく活形容詞となり、更に名詞的となつた者、かさは初から名詞的

○51 いみじく靜かに公に御文奉り給ふ（竹取）
○52 今靜かに御局に侍はむ（枕草紙）
○53 尙靜かなるけを添へばやとふと見ゆる（空蟬）
○54 靜かさや繪かゝる壁のきりぎりす（芭蕉）
◎55 靜けさに昔のあとを尋ぬれば（新勅撰）
◎56 寂寞のこけの岩戸の靜けきに（新古今）
◎57 靜けさや水鳥眠るうしろつき（之房）
俳句大觀に靜かさ七句　靜けさ一句

三　かにとはならずけしとなる語

○は名詞的　◎は形容詞又は形容詞からの轉成

奈良朝以前

惜

○58 足なゆむ駒の乎志家口母奈思（三五三三）
○59 短き命も乎之家口母奈思（三七四四）

萬葉に此の外をしけくもなしの例五つあるが何れも、けが假名書になつて居ない。

欲

○61 長き命を欲苦波（七〇四）

寒

○62 君としぬれば冷雲梨（二五二〇）
○63 山の嵐の寒久爾（七四）
◎64 寒暮夕はやまとし思ほゆ

元暦校本の或本の訓はサムケキヨヒハ

平安朝以後

◎60 淵に身投げむことや惜けき（胡蝶）
○65 今朝おく露の寒けくに（詞花基俊）
◎66 頭の雪も寒けきに（基俊集）
○67 秋の夜風の寒けくに（元輔集）
◎68 秋の夜風の寒けきに（拾遺元輔）
◎69 本あらの萩に露や寒けき（後拾遺長能）
◎70 わたるあきさの音の寒けき（賴政集）
◎71 人も集めぬ雪の寒けさ（定家歌合）

露

右の中（二）卽ちかにとなる語のみが、けく活（けく　けき　けし）となり、さうして萬葉集では、特殊假名遣の所謂乙（氣）類のみが用ゐられる。（三）卽ちかにとならない語は、けくとなるのみで、けき　けし　などとはならない。さうして萬葉集では特殊假名遣の所謂甲（家）類のみが用ゐられるといふのが、通說の如くなつて居る。成程萬葉の語法としては、さう見るがよい。しかし之を以て平安朝以後の者までを律しようとするのは首肯出來ない。若し之に從つたなら、80や66 68以下の　惜けき　寒けき　寒けし　露けき　等をも否定しなくてはならないことになるが、其は餘りにも萬葉語法に捉はれ過ぎた者である。

◎72 寒けしやつがはぬをしの終夜（千五百番歌合）
◎73 寒けくすめる二十日あまりの空（徒然草）
◎74 我は露けき秋も知らるゝ（後撰）
◎75 露けかるらむ袖をしぞ思ふ。（同）
◎76 露けき事のかくもあるかな（源順）
◎77 いくかへり露けき春をすぐしきて（藤裏葉）
◎78 何にしのぶのといと露けゝれど（奏）
◎79 道の程いと露けし（賢木）
◎80 露けき折がちにて過したまふ（御法）

第十五　降りさうだ　降るさうだ

一　質　問

（某女學校教諭よりの質問）一年生國語文法教授の際（形容動詞の時間）次の質問が出て困りました。

「雨が今にも降りさうです」の降りさうですは形容動詞ですか。

其をこちらから

「雨が今にも降るさうです」の降るさうですは何う考へますか。

と反問しましたところ、生徒は「降るは動詞、さうですは助動詞です」と答へました。連用形接續の場合と連體形接續の場合とで右の樣に區別してよいかと存じますが如何でせう。

降りさうだ　義さうだ　嬉しさうだ　など形容動詞の方の例を擧げさせますと、生徒は差支なく答へました。さうを接尾語として、品詞から轉成した者と考へて、よろしいでせうか。どなたかの御說に、さうだ　さうです　を助動詞として、連用形からのものは、推量、連體形からのものは傳聞とあつたやうですが、推量といふよりは生徒の申す樣に、狀態と見た方がよくは無いでせうか。何卒御教へ下さいませ。

一　賞　問

（答信）誠に大事な御質問です。此の二つのさうだに直面した人は、少くないでせう。中には立派な解決を與へる人もありませうが、どうかするといゝ加減に取扱つて、折角の生徒の考察の善い芽生えを殺してしまふ人もあるのではないかと疑つてゐます。私の所見を次に申述べます。

二　さうだの品詞

松下博士は二つのさうだを、同一動助辭が、連用にも連體にも附くと見て居る。大槻博士の大言海には「降りさうのさうは、接尾語狀（さま）の音便で、大樣がおほざうとなるのと同樣である」といふやうに解して居るが、降るさうの方は擧げて居ない。

松下博士は、さうの語源を、うれしさなどの樣に形容詞の下につくさの延音便と見て居るが、聊か異見を挿みたい。其は音便ならば、原の語と同意義の筈であるのに、うれしさとうれしさうとは同意義ではない。其の上此のさは形容詞にのみつくのに、さうは動詞にも附く。此の點說明に飛躍がある、特に連體の下に附いた者、うれしいさうだまでを同語といふのは無理である。

私見では、矢張り、降りさうだのさうは樣の音便であるといふ大槻博士の說に從ひたい。さて降りは連用形の名詞法、其に接尾語的になつてではあるが、名詞の樣が附いて、一の熟合名詞を形くつた者である。だは山田博士の所謂形式用言私見の不完全動詞と斯う分解する。餘りに分解し過ぎるやうであるが、成立からいへば、之に相違ない。但し形容詞性を有する名詞の下に、なり　たり　だ・です　等の附いた者を形容動詞と稱する立場から、降りさうだを形容動詞といふのは差支ない。又松下博士のやうにさうだを一動助辭と見るのも差支は無いが、其の成立は右の如く　降り　さう　だ　である。

よささう　高さう　は　よさ　高　といふ名詞とさうといふ接尾語的名詞との合した者で、うれしさうもうれし顏うれし泣　などの遣語法と同樣、名詞と名詞との合熟した者である。

降りさうだ　降るべし　が同意義であつて、べしが助動詞だから、さうだも助動詞だと考へるのはよろしくない。

其は

- 花に似たり
  - 花の如し
  - 花らし
- 雨降りたり
  - 歸りたし
    - 歸らまほし
    - 歸らばや
  - 雨既に降る
    - 歸りてしかな
    - 歸るを得ず
    - 歸られず
    - 歸らず
    - 爲さず
    - I do not

此等をそれ〴〵對照して考へると、其の語の表現する內容が同一であつても、之を同一品詞と見るべきでない者の多いことが明かである。

降るさうだの方は、三樣の見解が存し得る。

1　降る狀の音便。此の場合さま即ちさうは接尾語的ではなく、純粹の名詞である。

2　松下博士によれば、連用形に附くのと同じ動助辭が、附く所を異にし、其の結果意義も違ふことになる。

3　私見によれば知らせ又ばたよりの意を現す名詞左右から來たと見られる。

其の左右を今や今やと待ちける所に、（太平記八）

こちからさうを致すまでは必見させらるゝな。（狂言隱れ笠）

三度飛脚の江戸の左右待つ夜も漸く更けにけり。（冥途飛脚）

此等の用例から、3の說を唱へたいが、强ひて主張する程ではない。何れにしても降るさうだのさうを接尾語と見るのは無理のやうである。

三　さうだの意義

松下博士は、降りさうだの如く、連用形に附いた方をべしと同樣、當然の意の動助辭と說き、降るさうだの如く連體形の下に附いた方をば、不確の動助辭と說いて居る。

生徒が降りさうだを狀態を表すと答へたのは大變よい答である。松下博士のべしと同一視する說からいへば、推量とも言へるが、矢張狀態を推量するといふよりは、推量しての狀態を表すと見たい。此の點主觀的のらむなどとは、大分違ふ。其は降りさうだらうといふのと比較して考へるとよく分る。降りさうだらうは甲がふりさうだと推量する狀態を更に乙が推量するやうな關係になる。

連體形の下に附いた降るさうだは貴見の通り、傳聞と見るべきで、松下博士の不確といふのは、物足らない。降りさうの方は、讀み人　泣き顏　などと同樣、合熟の一名詞で、結合が緊密になつて居るから、動作的觀念は、殆んど表現されて居ない。降るさうの方は、讀む人　泣く顏　などと同樣、動詞と二品詞が左程緊密に結合されて居ないから、動作的觀念が少しも減殺されずに表現されて居る。私見としては、品詞はさう六かしく說かないでも、其の意義用法の方に力を入れるがよいと信じて居る。（昭和一三、九）

第十六　其の折々

一　國語教材の語法的檢討

語法的知識が文を書くに際してよりも、寧ろ讀解に際して必要な者であり、從つて　鑑賞　批評　の基礎にも爲るものであるといふことは、今更申すまでもないが、さま〴〵の誤讀誤解があるので、其の例を擧げる。

1　清見潟を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、（後基朝臣東下り）

都にかへる夢といふのを自分が都に歸る有樣を夢に見ると誤解した教授又は其の點極めて曖昧な教授を見たことが二三回ある。此は都の樣を夢に見るのであつて、波の音の爲に眠れない、從つて夢が都に歸らないことになるのである。此の誤解の由つて來る所はさへの用法に馴れない爲である。文語のさへが口語のさへと違つて添へ加はる意であることはいふまでもないが、さへのみでなく、一體に係助詞（山田博士の副助詞を含む）全體を通じて次のやうな二種の用法がある。

（甲）二つ又は二つ以上の物についていふ場合

例　雨は降る。……はの附いた語が表す物卽ち雨と其に類した物雪などと二つの物を區別して、雪は降らずの意

昨日こそ雨は降りしか。……こその附いた語が表す者卽ち昨日に類した　今日　一昨日　等から昨日を抽き出して一昨日や今日は雨降らずなどの意

（乙）二つ又は二つ以上の事柄についていふ場合

例　雨は降る。……雨降る　風吹く　などといふ二つの事柄の中一方を他より區別して風は吹かずの意

花こそ咲きたれ。……他の物は咲かずの意ではなく、風騷し　鳥鳴く　等多くの事柄の中、一を抽出し、他を否定する程の意

此を基本として考へる時、都にかへる夢をさへ云々は

（い）我が身を都へ歸さない。

（ろ）波の音が夢を結ばせない。

（い）の上に（ろ）が添へ加はる意であるのを、清見潟といふ土地柄、（い）（ろ）共に關守の所爲に見立てゝ、此のやうな表現法を取つた者である、ことが明かになる。（項「夢がたり」末尾參照）

2　さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから討手の攻め來りなむ時にはかなき樣にて屍を暴さじ。公と聞ゆともみづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、（新嶋守）

あなれ卽ちあるなれを咏嘆と見て、アルハイと口譯するのも感心出來ない。其程强い表現ではない。此はアルヤウダといふ推定の意に見たい。其の理由の詳細は拙著國文法論攷終止の下のなり非詠嘆論に讓る。其はともかくもとして、ものからがどもに近い意であることは、是非とも之を明かにする必要がある。又かつはといふ副詞が普通の者とは違つて、一つには の意であることも明かにすべきこと多言を要しない。

さて思ひなりてをお思ひになつてと解した授業を見たことがあるが、此は義時に對して敬語を用ゐたことになつて情ない心地がする。然らば之を何う解すべきかといふに、此は化りてである。卽ち

初……滅亡の時が來たのであらう。……と考へた。

後……(い)犬死はしたくない。

(ろ)朝廷とは申しても天皇御自身なさることではない。

(は)一つには我が身の運命（果報）を試して見よう。……と考へた。

かくの如く考が變つたので、思ひ化りてといつたのである。ものからといふどもに近い意の語で、之を接續したのも其の爲である。次に且はといふ語は、(い)　(ろ)　二つと　(は)　とを接續して、三つの理由で考の變つたことを表したのである。此等の點を徹底的に說明するのにはどうしても此の文を闡明する關鍵ともいふべき語　あなれものから　かつは　思ひなり　等に對して、其の認識を深めなくてはならない。（昭和九、一二）

二　「天草本平家物語」を讀んで

『天草本平家物語』が國語學上の至寶であることはいふまでもない。此の書とその姉妹篇たる『文祿舊譯伊曾保物語』とが、斯道に志す人々に多大の興味と研究資料とを提供した事は、蓋し計るべからざる者がある。吾々は之を飜字された新村出博士と龜井爲孝氏とに對して、滿腔の感謝を捧げねばならない。さて此の平家を卒讀した當時、私見を發表したいと思ふこともあつた。けれども、取紛れることがあつたのや、本年一月に湯淺幸吉郎氏が、教育研究論文集に、此の書に特有な文法の研究を公けにされたなどの爲に、今日まで捨て置いたが、胸中の小疑解く由もないので左に一言する。

飜字の誤かと思はれる者がある。

1　五五頁　雷は常に鳴り上り鳴り下り麓には雨が繁うて一日片時も人の命絕えてあらうずるやうもなかつた。絕えては堪へてでなくてはならない。流布の平家もさうなつて居る。

2　六五頁　重盛叔父の宰相殿を呼うで……宰相手を合せて喜ばれた。「下る時もこれほどの事をなぜに見は申

受けぬぞ」といふふりで、私を見る度に涙を流いたが不便にござると申されたれば、見は申し受けぬぞでは意が通じない。みは身であつて、我の意に用ゐたのである。正徹物語に

身が家は一條東洞院に在りしなり。

とあるのなどを初めとして、みを一人稱代名詞に用ゐること極めて多い。即ち此は「何故に我をば申受けぬぞ」の意に相違ない。

3　一六四頁　幼い者共をば誰に御譲つて何となれと思召すぞ。

御譲つてといふ語は面白くない。みといふ敬語は、動詞の上に用ゐらるべき性質の者でない。古事記に

拔所御佩之十握劒

とあるのを、古訓本延佳本校訂本共にミハカセルと讀んで居るのを、故三矢博士は次の如し斷言して居る。

佩はハクなるをサ行四段に活かせてハカスといへば御佩なり。それに所の字を添へて完了態にしたるは、ハカシタル　ハカセル、にて文字通に敬意も整へるに、何とて無用のミをば添へたらむ。佩刀ならばこそ名詞ゆゑハシ　ともいふべけれ。動詞に添へるは先賢の千慮の一失なり。

「かまへて酔をおまゐるな（醒睡笑）」といふやうな一二の例外もあるが、御譲るといふ語は面白くない。それも他に譲字の仕様がないならば、原著者が外國人だから誤つたのだらうとも言はれるが、見ることを譲る、世話することを委ねるといふ意の見譲るといふ語があるから、其に相違ない。

4　一九二頁　さすが行家に組む者は一騎も居りなかつた。

おりやる（おりある）　おりない　は相對した語であつて、語源は　お入りある　お入りない　に相違ない。そして　おはす　御座る　おぢやる（お出である）　お出でなさる　入らつしやる　などと同樣

一　行くの意　二　來るの意　三　居る　あり　の意　四　でと合してなりの意

に用ゐられることは明かである。即ち居りないはおりないではなくてはならぬ。若し居るの打消であるならば居らなかつた、又は居らなんだとなる筈である。國語調査會のゐらつしやる説も甚しい誤である。此の書にも二七五頁

全くこれにはさやう人はおりない。間違でこそあるらう。

などを初として、多くはおりないとしてあるのに、此の處だけどうした者であらう。

5　二五〇頁　聊かも思ひこめた色の終りのなかつたこそいつの世にも忘れがけたれ。

此も意味が通ぜぬ。此は色のお有りのなかつたこそであらう。原書を見ない自分には原書が Oari, Voari, Vouari, 等の中どうなつてあるかわからぬが、著者の誤か誤植か誤譲かに相違ない。

6　二八七頁　諸地下されうずるとて、下し文ともあまたなし置かれ、

諸地下されも諸はれない。此は所知下されに相違ない。東鑑暦仁元年九月九日の條などにも「可充行官仕忠老之輩並所知替」などとある。其の他所知の文字は珍しくない。

啓發を受けた事も少くないが、著しいこと三個條だけをあげる。第一にはしんだいといふ語についてゞある。

7　四二頁　田園悉く一家のしんだいとなつた儀は稀代の朝恩でござないか。　　註　Xindai

8　七九頁　八十餘箇所の知行を進退せられたれば

参照　右の狐かの狼の跡式を押領して身代して居たを【文祿伊曾保物語】7のしんだいは平家物語教訓の事（重盛諫言）の中に

田園悉く一家の進止たり。之稀代の朝恩にあらずや。

となつて居るが、醫字者は疑を存して假名書にされた。その上、註までも入れてある。私見では7のしんだいも8のと同樣、進退であつて　自由處置　領有　の意であつて、流布本の進止もその意に相違ない。さて此から考へると、

しんだいをふやす。　　しんだい棒にふる。　　しんだい限となる。

などといふ現代語のしんだいも、矢張此の進退から起つたものであらう。自由に處置する意から領有の意となり財産の意になるのは、極めて自然である。然るに言海や大日本國語辭典をはじめ、しんだいをみのしろと同樣に見て身代といふ字を宛てゝ居る。身代といふ字は宛字と考へれば、先づよいとして、みのしろといふ意義になる樣な說明は感服できない。みのしろは

幼きを買ひ取りて候ふ……此の文と身の代と……（謠曲櫻川）

身の代女一重三賣に供養し奉る。（謠曲自然居士）

當年の御年貢に行詰り、我等子供又四郎と申す者身代金四兩請取預け申し、……（伊能文書）

小法師はらのもたぐべくもあらぬ屏風などの高きいとよくしんたいし、（枕草子）

兩國の間には國司目代の外皆秀衡の進退なり。（平治）

我が家の諺をばよそに見て身體のはてんずるをとかなしび居けり。（出所失ふ）

こちが身代で五百兩や千兩遣ふたら何じや。（淀鯉出世瀧徳）

などの如くみのしろは身の賣買金の意にのみ用ゐられて、財産の意には用ゐられず、又しんだいは決して身の賣買金の意には用ゐられない。此の兩者は斷じて混淆してはならない。

第二に　や　か　といふ語の用ゐ方に珍しいのがある。

9　二二二頁　なましひなること言ひ出だいて證人にか引かれう。

10　三六頁　若し此の謀叛遂げられたならば御邊とてもおだしうやあらう。」

11　三二五頁　此の後七八十を過させらるゝとも思へば程やござらう。

今日の口語では、問や反語にやを係にも結にも用ゐることはない。そしてかも係に用ゐることはなく、結にのみ用ゐられる。しかるに此の例によつて當時は口語でも　や　か　を係に用ゐた事がよく分る。

第三に深く自分を考へさせたのはまらすといふ語についてゞある。

12　此の宮の御命には宗盛が代りまらせうずる……さらば早く出家させまらして御室へ入れまらせい。」

13　さらば夜がふけまらせうずれども語りませう。」

14　さあらば自害をば思ひ止まりまらした。

15　難はゐるか……ゐまらせぬ。

（參照一　【奴一兵衛】これさ上方のお旦那糟味噌汁の御恩にかへた若衆愛で死なねば、心中が見へまらせぬ。是非に死なせて下され。……〔心中宵庚申〕）

（參照二　さらば福の神で御座ある、おいとま申まいらする〔醒睡笑〕）

此のまらすに就いては湯淺氏の說もあつたが、誠に此の書には無數といふべき程の用例があるので、此の語を研究するのに非常に都合がよろしい。さて此の語の用例を考へて見るに、12の樣に三矢博士の所謂關係敬語（目的などを尊敬するもので奉るや參らすと同義）に用ゐられたものもあるが、13 14 15の樣に所謂對者敬語（聽く人讀む人を尊敬するもの　候ふ　侍り　ますなどと大體同義）に用ゐた者が多い。

其の語源は參らすから起つた事は爭はれないが、單に意義の上に小異があるばかりでなく變化も少々ちがふ。即ち參らすは下二段活であるのに、まらすは佐行變格に用ゐられる。それは14の例や

16　心得まらした。

17　元々のやうになしまらし

などといふ例でよく分る。

それで此の語について次の如く考へる樣になつた。口語のますの語源については、

一、座すといふ四段活動詞からといふ說（文部省國語調査會口語法別記　松下大三郎氏）

二、申す、申すといふ四段活動詞からといふ說（三矢博士）

の兩說あるが自分は先年國學院雜誌に

三、おはすといふ佐變から　おます　ます　となつたのであらうか。」

といふ一說を提供したが、今此の天草本平家を讀んでまらすといふ語についていろ〳〵考へて見るとますに關係のあること疑ふべくもない。

（一）まゐらすといふ語が（二）この書や伊曾保などのまらすとなり、（三）次に狂言などにあるまつす、まうす、（奉る御馳走するの意佐行變格）となつたのであらう。

五百匹に買ひまうせう。

主の機嫌直しする囃物教へまうせう。

つれて來て食ひはじめをさせまうせう。」

いかにも喰はれまうせう。

此の樣な狸はまれなうりまうせう。

二　「天草本平家物語」を讀んで

まづ狸をかくしまうせう。

どれ〳〵そのこぶを買ひておまうせうぞ。」

又此の祝儀におあし一貫まつすぞ。

知りやらずば教へてまつせう。

今日はそちにおませうと思うて酒肴を調へておいた。」

初酒をおましたわいの

焙焙　肴で　だごまうそ　（長子語）

更に此が轉じて、（四）江戸期や九州方言などの　まうす（言ふ意の動詞でなくますと同意）となり（五）現代標準口語のますとなつたのである。斯う考へるとますが對話口語となつた徑路も、佐變であることも、說明が出來る。

三矢博士の高等日本文法に、對話敬語の五種類を擧げた後に、ヤソ舍學林出板の葡萄牙宣教師の編せる日本文典により、十二種の書からまらするの例をひいてあるのは、同博士も初とは意見が變つて、まらすからますが、出來たと見たものであらう。但しますの語源を申すといつて居るのを生かせば、まらすをばますの訛言の如く考へられたものでもあらうか。さうすると、意義についての意見は自分と同じであるが、語源については自分が

まゐらす――まらす――まうす――まつす――ます

と考へるのとは餘程違ふことになる。（昭和二、九）

三　湯澤氏の「國語史近世篇」を讀んで

湯澤氏は曩に五山抄物を材料として、「室町時代の言語研究」を公にし、後「德川時代の言語研究上方篇」を發表した。此の兩者が斯界に對する貢獻の多大であることは今更いふまでもない。其の研究努力は筆者の私かに敬服して措く能はざる所であるが、今又「國語史近世篇」を公けにされた。筆者も十數年前「近代口語一班」と題して、室町末期から江戸期にかけての口語に關し、覺書樣の卑見を公にしたこともあるので、深い關心を以て本書を通讀した。其で失禮に亙るをも顧みず、聊か所感の一端を述べる。

本書は、大體前刊の江戸時代の言語研究の概括で、後期江戸篇を含めた者といふべく、

（い）當代所產の　歌舞伎　浮瑠璃　等の資料によつて、

（ろ）前半期の京阪語　後半期の江戸語　を標準語と認め、

（は）發音現象　活用語　補助用言　助動詞　助詞　を主として、論述した者である。

資料は頗る廣範圍に亙り、しかも「室町時代の言語研究」及び「德川時代の言語研究」が專門家以外の一般讀者には稍資料多きに過ぎる又は所說微に過ぐる感を懷かせる恐があつたのに反して、此は適切な例が適度に引かれて居るのは、如何にも心地よい。且前者が、原書の俤を存する爲ではあるが、引例を片假名のまゝにし、且所謂改正

假名遣案によつたのに對し、此は平假名にし、現行假名遣を用ゐたのも、感じがよい。

前半期の京阪語は室町末期の者と大差が無いので、此を江戸期の言語と見るべきか、室町時代語の延長と見るべきかは疑問の餘地もあらう。筆者が曩に近代口語として、室町江戸兩期を一括し、個々の言語についてのみ時代的區別を說かうとしたのも、實は此の難問解決に迷つた爲であつた。さればといつて前半期の京阪語を江戸期から除外すべきではないかち、本書としては、此の區分が妥當な者といへる。

前記（は）に力を用ゐ、「其の他の品詞は、語法の上から見て、殆ど何等說くべきことがない」といふ理由で極めて簡單に略說し、本書二百二十三頁中僅かに六頁を費したに過ぎないのも、活用語と助詞とを生命とする國語に對する研究態度として、贊意を表するに吝かでない。たゞ副詞（接續詞を含む）の用法に就いては、特說すべき者があるやうに思はれる。

さて細部については、啓發を受けたこと又は贊意を表すべきことが多い。

1　手際よく音韻現象をまとめて解說されたこと、

2　形容詞未然形の下のば　には　ば　わ　二音あつたと認められたこと、

3　濁音佐行變格の上一段化の引例

4　口語形容詞語尾のしの用例

5　新しい助動詞　さつしやる　やんす　等の研究

6　推量の表現法

7　後期江戸にも　なんだ　が普通であつて、なかつた　は極めて少いこと、

8　昇りはせぬか　知らせも致さず　等の表現形式、

此の他にも、有益にして穩健妥當な解說が少くない。所謂口語法研究の聲が高く、中等學校の新要目では、大體初年級に口語法を授け、上級に於て國語沿革の大要を授けることになつた今日、斯道に志ある人々が現代口語の上流を說いて居る本書から受ける利益は、決して少くないであらう。

但し從來斯の種の研究の先驅を爲した者が餘り多くないので、未開拓の方面が少くはない。從つて人により所見を異にし、定說といふ程になつて居ない者もある。それで本書と異なる筆者の私見も若干無いではない。

1　さつしやる　は　させらる　から出た者であると斷言してあるが、此は其の活用から考へて、させある→さしやる→さつしやるの順で出來た者ではあるまいか。從つて54頁の(D)　やる　をば、(A)さつしやる　(B)さしやんす　(C)やんす等の前に置いて、(A)とし、之を此の種の語の起源と見たい。

2　「老年ぢや有ますまいし」「草臥れてもゐられふし」等の　し　は　から　の意で、並列の　し　と別であるやうに說いてあるが（徳川時代の言語研究も同樣）此は皆並列の意であつて、たゞ　他にも理由があるし　といふ程の意が省かれて居るものと見たい。

3　「が　が主語に附くことは、極めて普通の用ゐ方であるが、又、希望　好惡　能力　の對象を表すにも用ゐ

るやうになつた。」此の說明では、二種類あるやうに解されるが、此は、「希望　好惡　能力　を表す述語の主語の下に用ゐられることも多くなつた」といふやうに說きたい。

4　「前期上方ではましや（ますの命令）が普通に行はれたが、その起源は明かでない。」と說いて、來や等は來やれの略であるが、此は「接續の順序から……同一のものだとは速斷しかねる」と論じて居られるのは、德川時代の言語研究に「この見方は成立たない」と斷言してあるのに比較し、極めて愼重な態度である。私見ではますの連用ましの下には、現代語としては　て　た　が附くのみであつて、動詞　助動詞　などを附けないが、近世までは、

御門弟になりましたい。（醒睡笑）

初細見にのせまし候間、（牟婁古雅志）

等の例も相當あるから、まゐらせある→まらせある→ましある→ましやる→ましあれ→ましやといふ遷變を認めてよいと思はれる。

かういふ風に、所見を異にする點もあるが、其は假に筆者の說が正しいにしても、本書に取つては、白璧の微瑕であつて、勿論其の價値を損する者ではない。近來の學術用語が、動もすれば表現の新奇を求めて、讀者を苦しめる者が多いのに、本書の叙述が極めて平易明快であるのも、誠にうれしく思はれる。（昭和十二、四、十四）

四　三宅氏の單語分類說について

意見を徵されて、執筆を豫定して居た十二月八日は、宣戰の大詔降下、海戰大捷の報道等に老の心もときめきして、考もまとまらずに終つた。一週間後の今日、矢張落ちつかず唯かねての持說を本とし、思ひ付いたことを述べるに止める。

文の分節から說き起して、語脈の分節（普通に所謂文句の成分の大別か）に入り、其を基として、詞類分け（文句の成分の細別か）を試み、更に語類分け（品詞）に入らうとする趣旨には、贊成である。「文法は文章論より說き起すべき者である。品詞も文句に於ける機能の材料として、之を分類するがよい」と多年主張し來つた私見に合致し、じかも未だ思ひ及ばなかつた點まで說破したのは、多とする所である。但し首肯かねる迄も少くないので、敢へて私見を述べる。

第一文法上の文を、論理學に所謂判斷と全然同一の範疇に收めようとするのは、從ひ難い。「雪は降る」を「雪は降るなり」「雪は降る物なり」と見るのは差支も無からうが、「雪が降る」を「雪の降るのを見て『此は雪だ。雪がふるのだ。』といふ一瞬の判斷を判斷しつゝ、言表にはたゞその經過中の實質部分だけを取上げた」といふのは疑を挿みたい。此は單に知覺する所を其のまゝ言表したのではあるまいか。一步讓つて、此は瞬間的判斷だとし

ても、「我が思ふ人はありやなしや」「雪が降るか」「聲の限は我宿に鳴け」「ふれ〳〵粉雪」の如きは、判斷の範疇には收め得ないと信ずる。

元來人と人との交渉は　與へる　求める　の二方面であるが、言語も亦同樣で、1說明文（平叙文）は與へる方、2命令文は他の動作を、3疑問文は他の答を、求める方である。（感嘆文を之に並べるのは、西洋文法の模倣に過ぎない。又言語學者の中に「叫聲の言語への發展は1告知と2命令とである」と說く者があるのは、3を忘れたのである）此の三種の中1はなりを用ゐた純說明文は勿論のこと、之を用ゐない準說明文も、强ひて言へば「SはPなり」の中に攝取出來ないやうに思はれる。

「常に二分し二分して行くのが語脈の分節である」と說かれて居るが、然らば、

1、我　一年を去年とや言はむ
2、一年を　去年とや言はむ
3、去年とや　言はむ
4、一年　を
5、去年と　や
6、去年　と
7、言はむ

の如く分解して行くことにならうが、2 3又は5 6の邊に無理が生ずる恐はないだらうか。第一分節に於て主部述部と二分するのは、動すべからざる所であるが、其以外は時として三分節を取つた方がよいことがありはしないだらうか。

次に、成分の細別ともいふべき方を、詞類分けと稱し、普通に所謂品詞分類の方を語類分けと稱するのは、何うであらう。前者を語類別け、後者を詞類別けと逆にした方が穩かではあるまいか。同じ立場から　個詞＝後詞＝添詞＝副詞＝結詞＝といふ詞をば語（又は言）と改めたい（品詞の方のは貴案の通り、名詞代名詞として）。又添詞と副詞とは之を一括して添語とし、其を二小分して連體添語＝連用添語＝としたら何うであらう。斯うすれば其の結論は拙著國語法論攷に述べた私見と大體一致する樣に思はれるので、次に掲げて大方の參考に供する。

文句の成分
- 相關成分
  - 係
    - 一、主要分の甲　主語　客語
    - 二、從屬分
      - 連用的從屬分
      - 連體的從屬分（結に關せず）
  - 結＝三、主要分の乙　述語
- 非相關成分＝四、獨立分

（品詞は此等の材料となり　助詞　助動詞は此等の者に附屬す。）

次に「一つの語で二つ又は二つ以上の語類に所屬することがある。例へば誰は代名詞でもあり、同時に疑問詞でもある。……太郎は固有名詞でもあり、人格詞でもある」といふのは理解しかねる。普通の說のやうに「今は名詞であるが、時としては、副詞にも用ゐられる」といふやうなのならば分るが、同時にでは分類と言ひ兼ねはしないか。「此の分類は幾つ立てゝも差支ない」といふのは特にさうである。

最後に　は＝も＝ぞ＝なむ＝こそ＝や＝か＝を問投副詞と稱し、一面助詞一面副詞であるといふ說の根本趣旨には贊成であるが、名稱は如何であらう。又のみ＝ばかり＝だに＝すら＝さへ＝を此等と同一に見ないのは、山田博士の說によつたやうであるが、次のやうな例から、すべて此等の助詞を同類と見たい。

（い）花も咲きたり。……（他は咲かず）

（ろ）涙をのみ落す。……（他の物を落さず）

（は）賴光をさへ脅す。…（他の人を脅したる上）

の意ではない。即ち直上語だけに關するのではない。

此等はそれ〴〵（い）鳥も鳴きたり、（ろ）物などいはず、（は）神武天皇の御代朝敵となりたる上、等の意を有する。即ち全文の表す事實と之に類した他の事實（物だけではない）との同異を表すのである。此等は一括して何れも文句の全體の意を助ける（副詞と機能を同じくする）ことのある助詞と見たい。此の點、委細は拙著國語法論攷及び助動詞の研究結語に讓る。（昭和一六、一二、一四）

五　與水實氏の語法教授案を讀んで

與水氏の說を讀んで感じたことは次の如くである。

（一）小學校の語法教授は所謂機會教授でなければならないのいふのは、根本的、理想的に言へば慥かにさうである。しかし現狀でいへば此は結局教へない人が多いことになりはしないか。又其の反對、無暗に六つかしいことを教へるやうになりはしないか。斯ういふ恐が多分にある。其で第何課では斯ういふことを教へるといふやうに規定しておく必要があらう。尤も其の規定は、そんなに窮屈な者であつてはならない。極めて伸縮自在遣繰のつく者でなくてはならない。

（二）斷片的知識の集積でなく、體系を豫想した者でなければならないといふのは勿論贊成である。但し「べし」の用法を說明せよ」といふやうな出題は、考物であるが、べしの各種の例を示して、之に適當な口語を當てさせ、其を應用した例を作らせるやうなことは必要であると信ずる。

（三）語法が思惟の方式を作るものであることを考へて居なければならぬことも同感である。

（四）言語への感覺を鋭くし言語意識を養成することに主意を置くべきである。此も大體同意であるが、其の語感といふのは、所謂唯の感じ、或はカンであつてはならない。實例から歸納される所の、根據のある者でなくては

ならない。所謂鑑賞が多くは、カンによつて爲された彼の弊害は、前車の轍として警戒する必要があらう。

（五）基本語法でなくてはならないといふことと及び後に示した實施項目も大體賛成である。強ひて言へば原形と終止形とを教へること、此を同一視したのならば原形といふ術語を教へるに及ばないであらう。若し異なる者と見るのならば原形とは何を指すのか。不明であると同時に矢張教へないでよいと信ずる。

主語と主格との關係も考へる必要があらう。過去完了は教へるに及ぶまい。敬語の分類は、私の信ずる所と、やちがふので、學說論になるから、此處には詳說出來ないが、

1　主語を尊敬するもの（給ふ　なさる　になる等）

2　目的を尊敬するもの（奉る　申す等）

3　所有主を尊敬するもの（おん　ご）

4　對者（書き記される成分でない者）を尊敬するもの（ます　候ふ等）

かう教授した方が、主語　目的などといふことを教へた知識が生きてくるのではあるまいか。

（右の外、言ひたいことも若干あるが、十三年春の「國語教室」誌上に愚見を發表しておいたので此だけに止める。）

（昭和一五、三、二）

第十七　筆に任せて

一　大御心より出で奉る

老年の身は、映畫を見ることが極めて少く、從つて之を批判する資格は無い。しかし、先日人に誘はれて見た者に、出て來る俳優の臺詞の中に、どうしても默止出來ない者があつた。其は日本精神を相當よく表して、結構な者であつたが、

招魂祭の儀は、陛下の大御心より出で奉りましたものでござりまして

といふ臺詞は、餘りにも甚しい誤用である。奉るといふ敬語は、元來、述者（語る人又は書く人）が、其の語の中に表れて來る又は略されて居る何を又は何にといふ客語を尊敬する時に、用ゐるべき者である。更に詳しく言へば、捧げるといふ動作を表す純粹動詞の奉るは、必ず之を受ける者、即ち何にを尊敬する。例へば「神に御酒を奉る」の如くである。又、他の動詞の下について、單に尊敬關係を表す助動詞的の奉るは、二種の用法があつて、時としては「君に從ひ奉る」の如く、何にを尊敬し、時としては「君を迎へ奉る」の如く、何をを尊敬する。此の細別の如きは稍專門的な說明であるので之を辨へないでも致方ないが、

給ふ　る　らる　遊ばす　なさる　等は、何が（主語）を尊敬する。奉る　参らす　申上げ　等は、何に（間接目的）又は何を尊敬する。といふ程度のことを、苟くも文化事業に携はる者が、はつきり心得て居ないのは慨歎すべきことである。

さて然らば、此の臺詞を、何う改めたならよいかといふに、「大御心より出づ」は「陛下が御考へなさる」の意であるから、主語の陛下を尊敬する意の給ふを用ゐ、「大御心より出で給うたもの」とするもよいであらう。又强ひて奉るを存して置かうとするならば、「大御心に從ひ（又はを體し）奉つたもの」などとすべきである。

此の臺詞は、俳優の誤か、作者の罪か、分らないが、試寫の際にも、公開に及んでも、何人も之に氣附かなかつたといふのは、各方面に敬語問題の論議されて居る今日、何うしたことであらう。此の分で行けば、「親王、賊を攻め奉る」とか「義時、上皇を流し給ふ」などといふ怪文も、出て來はしないかと憂慮に堪へない。

學者によつては、奉るは、述者が客語（目的間接目的）を尊敬するのではなく、主語が客語を尊敬する意だと說く人がある。假に之に從つても、右の臺詞は主語招魂祭が客語大御心を尊敬するといふやうな、無意義の尊敬關係になつてしまふ。

序にいへば、右の臺詞中のましやどさりましといふ敬語は、招魂祭や　大御心や　陛下を尊敬する意の者ではない。對者（話を聞く人文を讀む人）を尊敬する意の語であるが、是亦誤解して居る人が少くないやうである。

二　ぐらゐ　ほど　しか

映畫俳優の臺語にもまして、廣く社會に影響を與へる者は、ラジオの、特にアナウンサーの用語であらう。此は立派な研究機關もあつて、十分に注意して居るとの事で、前項程の甚しい者は無いやうである。しかし時には精進をセイシンといふやうな奇語を聞くこともある。又「軍務局長師團長らの要職を經て」などといふのが耳に入ることがあるのは遺憾である。さて遺失物拾得の放送では

品川區内で、墓口一箇、中に十三圓ぐらゐ、……

といふやうに言ふのが通常のやうである。最初之を聞いた時に、「何だか少し變だな」と思つた。次には「自分なら何といふだらう」と考へた。さうして「十三圓程」といひたいと感じた。處が「然らばぐらゐと程と何う違ふかどちらも物の量について大略の事をいふ時に用ゐられる。甚だよく似て居るが、何處がちがふか」。此の自問には長い間答へ得なかつた。試みに辭書を調べて見ると、

大言海　　大日本國語辭典

ほど　　分限　　程度

ぐらゐ　　數量の程度　（ほど　ばかり　等と換言）

二　ぐらゐ　ほど　しか

の如く解して居るが、はつきりしない。様々思索して見た後、やうやく次のやうな私見に達した。ほどは明かに分つて居ながら、故らに大數をいふ時用ゐ、又程度の進む意がある。例へば

私の持つて居るのは、十圓程です。

見れば見る程面白い。

さうして此等はやゝ丁寧語（對者尊敬）の性質を帶びて居る。此等をぐらゐといふことはない。ぐらゐは大數は分つて居るが、精確には分らない時に用ゐ、又其の程度に止まる意の時に用ゐる。例へば

多分十圓ぐらゐでせう。

十圓ぐらゐ使つてもよからう。

此等にはほどは適しない。「十圓ほど使つてもよからう」といふこともあるが、其は十圓ぐらゐの場合十圓に止まる意或は之を侮る意があるのと違つて、ほどの方は十圓以上に上る場合も含まれて來ると同時に侮る意がない。

文語のばかりにのみの意の者と、程の意の者と二種あることは、古來の學者の言ひ來つた所であるが、口語のばかりにも兩方ある。「あなたばかり知つて居る」はのみの意で、「これんばかりも知らない」は程の意である。後者は口語に少いこと言ふまでもないが、これんばかり　は　此程　此ぐらゐ　兩樣に換言出來る。此等から考へると程とぐらゐとは、全然別なのではなく、どちらでもよいこともあるが、同義ではないのである。

次に「十圓しか無い」「此しか知らない」のしかはほかと換言することが出來て、「花より外に知る人もなし」等のほかと同義であること勿論であつて、其の下に　なし　ない　の來ることも同樣である。しかし語源は何う見たらよいであらうか。ほかの音韻轉化としては、其の徑路がうまく説明しかねる。淺野信氏は、此のしかは爾云ふなどのしかであらうと言はれたが、用法の上から考へると、何とかして、ほかと結び付けたいやうに思はれる。九州方言に之に似たしことといふのがある。但し此は「此しこある」のやうに、肯定の時にも用ゐるので、しかと同語源か此亦疑しい。

三　國本に不拔に培ふ　糧に敵に因る

詔書の中にも宣はせられた語であるが、國本をと誤つたのを聞いたことがある。又最近

此はにをの意に用ゐたのではあるまいか。例へば　人に別る　人を別る　が同義なやうに

といふ問を受けた。此の問に對して、自分は下の如く答へた。

本居宣長等を初として、人に別ると人を別るとが同義な樣に説く學者もあるが、其は面白くない。富士谷成章の「別れ難いのを強ひて別れるのが、人を別るであつて、さまで惜別の情もなく別れるのが、人に別るだ」といふ説の方がよい。自分は別るは元來自動詞であるが、「人を殘し置きて別る」といふやうに、他動的の意を含ませる時、即ち成章の語を借りていへば、別れま憂き時に、別れる意を表す爲に、上に他動詞にふさはしいを用ゐるのである

と考へる。其は專門過ぎる說明であつて、異說も成立しようが、假に宣長の說の如く、に　を　相通を認めても、其は、にの代りにをを用ゐるのであつて　をの代りにを用ゐるといふことは極めて少いばかりでなく、此の通用は和歌とか擬古の文に限るべき者で、、漢文讀に應用するのは宜しくない。其で此は飽くまで國本にである。一般人がつちかふと養ふとを全然同樣に考へるから、此の樣な疑を起すのであるが、此の二語は意義は近いが、語として全然違つた成立である。やしなふは元來の一語で他動詞であるが、つちかふは元來土と養（か）ふと二語から出來た者で、土を被ひ養ふの義である。其の養（か）ふは他動詞であるから、土をかふであるが、一語となつた以上、（其の中に既に土をといふ意の語が含まれて居るのだから）自動詞であるから、其の上に何をといふ語を要する筈はないのである。卽ち「國本に土をかふ」であるから、國本をとは言はない道理である。倭名抄には壅の字を豆知加布と訓じて居るが、色葉字類抄に「壅　ツチカフ或云、壅三瓜茄」とあるのなども、「瓜茄につちかふ」と讀むを要する。描くも元來は繪かくから出來た語であるが、此の繪にかくともいへるから、其の上に姿をといふやうな客語を用ゐるのである。

最近又「糧を敵に因る」といふ語を見聞したが、此も首肯しがたい。因るは自動詞であるから、「糧に敵に因る」でなくてはならない。

遂救二倒懸之急一、存二幾〻亡之城一、兵全師進、因二糧敵人一（後漢書馬援傳）

救レ民略レ地因二糧于寇一（魏志傳蝦傳注）

の如き者、昔から糧にと讀んで居る。前記培ふ程の不都合ではないが、疑ひ誤る人が少くないので言及した。

四　君が代

國歌「君が代」の出典とか、國歌制定の事情とか、或は原歌「我が君は」と「君が代は」との比較、乃至代の意義といふやうなことは、專門がゝつて居るので、義務教育を受けただけの人の中に、知らない者があつても致方がない。しかし此の歌の大意について少しも分らない者、又は其の歌詞を知らない者が相當數あるといふことは、實に慨嘆に堪へない。かういふと「其は不就學者又は低能者に限るだらう。一般の、國民教育を受けた者の中には、そんな者はあるまい」と考へる人が多いであらう。特に文敎の局に當つて居る人、或は直接敎育に携はつて居る人は、多くは之を否定するかも知れない。筆者の言を疑ふ人は、暫く次の統計を見られるやう希望して止まない。

筆者は多年中等學校の新卒業生に接する機會の多い境遇にある。さうして、其等の卒業生中に、國歌を「苔の蒸すまで榮えませ」でなく、榮えるといふやうに解する者が半數ぐらゐあることを、慊らず考へて居た。其では說明的になつて、聖壽の萬歲を祈り奉る意が缺けて來る。此はまだよいとして、近年歌詞を知らない者が次第に增加するやうに思はれる。例へば「巖となりて」を「岩程なりて」と記憶して居る者が、どうかすると十％にも達することがある。自分が接する者は劣等生ではないのに、困つた者だ。中等學校卒業生さへ此の通りでは、國民敎育だけの

者は、果して何んなであらう。斯う考へて、懇意な、東京都内と近縣との中等學校の先生に依頼して、調査して貰つた所、次のやうな結果を得た。

對象　第一學年生及び第二學年生二百八十八名

問題　國歌「君が代」を書いて、之を解釋せよ。（むすまでの次に省かれて居る語を補へ）

甲　記表の部

一　巖と

1　正、及び　いはほと　岩ほと　86

2　いわほと　いはをと　いわほと　いわおと　巖をと　ゆはほと　ゆわをと　いわほに　等　110

3　いはほど　いは、ほと　岩程　等　44

4　岩音　いわおど　いはをの　等　10

5　にはほと　にはをと　にわおと　にはおと　庭ほど　にはに　等　29

6　不明　9

二　むすまで

むうすうまあで　むんすうまあで　むうすうまあれ　むうすまはれ　等　50

乙　解釋の部

三　さゞれ石の

1　正及び大體可　146

2　千代に八千代にさゞれ、（さゞれといふ語を榮えよの意と考へて居る）　74

3　石の名　9

4　さゞれ石の　さだれ石　さゞれいち　4

5　不明　55

四　結尾

1　正及び大體可　94

2　榮えるのである　榮えるのだ　榮えるやうにする　榮えあそばします　150

3　榮えるであらう　12

4　……まで、　不明　32

一の2は恕するとしても、3 4 5 6の計が、三十%を占めること、二が十六%に達し、三のが2二十二%以上3 4 5が二十三%以上であることなど、唯々呆然たるのみである。此等の少年は、恐らくは、中等學校時代にも國歌について教へられることはないであらう。（前記の學校では勿論改めて教へられたが）さて卒業後直ちに社會に立つ者は勿論のこと、進んで上級學校に入る者も、爾後國歌についての講話を聞くとか、或は記された者を讀む機會がさう多

くは無いであらう。中には此のまゝ終る人も相當數あるであらう。

日本精神の昂揚　國體の發揮　が高く叫ばれて居る今日、果して此でよいであらうか。一體此は何人の罪か。筆者の信ずる所では、此は生徒の罪ではない、教へざる教育者乃至教へしめざる當局の責任であらう。」

第十八　假名の發達

日本語教育振興會の委囑により此の一篇を草することになつた。時日と紙數とに餘裕があつたなら、古今の大家の説を改めて檢討し、私見を添へて之を紹介することも出來たらうが、其さへも叶はない。隅岡八幡の鏡銘　新井白石の同文通考　岡田眞澄の假字考　伴信友の假字本末　大矢透氏の假名遣及假名沿革資料や假名源流考　等を通覽して、思ひ付いたことを述べるだけに止める。

一　隅田八幡宮日本鏡の銘

假名の發明が、我が國民の文化方面に於ける、偉大な創造力の象徴であること、助詞助動詞等我が國特有の語の表現を容易ならしめ、平安時代文學の興隆に與つて力あつたことは、言を俟たない。然るに我が國最古の金石文たる和歌山縣隅田八幡宮日本鏡の銘が假名に關係あるのは國民が早くから漢字を國語に隷屬せしめようとする意志を有して居た事を示す者といふべきである。其の全文は次の如くである。

癸未年八月日十六壬年□弟王　在意柴沙加宮時　斯麻念長奉遣　開中費直　穢人今州利　二人等　取白上同二百旱作此竟

字體不明で讀解し難い者もある。例へば右の中の六は大かとも見られ、□は男らしくもあり、奉は壽だらうとい

ふ説もある。何れにしても、意柴沙加（忍坂）といふ地名、斯麻年長　今州利といふ人名は、音を假用して、字義を捨てた者であるから、萬葉の音假名と同樣の用法である。又同は銅の略字、竟は鏡の略字であるが、漢字の偏傍を省いて、片假名を作るやうになつたのと、同じ趣旨からの所產である。更に言へば、此の中の加から　片假名のカ　平假名のか　が成立し、利から　片假名のリ　平假名のり　が成立して居る。又日本書紀神功皇后攝政の四十六年及び四十七年の條に「百濟人久氐彌州流」といふのが見え、四十九年の條の自註に「今云州流須祇」とある州もツ　と讀むべきである、釋日本紀祕訓に「州音都」とあるのなどから考へると、前田夏蔭の「萬葉　宣命　等に川をつ　と讀ませてあるのは州の略字で、後世の　片假名ツ　平假名つ　の起源である」といふ説が尤の樣に思はれる。右の鏡銘の州利もスリではなく、ツリであらう。さう考へると僅かに四十字餘りの銘文の中に　片假名　平假名　の字源が延數六箇含まれて居ることになる。

二　漢文による表現

應神天皇の御代に、公然朝廷に漢籍を奉つた餘程前から、少しづゝ漢文が渡來して居たことは言を俟たない。其は德川幕府が洋書の禁を弛める前から、蘭學が輸入された狀態に比するよりも、寧ろ明治維新政府の洋學奬勵前から、洋學が相當傳來して居たのに比すべきであらう。

さて其の前後公私の間に用ゐられた漢字の使用法には大體次の五種類あつた者と思はれる。

1　漢文の白文「古天地未剖陰陽不分　渾沌如鷄子」「吾所知顯露事者皇孫當治　吾將退治幽事」（大國主命の語）の如き書紀の文は勿論のこと、國文脈を主とした古事記の中にも今「我所生之子不良」「追往黃泉國」「於是天皇登高山見四方之國」のやうな純漢文風の者が見える。前揭の鏡銘も人名地名の外は、漢文である。

2　乎古止點を附けた漢文　乎古止點の起源は、恐らく漢文渡來と殆んど同時であらう。我が國文と甚しく其の趣を異にする者を音で讀下すのならともかく、之を國語に宛てて讀むのには、どうしても我が國特有の天爾乎波を附け加へなくてはならない。其の自然の結果として、敎へる者學ぶ者共に何等かの符號を用ゐたに相違ない。此が乎古止點の起源である。既成の書を讀むのは普通の所謂表現とは違ふが、少くとも著者の思想を再現するに當る。其ばかりでなく、理解を容易ならしめる爲に、漢文の表現を用ゐた筆者自身が、乎古止點を附けることも絕無とは斷言出來ないであらう。遊仙窟に附けられた乎古止點は、稍後の者であらうが、左に其の例を示す。

井　贈　詩　左下て　右肩を　卽ち「併せて詩を贈りて」

只　恐　不　堪　右下は　中上む　右肩やゝ下こと　卽ち「只恐らくは堪へざらむことを」

三　漢文によることの出來ない表現

3　音訓の假用　前記鐵銘の如く、地名人名は、漢字の字義卽ち正訓を捨てゝ、其の音や國訓を假用するのが、自然である。古事記の　伊邪那岐　伊邪那美　伊豫　愛比賣　等は音を　產巢日　津(嶋)　等は國訓を假用した者である。記　紀　の歌謠は、夜久毛多都　又は夜句茂多荒の如く、何れも音のみを用ゐて居るのは、蓋し紛らしいのを避けた者であらう。萬葉集に至つては時として、「阿例波久江由久」「多流比女能」「多流比賣野」　の如く　音假名訓假名　を混用した者も見える。

假名專用は多く和歌についてゞあるが、天平時代の者と思はれる正倉院文書に

和可夜之奈比乃可波利爾波　於保末之末須美奈美乃末知奈流奴乎宇氣與　止於保止己可都可佐乃比止伊布……

(我が養の代にはおほます南の町なる野を受けよと大德が司の人云ふ。)

といふのがあるのは珍しい。

4　正訓と假名との混用　漢字を以て國語を表現するのには音假名のみを用ゐるのが尤も正確であるが、太安麿が「全以音連者事趣更長」と嘆じた通り甚だ煩雜である。それで音訓兩種の假名と正訓とを混用するやうになつた。前に擧げた大國主命の語も、正訓のまゝの漢文であるから、其の意を悉さない。

於底津石根宮柱布斗斯理(此四字以音)　於高天原氷木多迦斯理(多迦斯理四字以音)而治賜者、僕於百不足八十堌手隱而侍。(古事記)

の如くにして初めて、語其の者も心も分明になる。書紀の本文の方では漢文を主としながらも

●今我當於百不足之八十隈將隱去矣(隈此云矩磨泥)

としてあるのは、矢張純漢文では不十分なので、枕詞を加へ自註を施しなどして、國文脈を加味したのである。

5　萬葉體及び宣命書　前二項の表現を極めて自由に混用したのが萬葉體である。一歩進んで我が國特有の　助詞　助動詞等所謂天爾乎波を細く書いて、正訓(時としては假名書の　體言乃至用言語幹)から區別したのが所謂宣命書である。萬葉の中にも稀には宣命書を用ゐた者がある。

春過而　夏來良之　白妙能　衣乾有　天之香山(萬葉)

天皇大我命良宋等宣布大命乎衆聞食倍止宣(南京遺文　孝謙天皇宣命)

……過犯卒家雜雜罪乎……祓給比淸給事乎(祝詞式大祓)

虛見都　山跡乃國波　水上波　地往如久　船上波　床座如　大神乃　鎭在國曾(元暦校本　萬葉十九)

以上五種の表現法中1 2は漢文體といふべく3以下國文體といつてよからう。此の二體の中間の者卽ち漢文體にして國文體を加味した者、國文體にして漢文體を加味した者のあることは勿論であるが、此の五種の表現何れも相當の困難を伴ふので、吾人の祖先は非凡の能力と工夫とを以て假名を發明したのである。

四　平假名及び伊呂波歌の製作

俗說では、平假名は空海が作つたといふが、前項に述べた通り、漢文が意を悉さない爲に、國文脈を用ゐると同時に、萬葉假名等の煩しさを避ける爲に用ゐた草體から起つたので、或一二の人の創作ではなく、長年月の間に自然と發達した者に相違ないことは、第一項の鏡銘が或程度の簡易化を求めて居る點から考へても首肯できる。

考證の大家伴信友は其の假字本末の中に

書く人の心々に物せるから、其の用ふる假名もとり〴〵にて定らず。……空海僧都その草體の假字にもとづきて、さらに目安くなだらめ書きて四十七字音の字體を製り定めて、已が尊べる佛法の意を演て……

と說いて居るのが、大體當を得て居る。其の說の據とする所は、仲雄王の謁海上人と題する詩の句に

字母弘三三乘ノ眞言演三四句ノ一（凌雲集）

とあるのを第一として居る。現代諸家の說は區々であるが、大矢透氏は

（い）七五四句の歌は天祿以前ではない。（ろ）いろは歌のやうな略字體は貞觀以前に見られない。（は）延壽の頃まではあ行のえとや行のえと區別して居た。其は當時手習に用ゐて居た同じ音の無い筈のあめつちの詞に「え（榎）のね（枝）を」といふ句があるのでも分る。いろは歌は此の區別のなくなつた後の者である。

と說いて定說の如くなつて居るが、高野辰之氏は之を駁して、

（い）空海時代にも七五調の謠物があり、四句は偽頌の通形である。（ろ）字體は歌とは別問題である。（は）西行のえは昌泰年中の新撰字鏡にも混用の例があるから、空海作と見られる。

と說いて居る。格別の私見も無いが、源順集のあめつちの歌卽ちあめつちの詞の各音四十八首の冠と沓とに置いて詠んだ者を見ると、エを詠んだ歌は次の如くである。

えもいはで　戀の（にか）亂るゝ　心かな　いつとや岩に　生ふる松のえ
ねもせかで　涙の川の　果々や　强ひて戀しき　山は筑波ね

えもいはで　ねもせかでの二つのエは、同語であるのに、別個の樣に取扱つて居る。又　松の枝の枝は榎の枝の枝と異なる筈が無いのに、あめつちの歌の方では、之をのの前に置き、あめつちの詞の方では之をのの次に置いて居るのは、矛盾とも言へる。此から推すとあめつちの詞を手習に用ゐて居た當時、已に混同して居たので、此の混同は空海時代まで遡り得るのではないか。且凌雲集の詩の句は生かして考へたい。要するに平假名は自然に發達した者を、空海が或程度（今の者とは違はうが）字體を整理し、且同じ文字の無い讖佛の今樣にしたので、其の能書と其の內容と手習便宜との爲に廣まつた者であらう。」

五　假名及び五十音圖の製作

片假名は前掲の鏡銘から推しただけでも、萬葉假名の偏傍を省いて之を簡易にした者に相違ない。但し此は多くは漢文訓讀の爲に、乎古止點の代りに（或は乎古止點と相並んで）、用ゐられたもので、歌や物語を書くのには、餘り用ゐられなかつたやうである。

五十音圖の製作については、藤原長親が

到ニ於天平勝寶年中一右丞相吉備眞備公取下所レ通ニ用我邦一假字四十五字上省ニ偏旁點畫一作ニ片假字一（倭片假字反切義解）

と說いて居るが、長親は芳野朝の時の人であるから、時代的に考へて、何に據つたのか疑はしい。契沖は

吉備公の作などいへど、させる證なし。若常のいろはと共に弘法大師の作りたまへるか。（和字正濫鈔）

と說いて居る。前半の斷はよいが、後半は甚だ覺束ない。我佛尊しの嫌がある。信友の假字本末は長親の眞備說を取つて居るが、其の根據は本朝文粹中の三善清行の異見封事中に、「……吉備朝臣……令下學生四百人習中五經三史明法算術音韻擔象等六道上」とあるに過ぎない。大矢透氏は、「國語音を悉曇に合せて、其の次第を逐ひて排列せるもの」と說き、吉澤義則氏は「音圖の字音は當時の支那音卽ち唐音であるから、唐音に通じた人が悉曇音を記憶する爲か、或は悉曇を心得た者が唐音の心覺の爲かに作つたもの」と論じて居る。要するに片假名は自然に出來た者に相違ないが、五十音の製作は何人の手であるか分らない。

五十音圖の行・列共に今日では一定して居るが、行の順序が略本和名抄には羅摩阿可佐多那波和夜となつて居り、管絃音義には阿訶和袈耶婆摩羅多奈、又片假字反切義解には　アワヤナタラハマカサ　となつて居る。列の順序も顯昭の古今集註や、袖中抄には　カケコクキ　ラレロルリ　のやうになつて居り、古傳の樂家の譜は、イエアオウ、チテタトツ　となつて居る。富樫廣蔭の五十音分生圖は逆に汙於阿衣伊として居る。又阿行のオ（お）と和行のヲ（を）とが逆になつて居たのを、本居宣長富士谷成章の兩大家が正したことや義門の名著於乎輕重義のことなどは稍脫線の氣味があるので此處には省く。

六　平假名片假名使用

前述の如く平假名も片假名も自然に出來たとして、然らば專ら之を用ゐて表現した者の中、何が最も古いかといふと、今日殘つて居る者は、吉澤義則氏所說の如く

漢字の草體が假名として用ゐられて居る例も、古く奈良朝末期の正倉院御物中の文書に見えて居る、（國語史概說）

所から推して、平假名と稱してよい者が此の時代に用ゐられたらしい。伴信友は

藤原範兼卿の和歌童蒙抄に「業平が手づから紙屋紙に書ける伊勢物語の朱雀院の塗籠にありけるには云々」と見え、古今集に此物語をとりて載られたりと見ゆる事、其歌の詞書にても知れたり。云々（假字本末）

といつて居る。古今集の詞書や歌が初から平假名で記されたことは貫之自筆といふのが傳つて居るのでも分る。伊勢物語が其と同樣ならば、漢字交りの平假名で記されて居たに相違ない。竹取も大體同樣である。平安朝になつて和歌も物語類も、多く女流の手に歸したが、其の人々は漢文には餘り親しまず、此の平假名によつて自由に其の才を伸べることが出來たのである。

宇津保物語國讓上の右大將から孫王の君の許に手本を奉る時のことを記して

黄ばみたる色紙に書きて、山吹に附けたるは、[1]し（眞）の手春の詩、青き色紙に書きて、松に附けたるは[2]草にて夏の詩、あかき色紙に書きて卯の花につけたるはかな、はじめには[3]男手にもあらず[4]女手にもあらず[5]あめつちぞ。その次に[3]男手放ち書に書きて、同じ文字を樣々にかへて書けり。（和歌略）[4]女手にて（和歌略）さしつぎに（和歌略）次に[6]かたかな（和歌略）[7]あしで（和歌略）といと多きに書きて一卷にしたり。

1 2 6 7は說明を要しない。3は萬葉假名、4は源氏梅枝は「草のもたゞのも女手をいみじう書きつくしたまふ」とあるのから推して、草書を含めた平假名であらう。5のあめつちぞといふのは信友の引用した本には無いが「男手にもあらず女手にもあらず」といふのは、信友の「眞假字（萬葉假名）を行草などに書るさまなるべし」といふ解が妥當である。吉澤氏は草體と解して居るが、其では前の2と重複する。自分が國語法大綱に平かなと解したのも誤であつて、手習用のあめつちは楷ではなく、行又は草で、平がなに近づきつゝあつたのであらう。右の中のかなといふのは、3 4 5 6を總括した者らしいが、次のかなは之と違つて平假名の事である。

こはくすくよかなる紙に書給ふ。かなはまだ書き給はざりければ、かたかんなに

ちぎりあらは　よき極樂に　行あはん　まつ我にくし　蟲の姿は

ふくちのそのにとある。右馬助いとめづらかに樣異なる文の樣かなと思ひて……（堤中納言蟲めづる姫君）

狹衣物語にも和歌を片假名で書くのが畫樣であることを言つた處が三箇處程見えて居る。此で平假名が和歌に常用され片假名は普通用ゐられなかつたことが分る。

今昔物語が他の物語と違つて、片假名を用ゐたのは、其の著者が男子であり、且內容が寧ろ中流以下に向いて居るからの事で、漢文と男子と片假名とは、或る程度の深い關係を有して居ることは、和歌物語と女子と平假名との關係に似て居る。

七　假名の字源

平假名　片假名　全部に亙つて、字源を說くことは、徒らに煩しくなるのみであるから、此處には問題となるも

のについて私見を述べる。

え　釋文雄は兄の訓からといふが、白石も說いて居る通り衣(漢音イ)の呉音からである。

支　(變體)は支から。集韻に翻移切音祇とある。一說には伎の略から。　キ　は幾の草體の略

け　(變體)は介の呉音から。ケは介の略　こ　コ　共に己の呉音からといふのが普通であるが、大矢透氏は周音コイからと說く。

サ　藏　蔵　非　草　等諸說あるが、散からといふ白石や岡田眞澄の說が妥當。

ス　須の略　セ　世の略

ツ　門又は闘からといふ說もあるが、第一項に述べた如く、州の略川からであらう。大矢氏は川の古韻と說く。

テ　白石は尙の略と說いて居るが、岡田眞澄の說の如く天からに相違ない。

と　ト　共に止の訓からといふのが、普通であるが、大矢透氏は止の周音トイからといふ。

な　ナ　南からといふ說もあるが、奈からであらう。

子　國定教科書發刊以前多く用ゐた。子の訓から。

む　(變體)司馬江漢の春波樓筆記にローマ字のhからと說いて居るのは滑稽、勿論者の訓から。

へ　え　八　(別之古字)　皿　反　閉　等の諸說あるが、邊の下部であらう。大矢透氏は部の省字と說く。

マ　末の呉音から、　丁　万の音から、　む　武の呉音から、　ム　牟の呉音から、　メ　女の訓から。

ら。

ユ　白石は遊からといひ、益軒は勇からといつて居るが、眞澄說の如く弓の訓からであらう。

ら　ラ　共に良の呉音らうの省音から、　ル　流の略　ろ　ロ　共に呂の呉音から、　ゐ　(變體)王の呉音から。

ワ　曰　回　からといふ說もあるが、和の呉音からである。禾と書いた者もある。

キ　韋から　井(變體)井の全字　エ　慧の變體慧の呉音から。

を　遠の呉音の省音、　ヲ　乎の略、ヲとも書く。

ん　は无之呉音からといひ、ンは梵字の空点、と仰月ノを合した者ともいふが、に　ニ　といふ假名の最後をはねた者かとも考へられる。

司馬江漢がnからといふのは、奇想天外とは言へるが、時代を考へない荒唐の說である。

此の外、筆者が小學に通ひ始めた頃までは、んの次にFHHメといふ四字があつた。古語拾遺　古本訓點　延慶の朗詠要抄　將門記訓　以呂波問辨　假字本末　等によれば、Fはトモの合字HHはトキの合字、メ(シテ)しては爲の省字、である。Fは以呂波問辨　假字本末　共に事の第五畫を取つた省字と認め、本末は、將門記訓や後深草院御記點圖等を據として居るが、平假名のとがことの合略であるのと考へ合せて、コトの合略であらう。メもシテの

合略かと思はれる。

以上述べた七項の外にも、奈良朝までエキケコソトヌヒヘミメヨロの十三音には、音價が二種あり、假名も二種に別れて居たこと、從つて五十音の代りに六十二音あつたらしいことなど說きたいことが種々あるけれども、既に紙數を超過して居るので筆を擱く。（昭和一六、九）

國語學史篇

第十九　安原貞室のかたこと
第二十　益軒の日本釋名と白石の東雅
第二十一　白石の所謂方言について
第二十二　萬葉に關する富士谷派の學說
第二十三　返し狀について
第二十四　義門の國語學史上の地位
第二十五　義門　小考
第二十六　義門の春海濱臣に對する論戰
第二十七　稿本「入言少補」について
第二十八　活語餘論後篇の所說について
第二十九　義門中心の方言座談會
第三十　權田直助翁の國語學
第三十一　明治中期の國語論議

第十九　安原貞室の『かたこと』

一　序　説

我等しきが　宿にも來るや　今朝の春（曠野）

いざのぼれ　嵯峨の鮎くひに　都鳥（同）

此等の句には一寸面白いといふ點はあるが、高く評價することは出來ない。作者安原貞室などの古風俳諧が、今の世に重んじられないのも尤である。俳句大觀中に採錄された貞室の句は十句前後に過ぎない樣である。しかし貞室の作とは知らない人でも、

これは〳〵　とばかり花の　吉野山（俳諧古選）

といふ句を知らない人は少い。國定教科書中にあるからといふだけでなく、何處か一般的な萬人共通の感情を捉へた點があるやうである。自分の狹い見聞では、

時雨るゝや　湖にすみたる　鐘の聲（俳諧新選）

といふのが最も詩情に富んで居て、門外漢たる自分などの感じでは、蕉風の先驅を爲した詩趣があるといつても

よい樣である。其にしても貞室の俳諧史上の地位のさまで高くないことは爭はれない。之に比して其の國語學史上に於ける地位は優れて居るとは言へないが、顧みるに足らない程低い者でもない。俳諧には語を練る必要がある。俗談平語をも粗末に考へてはならないので、其の考察に力を用ゐたのが、卽ち其の者「かたこと」五卷である。其の中には若干國語學に貢獻した者もある。然るに此の點を說いた者が少いのは甚だ惜しく思はれる。此が本稿を草するに至つた動機である。

此の書の序にも本文にも、著者の名や著作年月が記されて居ない。しかし橋本進吉博士所藏本に貞室述と朱書されて居るのがあるので、何人も之を認めて居る。序文によれば、我子の片言を是正する目的で、其の師貞德に叱正された言葉や自分の考へる所を、述べたやうになつて居る。「と云ふ」とあるのが師說の積りかも知れないけれども師說とはつきり書いた所も見えず、又子の敎育の爲といふのは、天仁波大槪抄などに言ふ所と同工異曲であるから、多分は假託に過ぎないであらう。俳諧の用語の考察から日常の國語に及んだ者も、其の子だけではなく、門人一般人を對象としたのであらう。

一二兩卷は順序を立てずに、有りふれた語を、筆に任せて擧げて居るが、三卷の半以後は　時節　人倫　衣服　雜詞　湯桶言葉　言はずとも事缺き侍るまじき言葉　等、十數項に分類してある。方言を說いた者ともいへより　るが、進んで語源や用法にも及んで居て、契沖益軒白石などの先驅をなしたと認められる者もあり、今日の定說となつて居る者、又は其程でないが十分尊重すべき者も存する。此の中から目ぼしい者を次に紹介する。

二　付　言　葉

（　）内數字は國語學大系本の頁數、以下同じ。假名の誤はもとのまゝ。

本書には接辭のことを付言葉といつて居る。例へば次のやうな者である。

假令（たとへば）尊貴の人の疎屋へ御入あるやうのおりふし、あるじかたの人の言葉に「扨も〳〵けふの御成は冥加なひ御ことにてさふらふなどいふ」こと侍り。是以外の僻言成べしと云へり。「冥加に叶ひて侍るなどとはいふべきこと也。但冥加なきのなは無の字の心にはあらで、なといへる付言葉にや。縱へば物のたらはぬことをはしたとも申し　はしたなきともいふ。又は腹黑なる事をもきたなきなどいふやうのなき歟。然らば冥加なきは只冥加なといふ言葉なりとの遁れも侍るべし。（四）

如在なといふことを如在なきといふやうのなきは、前に云る付字にてなといふことなり。無の字の義にあらず。（四）

かたくなし　つたなし　等のなしと、右に擧げたやうななしとを、同樣に見るのが、現代學者の定說の如くなつて居る。三矢重松博士の高等日本文法の形容詞を作る接尾語の條にも、なしの上に來る　はした　覺束　勿體　うしろめた　をさ　すく　如在　きた　等二十五を擧げて居る。但し筆者の私見は聊か違ふ。卽ち　うしろめた　をさ　すく　きた　等其だけでは語を爲さない者の下に來るなしは、上と合して一形容詞と見るべく、なしを接尾語と見るべきである。同時に　冥加　如在　勿體　はした　等、其だけで既に一語を爲して居る者の下に來るなしは、出來る限り無しと見たい。其で冥加なしは

餘りに有難く恐多く、神佛の冥加も無くなる程である。

の意に解すべき者と信ずるのである。又如在は論語八佾篇の「祭如レ在、祭レ神如二神在一」から出來た語で、貞永式目の「如在禮奠」の如く敬ひ謹む意に用ゐるのが正しい。然るに、下學集に「如在ナイ　卽尊敬之義也。然日本俗書狀平懐義云二如在一失二正理一也」と言つて居る如く、元は反對の疎略の意に轉用される。例へば、

御二人を如才に思ふ心でも祐經かばふ心でも（百日會我）。

御二人にそもや如才を致さうか。（同右）

等がさうである。又

あう勿體も候はず（幸若鉢馬田）

五常軍甘輝と名に負ふ勿體（國性爺合戰）

の如く、勿體はもの〳〵しい尊貴な狀態の意である。其を認めず之を冒瀆するのが勿體なしで、なしは矢張無しである。此の外怪しかる　怪しからぬ　斜に　斜ならず　いわけたり　いわけなし　何れも反對の意であるべき語が同義となることが若干ある。

さて片言には　接頭語　接尾語のみでなく、接中辭 Interfix（白石の所謂中の詞助）をも認めて居る。

とらゆるといふべきをとらまゆるといふはかたことなりとかや。……にらまゆる……あがまゆる……ろ　ら

ま　す　は、昔の付字也。（六一）

ふかしひこと……ふかひこと……といふべきを、しもじをやすめに入たるにや。（六六）

最後のは付言葉とか付字とかは言つて居ないが、同一に見たことは言を待たない。

三　語史の證となる者

此の書の說く所によつて、或る語の用ゐられるに至つた時代の推定出來る者が少くない。

1　大根を細く刻んだのをセンロツポンといふのは、千六本の義かとも思はれ易いが、此の書に次の如く言つて居る。

大根をだいこ又蘿蔔（らふ）とも書り。ほそくきざみてうじたるを纖蘿蔔（せろ）と申すをせろつぽんと云はいかゞ（五三）

庭訓往來十月の部にも「栄者纖蘿蔔、煮染午蒡昆布」とある。此等で此の語の成立がわかる。

2　平家物語等に用ゐてあるしかしながらといふ語は、（甲）逆接（ケレドモ）の意ではなく、（乙）凡ての意である。然るに　大日本國語辭典　大言海　等に、

志はさる事なれども汝が母の歎かんこと、しかしながら我が僻事なるべし。（平治、頼朝遠流）

といふのを、（甲）の意として擧げてあるのは、誤であつて、明かに乙の意である。又大言海に

甲冑弓箭業爲二本意一。併欲レ奉レ休二亡魂鬱憤一之外無二他事一。（源義經腰越狀）

を（甲）の意として居るのも當らない。

韓魏趙是等もをづるやうにしたぞ。是は併ら宿瘤が德ぞ。（象求抄）

此はしかしながら天帝よりの賜ものと見えたぞ。（中華若木詩抄）

その答は只古き釜なり。靈何の所にか有と云ひてしかしながら打碎きて（石集）

此等何れも凡ての意である。凡ては其のまゝ悉くとも換言出來る。其のまゝの意を强く見るとけれどもの意になり得る筈であるが、何時頃からかと多年注意して居るが、よくは分らない。逆接の意を表す語は、平安朝にはされど、鎌倉室町時代にはさりながら、漢文調には　然れども　然りと雖も　而も　等が代表的の者である。然るに此のかたことに

さりながらといふ言葉としかしながらといふ言葉とを同じ樣に心得ていふは如何侍らん……（一四）

と一應は難じて置きながら、同義になる理由も存する樣に說いて居る。此で此の語の（甲）への轉用の時代が略ゝ推定出來る。

3　みづからのことををれといふはをのれといふ中略のこと葉なるべし。日本紀にも侍る。……をれと云こと葉

は尊氏公の世中を心のまゝにしたまひつる比より、別してはやり出侍りて、侍分の者ならではえいはざりしとかたれりし人侍りき（三七）

おれがおのれの中略といふのは今日の通說となつて居る。「日本紀にも侍る」といふのは、神代紀の關口女の關を私紀に於禮と訓ませて居り、神武紀の自註に爾此云狹例とあるのなどを指したのであらう。しかし何れも對稱であつて、自稱ではない。自稱に用ゐたのは何時頃からか古い所は明かでないが、關東地方の方言であつた者が、足利時代武人の勢力につれて、廣まつた者であらう。

4　お前といふは、貴人ならずはいふべからざる歟。貴所とは同輩の中をいふべき言か。（七〇）

現代ではお前は目下に對する語であるが、平安朝の頃極めて貴い方を申したことは、周知の如くである。其を此の時代には貴人に對するだけでなく、同輩に對しても用ゐ始めたらしい。然るに燕石雜誌に「今の俗長者をおまへと稱し、同輩にはおんみといふ」とあるのは、聊か片言の說と撞著するやうであるが、江戸では趣を異にして居たからでもあらう。五の戸方言では今もお前様が最高敬語なさうである。

5　道をありくといふべきを、あるくといふは、五音通じてもよろしからぬ歟（六四）

萬葉に「君が安流久に四二五」「遊び阿留伎し八〇四」靈異記の訓釋に周行を「女久利安留久」、新撰字鏡に「徂行往來、阿留久」等があるから、本居宣長の說の如く、るが古く、りが後であらう。貞室の時代も京都ではありくと言つて居たのを、東國あたりからあるくが侵して來たのではあるまいか。

6　ぬれたる物をのどふを、ぬぐふとは五音は通じても聞あしき歟（六三）

萬葉に「涙を能其比四三九八」靈異記の訓釋に捫「ノゴヒテ」新撰字鏡に「拭乃已布」等があるから、のどふの方が古く、そのまゝ京都に傳つて居たのであらう。奈良時代頃までの字列音が、後世於列音に變ずる、例へば野（ぬ　の）黃金（くがね　こがね）と見るのが、現代學者の通說のやうであるが、筆者は　曉　あかとき　あかつき　候　さもらふ　さむらふ　主　あろじ　あるじ　等の例により、通說と逆な者もあると主張して居るが、ぬぐふも此の私見を援けることになる。

7　其樣なこと此樣なことを、そがいなことこがいなこと……田舍人のわらひ侍る京言葉は、是等第一なりとかや。（六一）

よく此の語の變遷をして居る。詳細は拙著「國語教學の體驗」米澤方言の條に讓る。

四　漢語と擬聲語

1　きのふおとゝひといふべきを、さくじつ一さくじつといひ、あすあさてを、みやうにちみやうごにちなどいふやうのことは、兒喝食（ちごかつじき）若き女房には似つかはしからずや（一一）

漢語はやさしく聞えないからの事であらう。現代語として　昨日（さくじつ）　明日（みやうにち）　などといふ方が、きのふ　あす　など

といふよりも、丁寧に聞えるのは、一體何故であらう。恐らくは、漢學が唯一の學問のやうに考へられて居た時代、教養ある階級の人が漢語を用ゐたので、其に倣ふのが上品なやうに感じたのが、今日に及んだのであらう。其につけても此等の常用漢語が此の書の時代までは、やゝ、不熟に聞えたので、兒喝食若き女房など、優しさを尊ぶべき者は、用ゐないがよいと言つたのである。因に前記の四語は、漢語と國語と語感の相違があるだけで、指す所は全然同一であるが、けふと今日とは、語感が違ふだけで同じ事を指す場合もあるが、指す所の違ふ場合もある。卽ちコンニチの方は、けふの意の外に、現代又は近頃の意となることもある。例へば「今日の世の中に於て」とは言ふが、「けふの世の中に於て」とは言はない。

2　御盃をいたゞき侍らんといふべきを、頂戴仕りまらせうといふは、その向ふ人によるべし。あなたが貴人高家ならずは、似つかはしからぬことばにや。

又ぎよはいと申も平人の上には然るべからず。あなたが貴人ならずは、いふべからずとかや。……頂戴ぞぎよはいぞといふ人は、はからざる輕薄物に成侍ることなり。(一〇)

頂戴や御盃は、漢語なので前に言つた通り、非常に丁寧な語と感じられたらしい。さて此の時代まで侍るといふ口語が生きて居るやうに見えるのは疑はしい。又まらすが其の後身のますと並び用ゐられたことは、他にも證があるけれども、侍るより丁寧な語であつた樣な說明も疑はしい。

3　貞室は生かじりの漢語を用ゐるのを嫌つたらしく、次のやうな笑話を載せて居る。

ある病人に向つて、扨も〳〵そこの御腫物久しうなやみたまふ痛はしさ笑止さよなどいひける返答に、されば、そのこと。なをるかと思へば平癒し、なをるかと思へば平癒して、はてもやらで氣の毒にて侍るといはれしとかや。(五二)

或人柑類といふは一切のくだもののことぞと心得て、栗をも柿をもかうるひと云り。(五三)

4　擬聲語について　ほうど　ひつたり　がつたり　かつさり　等の例を擧げて、次の如く說いて居る。

右五六十の言葉は、大かた音響をもて、頓而唱ふるが、此等の中濁れる言葉はいやしう聞え、すめるはやさしうおぼえ侍るなり。(六九)

當時に於ては卓見と稱してよい。又

郭公雁なども鳴き侍る聲の、卽名に成りたるとかや。(五五)

といふのも、鈴木朖の名著雅語音聲考の先驅となつた說といつて、過言ではあるまい。

五　語源と音韻

數々の語源を說いた者の中には（甲）失笑を禁じ得ないやうな者（乙）平凡な者（丙）從ふべき者　等が雜然とまじつて居る。

1　「さかなは酒のなかば又は酒の慰の下略(一〇)」「いかいはいかめしひの中略(一九)」「ひすらこい　ひすいはひすまし(下女)き又はかまびすしきの上下略歟(二一)」等は(甲)に屬する。「鮭は子を生む時腹が割け侍るによりさけ(五五)」も此の類らしいが、倭訓葉も同樣に說いて居るので、餘り侮ることは出來ない。

2　おもふさまをおもふしなは如何。但おもふ品といふこと葉歟(二九)

此などは(乙)の類であらう。さまをしまといふことは少くない。例へば　横しま　逆しま　名義抄の條忽アカラシマニ　神武紀暴風の私記の訓安加良之末加世　續紀天平廿一年四月の宴命の加久斯麻爾　等、何れもさまの轉である。此のしまが更に再轉してしなとなつたに相違ない。出しな　往きしな　歸りしな　寢しな起きしな　何れもさまと見てよく通ずる。大言海には此等をしだ(時)と解して居るが、萬葉のしだは、東歌に見えるだけであるから、方言であらう。

3　寢ることをおよる、起きることをおひなるといふのを解して、

およれぞおおひなれぞといふは、をんな言葉にやさしと云り。おひなれ　お畫なれといふ心歟。それをおひんなれとはいかゞ。(三五)

おひんなれはおひるなれの音便であつて、咎むべきではあるまい。又およるが夜の動詞化した者と說いて居ないのは物足らない。

4　厠の語源について、高野山で髮を落すことから、「かみ(紙)を落す厠」と洒落たのであるといふ俗說を排して居るのは(丙)に屬する。

かうやとはかはやといふことなるを……高野山のことにいふ一說侍る……こざかしき人の云るは、かの山にのぼりて發心する人の髮をおとし侍るによって、不淨の所にて紙を落すになぞらへて、かうやと云りとかや。是は行過ぎたる說なり。……只かうやはかはやといふこと斗なり。河內をかうちとよむが如し。總而謬說は正義よりうちきゝの面白き物なる故に人のまよふことなりとかや。(六一)

厠を河屋と解するのは、古く和名鈔にも「加波屋川屋也」と見えて居るが、其が忘れられて、下學集には

金剛峰寺高野山、緣ニ地形悉表二曼陀羅義一、不レ令ニ人々留ニ中不潔於此山一、故糞屋必架二河上一而流二不淨一也。由レ是高野一山呼二東司一曰二河屋一。

とあり、遂に小ざかしき人の「紙を落す」まで持つて行つたらしい。其を貞室が正しきに反したのである。因にかはやを側屋と解する說は、漢字の厠に捉はれた者であらう。

5　近頃淨瑠璃研究者の間に、半七さんを、慣例通りはんひつつあんと發音すべきか否かについて、議論が起つて居るやうである。前にも「十七年が其の間」を十ひちねんと語るのを聞いて、大阪の方音だらうと考へて居た。本書に「人をしかるをひかる(三四)」などといふのが見えて居るのは、同樣の訛であるが、其の反對に「直垂をしたゝれ(四三)」「髮をしちりき(四五)」などいふのも見える。ひをしと訛るのは、江戸に限らなかつたらしい。

6　漢字音の韻の　ち　つ　が相通ずることを「二四は、ち詰」といふ面白い術語で表して居る。一字二音の下

の韻だから、或語の第二音又は第四音となることが多い。其がつよりもちとなる者が多いと認めたのである。

分別をふんべち　失念をしちねん

右二つは苦しからぬ歟　二四はち詰といふこと侍る。（二九）

飢渇（かつ）をけかちは苦しかるまじき歟。（三四）

歳暮を歳末といふをさいまちはあしかるべし。二四はち詰とへいども、聞あしきはよろしからずと云り。（三五）

二月をにんぐわち　四月をしんぐわち（三四）……といふがよしと云り。（三六）

7　燈心（とうじん）をとうしんとうずみなどはわろし。又　う　む　の下は濁るといふ事あり。……前にも御同車（とうじや）御同心（とうじん）などの如し。（四七）

此の又以下は今日の定説のやうである。貞室の創見ではあるまいが、説く所が如何にもはつきりして居る。

8　聞き馴れない轉呼の例を擧げて居る。

文屋の康秀をふんにやなどといふは、連聲とてよきことばなり。（一二）

節用集をせつちやうし。（四九）

最後のは之を正すべき者と認めて擧げたのである。

六　餘　錄

以下の私見も、前述の何の項かに入れてよいのであるが、片言との關係が甚だ薄いので、項を改めた。

1　今卒度といふべきをまつとと云ると如何。但略語なれば苦しかるまじき歟。（一九）

私見ではまつとは　いまそつと　いまちよつと　との合流した、言はゞ含の子的の語かと思ふ。其を説くには　さつと　そと　そつと　の四語並びに　ちと　ちつと　ちよつと　の三語を考へる必要がある。大言海には、前の四語を同語源のやうに説いて居るが、如何であらう。

嵐のさとふき渡りて（枕草子）

さとこぼるゝ雪も（源氏末摘花）

さと笑ふ聲のす（宇津保）

さと沃かけたる（灰）目鼻に入りて（源氏桐壺）

さつと立たれけるが、……瓶子など引倒されける。（參考源平盛衰記）

此等を通覽すると、靜かに輕く行き渡る擬聲語から出て、後には音のしない者にも應用したに相違ない。

わらはべ……そと立ち走りて、（枕草子）

さと吹く風に（源氏幻）

時雨さとかきくらせば（紫式部日記）

匂のさと打散り流れるに（源氏匂宮）

面さと赤みて（源氏浮舟）

とり集めてそとよめる歌、（公任卿集）

此男が顔をそと〳〵撫でけり。（宇治拾遺）

さりながらそつとするがよい。（狂言八句連歌）

辛度といふ當字は、片言ばかりでなく、運歩色葉集にも見えて居るが、全くの當字に過ぎない。さて此等の用例を通覽すると、靜かに輕い意のあることは、さと　さつと　と同様であるが、そとの方には、擬聲らしい用法はなく、且、行き渡る意も無いから、別た語と思はれる。

次に　ちと　ちつと　ちよつと　の用例を考へる。

ちとかきならして　（辨内侍日記）

ちとまどろませ給ふ。（宇治拾遺）

ちと氣が違へば、（孟子抄）

ちよつと歸つて參らう。（狂言算勘婿）

膠を持ち、ちよつちよと付て廻る。（狂言六地藏）

此等はちひさし等と語祖を同じうする擬聲語からであらうが、其の意は明かにすこしの意である。故に　そと　ちと　とは大分違ふのであるが、そつとに今の略のま（其の轉も）を附け加へると、其の意がまちつとに類似して來る。

まそつとごされ。（狂言菊山伏）

御座敷にそつと寢かしましよ。（狂言子盜人）

そつと水の中へえは入りませぬ。（狂言あかゞり）

おづ〳〵ちと見まゐらせ　（建禮門院右京集）

ちと聞こしめして、（今物語）

まちつと代を添て御買あれ。（四河入海）

ちよつと二人いさかひをめされまして、（狂言貰婿）

もそつと語らう。（狂言猿替句當）

もそつと酒を飲まう。（狂言朝比奈）

蓋し　今一度の　今幾日ありて　等の今に附け加はる意があり、其の略轉が此等のまもであるから、まちつとは附け加へること少し、まそつとは附け加へること輕く、の意である。即ち附け加へる方に重點があるので、附加的の少しと輕くとが同じ趣になつてしまつたのである。從つてまつとといふ語は　まちつと　まそつと　何れか一方からではなく、恐らくは其の混血兒（あひのこ）であらう。貞室は若干まつとといふ語を、難じて居るが、

まつと留つて菊をも賞せよ。（四河入海）

まつと　けて賣りや。（狂言長光）

まつと戴かせう。（狂言宗論）

等室町時代には、相當廣く用ゐられたらしい。

2　現代の國語では、あう　あふ　かう　かふ　等と、おう　おふ　こう　こふ　等は、凡て於列の長音に發音してしまふが、室町時代の末頃までは之を區別したらしい。天草本の伊曾保物語や平家物語によると、開音即ち阿列の下にうふの附いた方の於列長音には、必ずOを用ゐ、於列の下にうふの附いた方の於列長音には、必ずUを用ゐ、決して之を混同しない。此は當時の我が國人が之を區別して發音して居たから、宣教師が羅馬字に寫すに當つて、混同しなかつたに相違ない。此の片言に此を區別した確證といふ程の者の見えないのは惜しいが、其かと覺しい者は見える。其は長老と茶賣らうとの酒落が載つて居るのである。

或老尼が寺參して、長老から粗末な茶を振舞はれた。其處へ立派な旦那が來た。長老は特別上等の茶を其の旦

那に振舞ひながら、老尼には振舞はなかつた。其處で其の旦那の歸つた後、老尼は「此で見ると往生すべき極樂にも等級があるかと思はれます」といつたのに對し、長老は「あなたはいろは歌を御存じか」「はい、いろは歌なら逆まにも諳誦出來ます」「其では金持の旦那によい茶を出すことがお分りの筈だ。私は長老　卽ち　ちや(茶)うら(賣)うだ」といつたといふ落語的な問答がある。(四一)」

此で見ると長老の當時の發音はチョウロウではなく、チヤウラウであつたかと思はれる。しかし更に考へると、發音がさうであつたのでなく、假名遣を知つて居たからの事でもあらうか。燈(とう)臺　當(たう)代　豆(とう)腐　當(たう)風　等の秀句(酒落)も載つて居るので、一層發音の區別が無かつたかとも思はれるが、「皆かんな違ひの秀句を口に任せて吐出さるゝはつたなくこそ侍れ」と評して居るから、類似音をば區別しながら、秀句にはかまはず使つた者であらうか。俄に判斷しがたい。要するに此の書は、讀んで面白いだけでなく、語史の上からも學史の上からも、相當の價値を有すると斷言してよい。

第二十　益軒の日本釋名と白石の東雅

一　總　說

益軒は京都に於て、白石は江戸に於て、それ〴〵木下順庵に師事したことのある、漢學者であるが、共に漢學の埒外に出でゝ不朽の名著を殘して居る。國文學の方で　益軒の十訓　大和巡りの記　白石の藩翰譜　折たく柴の記　讀史餘論　が光を放つのみでなく、國語學の方でも、益軒の日本釋名と白石の東雅とは、長く忘れられないであらう。前者は劉熙の釋名に、後者は周公作と傳へられる爾雅に倣つた者で、部門類別は、共に和名鈔を基本とし、若干の變更を加へたに過ぎない點も兩者相似て居る。之を比較して見ると、

知名鈔　三十二部	天	地	鬼神	倫	親戚	形體	居處…….
日本釋名二十三部	天象	地理地名		人品		形體	宮室…….
東雅　十五部	天象	地輿	神祇(神鬼)	人倫	(親族)		宮室…….

(　)內は部中の小別である門を示す

斯の如く若干の出入はあるが、相似て居る。鳥　獸　魚　介　米穀　草　木　飲食　器用　等の部も、共通の者が多いばかりでなく、其の部中に含めた項目(語彙)も、隔絕しては居ない。日本釋名の人品と東雅の人倫と、部名

は遂つて居るが、雙方共に人民父母妻子兄弟皇帝士朝臣宿禰醫師等の語源解說を試み、共通語の數が半以上に達して居る。

綱遠の形式は、甚だよく似て居るが、其の所說には大なる差がある。蓋し白石が東雅を著した動機は、其の安積澹泊にあてた書翰中に、

深川に半年程寓居の內は、見たき者も取出し申す事も成候はず、淋しく暮し候故に、幼息共へ書付け取らせ候けんと存じ、一條二條書記し候事共を、其後小石川に移居候日に、大方は源順和名鈔の次第を追ひ　艸稿をたて、……草本のまゝにて差置候者に候。

とあるので、大體は察知される。卽ち鬼勘解由といつて恐れられる程重く用ゐられた六代將軍家宣も在職四年、其の子七代將軍家繼も同じく在職四年、相次いで薨ぜられたので、華やかな白石中心ともいふべき時代は過ぎ去り、八代將軍吉宗の代となつては、驥足伸ぶるに由なく、致仕して（語靈室鳩巢が代つて用ゐられる）深川に蟄居した。其の折の徒然を慰める爲はあつたらうが、幼息共へ云々といふ語には重きを置き難い。定家が其の子爲家の爲に、天仁波大槪抄を書くとか、安原貞室が其の子に訓へる爲に、かた言を著すといふのと同樣のお極り文句と見てよいやうである。それよりはむしろ脈行的の先輩益軒（白石より二十七年早く生れ、十一年早く死んだ）の書いた日本釋名を見て、其の餘りにも常識的なのに、不滿を感じ、自己の研鑽を傾け盡し、之を正さうとして、東雅を著した者と思はれる。さて本書の室鳩巢の序に東雅執筆の際の事を、「傍無一書」とあるのは、勿論事實に反して居る。自序にも

此書の作丁酉の夏に在り。時に海上（深川）に寓して、共に語るべきなし。……客問たゞ一篋あるのみ。

といつて居るが、此亦文飾に過ぎない。深川に於てか小石川に於てかは判然しないが、少くとも古事記　古語拾遺　風土記　日本紀　萬葉集　佛覺抄　舊事紀　倭名鈔　等の和書　爾雅　說文　文選　通雅　本草綱目　等の漢書を、坐右に置いて、相等調査したに相違ないことは、白石自身の語乃至其の書名を記さない引用文から判斷出來る。就中日本釋名については、其の書名こそ記して居ないが、殆んど逐條的に之を反駁しつゞけて居る。「世の人いふ事あり」とか「世の古言を解するに」とか云つて、難じて居るのは、悉く日本釋名の說であるから、東雅執筆の際、此の書が坐右に在つたことは明かである。

附言　益軒が屢〻神代直指抄を引用して居るのは、山崎闇齋の講筵に侍した關係からしいが、白石が此の書に言及して居ないのは取るに足らずと考へた者らしい。

二　兩者の著眼

日本釋名は所謂常識語釋の範圍を出て居ないのに、東雅は、其の古今に亙つての歷史的研究と內外を通じての方處的研究とを試みた點から、國語學史上に重きを爲して居る。

世の人いふ事あり。「和語を解くには謎語を解くが如し。其の要訣を得ぬれば解くべからざる者なし」などいふ

なり。凡天地の大なるより見ぬれば我東方の如き……一方の内また古今の間五方の雅俗の言……一つに皆概して謎語となして解せむ、其義を盡すべき事なりとも思はれず。ましてや古を師とするにあらずして、みづから其意解をもて、其義を釋しなむ、我信ずる所にはあらず。（東雅總論）

此は白石が益軒の說を難じた者で、世の人といふのは益軒を指し、――は日本釋名の凡例の言を引いたのである。白石は又

まづ其世を論ずべき事也。舊事紀　古事記　日本紀　等の書に見えし太古の語言の如きも、其の書撰述の代の人の云ふ所をもて、しるされしと見えし事もあれど、神名　人名　また歌詞　の如きは、古より云ひ傳ぎしまゝなる者とぞ見えたる。……韓地の諸國……此に來れるのみにもあらず、……其政を掌れる本朝の人々も多かりし程に、これかれの方言、相雜らざる事を得べからず。……佛氏の書また傳れる……禪教の來れる後……近世に及びては、西南洋の蕃語も俗間に行はれしありけり。

斯の如く縱は歴史的に、横は方處的に、研究すべきことを說いて居る。此の兩者の著眼は、實に雲泥の差があるので、益軒の輕んぜられ、白石の重んぜられるのも當然である。或は白石の

尙其の解すべからざるものあるは、强て其說をつくるべからず。

と云つて牽强附會を避けた態度が並びなき卓見であると稱へる人もあるが、單に此の點から言へば、五十步百步であらう。益軒も

天地（あめつち）　男　女　父　母　などの類上古の時、自然に云出せる語也。其の故はかりがたし。みだりに義理をつけて說くべからず。（八雲訣の第一自語の條）

ときがたき言をば、うたがはしきをかきてとくべからず。みだりにとけばあやまるもの也、（心得九箇條の第四）

などといひ、具體的にも天象の部雲の項に、仙覺がくは內へまくり入る義、もは向ふ義と言つて居るのに贊しないで「くもは上古の自語なるべし」と說いて居る。此等の言から、牽强附會を避けようといふ識見は、益軒にも相當あつたと認められる。此ばかりではなく、自語以下の八雲訣や心得九箇條を說いた其の總論は、大體適正であるのに、其の應用した各語の說明は當を失した者が多いのは、誠に惜むべきであるが、同時に白石の所說中にも牽强附會が無いではない。例へば

繼父母をマヽと云ひけり。眞間の字を用ゆる也。誠には隔てあることを云ひしなるべし。庶母をもマヽと云ひし事日本紀に見えたり。

「眞の親子とはちがひ、其の中に間（マ）がある」と解するのは、益軒の所謂謎を解く方針と變りが無い。他にも「敏（さと）しは薩埵から、雲（ひる）は爾（彌か）樓から」などといふやうな首肯しかねる者が少くない。方位に關する兩者の說を比較して見ると、

	ひがし	にし	みなみ
益軒	日頭	日往にし	皆見
			きた
			黑し（くろくなるからか）

二　兩者の着眼

白石　日向し　日ねし　瀛の見　分――陸

ひむかしだけは稍可であるが、其の他は、雙方一括して捨て去るべき僻說であらう。白石が例によつて、此の方位語について、日本紀　同纂疏　風土記　萬葉　倭名鈔　古事記　延喜式　等を、煩しい程引用して居るのも、鬼面人を嚇す類と評すべきであらう。現代の國語學史、筆を擲へて白石に高き地位を與へて居るのは、其の度が過ぎて居はしないだらうか。私見によれば明治の中期、西洋の古語學を修めた人々の眼から見ると、古來の學者の國語學上の所說は、西洋の學說に合致しない所が多く、其の缺點が著しく眼につく。其にも拘らず國學者は多く舊說を墨守して居るので、之を覺醒せしめようとして、可なり手嚴しく之を難じた。其の一方白石の所說を發見して、恰も沙中に珠玉を獲た如く之を珍重し、之を賞揚するに力めた。其の結果白石の位置が高きに揚り過ぎたのではなからうか。

三　轉語　借語　義語

益軒は「轉語は五音相通によりて名づけし語也」と定義を下して、

上――君　高――竹

等を其の例として擧げて居る。白石は之に對して總論で然るべしと評しながら、

太古神世の時より聞たりけり。……五音相通などいふ事によりて名づけよびし所なるべしとも思はれず。

と難じて居るのは、贊否不明であるが、本文の方では

キミとは君の字の音によれるなどいふ說あれど、……豐玉姬命……岐美何余曾比斯多布斗久阿理祁理と讀みたまひたれば、其代にすでにキミといふ語はありけるなり。キミといひしも亦これカミといふ語の轉ぜし所とぞ聞ゆる。（人倫の部スベラギの條）

萬葉集抄にタとは高き義なりといひけり。ケとは古語に木をケといふが如し。タケは其の生じて高きをいふなり。（樹竹の部竹の條）

と說いて居るから、大體益軒說に贊成したといへる。益軒の轉語の中に

盜――鼠　器土――つき

と說くが如きは、笑ふべきである。つらゝを釋して「つらなる也氷の軒につらなる也」といつて居るのは、古語のつらゝが氷柱ではなく、氷であることを知らないからの誤である。

朝日さす　軒のたるひは　融けながら　などかつらゝの　結ぼほるらむ　（宋摘花）

つらゝゐし　汀を渡る　春風に　池の心も　とけやしぬらむ　（六百番歌合）

峰の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず　（平家　小原御幸）

此等何れも氷柱ではない。然るに益軒の說を一々難じて居る白石が、此に觸れて居ないのは、兩者共に元來が漢學

者だから之を知らなかつた者であらう。

益軒は音を轉じて和訓とする類として、

文――ふみ　　錢――ぜに　　蟬――せみ　　頓――とみ　　馬――むま

等十六語を擧げて居る。右に記した者は如何にもさうであらうが、

椎――しゐ　　相撲――すまふ

等は牽強も甚しい。白石は此等をば外國の方言と稱して居る。

益軒は八要訣の第四に借語といふ目を立て、「他の名とことばをかり、其まゝ用ひて名づけたる也」と定義を下し、

日――火　　天――雨　　地――土　　上――神　　髮――疾――年

等の例を擧げて居る。之に對し、白石は「我思ふ所はこれも亦轉語なり」といひ、日 火 氷 檜 樋 靈 善 間 並　等、同じくヒであるけれども其のアクセント等（羣の平上去入、其の音の輕重清濁）がちがふので、其のまゝ借り用ゐたのではないと斷じて居る。雨も天其のまゝの借語ではなく、天水の水をば單にみともいつたのでアメミといふ語が出來、其のメミ二つの音を結んで（約めて）メといつたのであると說いて居る。年 時 の語源を疾しと見るのは、益軒同樣でありながら、之をも轉語と認めて居る。又釋名には「牡丹の雷――鎖袱」と解しながら「或曰南蠻の語也」といつて居るのを、東雅では「ボタンとは西洋拂良機國（葡、蘭）の方言の轉じたるなり」と斷じて居る。此等何れも、東雅の方が若干進んで居ることは爭へない。

益軒は八要訣の第五に、義語といふ目を立て、「義理を以て名づけたるなり」と定義を下し、

諸越――唐　　氣生――勢　　明時――曉　　口無――桅

等の例を擧げて居る。東雅の總論は之に觸れて居ないが、天文の部では、曉をアカトキの轉と說いて居る。蓋し益軒の所謂義語の內容は認めながら、之を轉語の中に含ましめたのである。要するに益軒の　轉語　借語　義語　を、白石は合して轉語と見たのである。

さて語尾活用は、一種の五音相通であるから、古來之を　音通　通音　轉語　等と稱し、益軒　白石　亦、之を高―竹　上―君　等の轉語と全然同視して居るが、之を細別しなかつたのは、思索の不足であつて惜むべきである。ロドリゲース　コイヤード　等の外人が、語尾活用に注意したことは別として、本居父子　富士谷父子　なども氣附いては居たに相違ないが、此の區別を完全に明かに說いたのは、義門の山口栞のやうである。

四　略語に關する對蹠的意見

益軒は盛んに略語といふことを說いて居るが「ことばを略するを云」といふ定義や

すみすり(中略)――すゞり　かへるで(中略)――かへで　前垣(中略)――まがき

等の例はよいが、中には杜撰甚しい者がある。

いさぎよし(上下略)――鯊　聞え(上略)――聲　捕ゆ(下略)――虎

などに至つては、噴飯せざるを得ない。益軒の略語説に對し、白石は眞向から之を難じ、

世の古語を解釋するに、上略　中略　下略　等の説あるなり。我思ふには異なり。……太古の時は、人の幼なるが如く朴也。……其言も亦自から長くなりて、長き事極りぬれば、これを略していはざることを得ず。

（東雅總論）

と説いて居る。今日の言語學者が言語の發生展開を考察するに、小兒語を參考するのにも合致し、一方略語を全的に排斥しない等、如何にも卓見である。白石は此の見地から、「單純な語の上にも中にも下にも詞助（接辭）が附いて多くの語が成立する」といふ見方をして居る。例へばかは燒く意の語であつて、其の上にあが附けば赤となり、下にしくが附くば炊くとなる。一昨日のつ　さゞれいしのれ　は中の詞助、周のし　伸し伸す　のしすは下の詞助といふやうに見るのである。

益軒は春日に關して、仙覺が「かはあかき也。すは蘇枋也。春の日はあかくかすむ故にいへり」と釋して居るのを、「穿説なるべし。蘇枋といふも、本よりの和語にあらず」と評して居る。此はよいが、かすがをかすみかゞやくの略語だといふ自説を唱へて居るのは、寧ろ滑稽である。

寺の語源について、益軒が照すの下略といふのは、勿論取るに足らない。白石が「これ當初百濟高麗等の方言よりや出たりけむ」といふ卓見を提供しながら、「其の事又不詳」といつて居るのは、惜しむべきであるが、今日朝鮮語 dol と同語源であるといふ定説の基を爲したやうである。しぐれについて、益軒がしばしくらきの略語だと説いて居るのと、白石がシケの帶呼（延音）だと説いて居るのとは、甲乙の附け難い取組といへよう。唯白石が日本紀の天陰といふのを證にして居るだけ、聊か勝味があるやうである。

兩人とも仙覺の萬葉集抄を尊重し、處々に之を引用して居るが、其の引用のし方によつて、學風の相違の認められるのも面白いので、其の例を擧げる。益軒がひゆるといふ語が略されて氷となつたと説いて居るのは、恐らくは仙覺が「氷をヒといふはヒユといふ詞也」といふのに基いた者らしい。然るに白石は此の仙覺説を明かに引きながら益軒とは逆に之を解して居る。卽ち

古語氷――其の間呼ヒイ――其の轉ヒユ

と見て、略語といふことを斥けて居る。私見では仙覺の説は、寧ろ益軒のやうに解すべきであらうと思はれるが、根本研究から言へば、仙覺　益軒　共に誤であつて、白石の見方が比較的正しいやうである。其につけても、同じ單語乃至同じ仙覺説であるのに、益軒は之を我が略語説に引寄せ、白石は之を我が非略語説に引寄せて居るので、兩者學風の相違が分り、我田引水の譬喩を思ひ起される。

五　反語子語

益軒八要訣の第六反語といふのは、普通に反語といふのとは、全然別の者であつて、かな返し也と注してある通り、約音を指すのである。白石は之を　引合　急　納まる　結ぶ　反切　などと稱して居る。さて益軒の擧げた例の中

服部（はとり）――はとり　　あはうみ――あふみ　　とほつあふみ――とほたふみ　　きえ――け

等といふのは、尤であるが、

かるがゆゑ――かれ　　かれ――け　　ひら――葉　　しりへ（二重返し）――せ　　見へ――目

易（やす）く消（キ）ゆる――雪　　いつくし苗――いね

等に至つては、容易に首肯出來ない。特に最後の雪　いねの語源說に至つては笑ふべき至である。白石も　苗――ね　なかつおみ――中臣　等の約音は之を認めながら、

古語に目をマといひけり。マといふ語の轉じて、メといひし如きは、或方言の同じからぬにもよりぬらん。

見る……見ゆ……マといひメといふ言によりて、いひし所にぞあるべき。もしミといふ語を轉じて、目といひしならんは、耳をよびてミミといふが如きは、またいかにやあるらん。

雪をユキといひしは、其の色の白きをいひし言葉なり。（本文　雪の條には「潔齋の義なるなり。」）名づけてイネと言ひ、又轉じてはシネといひし義の如きは、不詳。古語にイといひし發語の詞あるなり。出る見えから眼が出來た略語ではなく、眼の轉音ミに詞助が附いて、見えや見るが出來たといふのも、雪のユに潔齋の義があり。ネといひしは猶種といふが如し。其の嘉種なることを云ひしに似たり。

意があるといふのも、イネのイが發語だといふのも、略ミ肯定出來る。其の研究態度が如何にも慎重だとはいへるが、所說聊か煩に失し、且ネが苗か種か不明に陷つたといふやうな點もある。

八要訣の第七子語といふのは「母字より生ずを詞を云」。其の例として

日（ひ）――ひる　ひかけ　ひかり　　月――つごもり　ついたち

火――ほのほ　ほむら　ほこり　　水――源　汀　溝　港

等を擧げて居る。「母語を以て子語を解くべし。子語を以て母語を解くべからず」といふ原則も例も大體妥當である。しかし時節の部に

晝　ひのぼる也。中天に日のぼる也。中略也。

と說いて居るのなどは行過ぎである。白石が東雅總論に「ヒルは繭（蒲か）樓（楚語）也」といふのも感心しない。一括して拋棄し去るべき僻說であらう。何ういふものか、白石は本文の方では

ヒは日也。ルは語助也。日の中する義なるべし。（天文部　歳時門）

とも云つて居る。此は益軒の肇に倣つた者とも見られる點、白石に似合はない上に、前後矛盾して居る。東雅總論中に子語の事に觸れて居ないのは、大體之を認めた者らしい。

六　外來語　音義說

外來語をば、益軒は八要訣の第八音語と稱し、白石は之を外國の方言と稱して居る。益軒の音語といふのは、字音語の義であらうが、更に之を三分して次のやうな例を擧げて居る。

イ　字音そのまゝ　菊　桔梗　繪馬　柘榴

ロ　唐音　杏子　石灰　菠薐

ハ　梵語　ほとゝぎす　尼　猿　斑

ほとゝぎすを梵語といふのは、白石も同說であつて、總論に別都頓宜壽也といつて居るが、禽鳥部には

ホトゝギスとは鵑鷄の啼聲なり。十王經に見えたり。……鵑鷄郭公もとこれ一物にもあらず。二鳥またホトゝギスといふ者とも見えず

と說いて居るので、矛盾した點があり、行文不明であるが、鳥の鳴く聲をホトゝギスと聞いて、さう名づけた梵語から來たと見るのは、兩者同樣である。マグラが曼陀羅からといふのも、同說で、今日も認められて居る。猿を日本釋名凡例にはさると訓じてあるが、東雅に「マシラは摩斯吒也」とあるやうに、益軒もサルでなくマシラを梵語と見たのであらう。

アマは、日本釋名には「梵語なり釋日本紀に出たり」とあるだけで、東雅には見えない。東雅には此の外　アカバカ　ダンナ　ソラ　タツキ　サバク　カリ　フナ　等通計四十二語を梵語からと說いて居る、其の中にはいかにも首肯出來る者もあるが、從ひ難い者もある。右に擧げた中のタツキ以下など怪しい方である。就中さばくといふ動詞を外來語といふに至つては、道理上からも類例上からも、甚しい誤である。我が國に外來語は多いけれども、動詞其のまゝ用ゐた者は、斷じて無いのである。此等は釋名に

歸る——雁　骨無し——鮒

と說いて居るのと同樣、牽强附會と評すべきであらう。東雅には右三類の外に、別に次の三類を擧げて居る。

ニ　韓國の方言　ハタイ——海　セマ（セム）——嶋（詳に埤雜抄に見えたり）

ホ　緬語　ビイドロ　トロメン　ローサ　ヒレジヤヘル　カンテラ　ボタン　ジバン

ヘ　蒙語（拂郎機語卽ち西語又は蘭語）

之を要するに、外來語に對する白石の眼界は相當に廣く、此の點前人未到の境地に達したと言へる。蓋し朝鮮來聘使と應對したり、和蘭人羅馬人を取調べて、采覽異言や西洋紀聞を著したりした其の經歷の然らしめた所と言へ

る。しかし、國書特に我が國古來の言語に對する判斷が往々にして軌を逸して居るのは其の素養の然らしめた者であらう。

日本釋名には音義說に關する者は、天象の部に「あめの反字はゑ也。ゑはひらくかた陽也。つちの反字はち也。ちはとづるかな陰也」「ぎ剛き意也、み柔かなる意也」といふのがある位の者で、他には殆んど見えない。「こは氷也ちは散らす也」といふのも「あはあさき也」などといふのも、其の音に其の義があるといふのではなく、略語と見たのである。音義に深入りしないのは、自語といふことを說いた當然の結果でもあらう。之に反して、東雅は仙覺の影響でもあらうか、到る處意義に言及して居る。其を拾つて見ると、

き　限也……垣　堰　城　際　刻む　寸　等
　　鋭也……錐　釘　鋩　劍　斬る　等
く　入也……履　鍬　釘　楔　等
ひ　魚介也……鯉　鯛　鱧　貝　蝦　あはび　等
ま　限也置也……山　牧　町　衾　枕　等

此等の中には尤と思はれる者もあるが、一方あ音を　紐也　大也　の義として編代を其の例として居ながら、一方小也の義として、小豆　粟　等を其の例として居るやうな矛盾もある。（昭和十八、二、十）

第二十一　白石の所謂方言について

一　白石の國語學史上の地位

白石の東雅が物名訓詁乃至語源解釋の書として、我が國語學史上不朽の名著であることは、今更言ふまでもないが、明治の初年までは、國學者方面からは、敬遠といふよりは寧ろ異端視されて居た。村田春海が次の如く評して居るのなど、其の代表的の者であらう。

かの新井筑後守の朝臣の東雅……古の假字の事にわきまへなかりし故に、をり〳〵は心をさなきひがごとも見え侍るとなむ。（假字大意抄）

明治の中期に至つて、一般西洋學術の隆盛、特に言語學の擡頭が因となつて、白石に對する許價は躍進したが、其も當初は國學者系統の人々でなく、言語學者系統の人々によつての事である。さて東雅の貴ばれる所以は何れにあるかといふに、山田孝雄博士は、白石の「强ひて其の說を作るべからず」主義の嚴守徹底的來强忌避が、最も賞讃すべき事であると斷じて居るが、自分は同博士の次の如く言つて居る方に重きを置きたい。

彼はわが國語の中に外國語の影響の少くないことを論じ、これを時世に關係づけて概論した。……三韓の本朝に

服屬した時、彼の方言の混じたことがあらうといひ、漢學の盛行につれて、本邦の言語が大に變じたことを認め、佛教の行はるゝにつれ、梵語も混入したといひ、禪宗と共に宋元の方言が入り來り、近世に及んで西洋南洋の蕃語も俗間に行はれたものがあるといつて、……（國語學史要）

歴史的研究と方處的研究とに因つたことを、其の學界貢獻の眼目と認めるのは勗すべからざる（第二十參照）然るに其の方處的研究に關する術語が今日のと甚しく異なる爲、現代學者に誤解されて居る要點が存する。少くとも初心の學徒は之を誤解するか、或は全然解し得ないで、疑ひ惑ふ事が多いやうに見受ける。其は白石の用ゐた方言といふ術語であつて、今日の方言とは非常に違つた一面があるのに、之を明かに說いた者が管見には觸れて居ない。

二　方言の意義

方言といふのを（甲）最狹義に解すれば、中央都會の語を除いた地方の言語といふことである。しかし是は其原義からいつても、やや狹きに失すると思はれる。（乙）王維の所謂「入レ境聞二方言一」といふのも、中央都會を含んで居るやうである。楊雄の著と言はれる「方言」といふ書も、夷夏の詞各殊なるが爲に成つたので、夷語を主とするが、秦晉之間、宋魏之間　趙魏燕代之間　などと中央部をも邊鄙の地に並べ「自關而秦晉之故都　好通二其語一也」などと言つて居るのから判斷すれば、中央の語をも含んだ者である。我が國方言研究の鼻祖の如く認められて居る越谷吾山が、

中にも都會の人は、萬國の言語に互りて、をのづから訛少し。……邊鄙の人は一郡一邑の方語にして　且てにはあしく訛多し。（物類稱呼諸國方言序）

といつて居るのは、（甲）說のやうに見えるが、

江戸にては東南の風をいなさといふ。東北の風をならいといふ。（同本文）

なつのくも　江戸にては坂東太郎といふ　（同右）

かし　江戸にてかしといふ。大阪にてはまといふ。京にて川ばたといふ。（同右）

つま　京にて他の妻をお內儀さんとよぶ。大阪にておゐさんとよぶ。江戸にてかみさまといふ。甲斐にて中居といふ。（同右）

などとあるのから判斷すれば、中央都會の言葉でも普遍性の無い者をば、方言と認めたに相違ない。但し階級や職業によつて偏用された特殊語は（乙）の中には入らない。東條操氏が方言を使用地域の相違によると斷じたのが妥當であらう。

（丙）廣い意義の方言は、卽ち Dialect の譯語としての者である。Dialect は一國語が或る特殊な集團中に分派し使用せられる者と見るのが通說であるから、花柳界の特殊語　山窩の特殊語　の如きも其の中の一種と見るを要するが、しかし此は、和漢在來の、地方的の意を有する方言といふ語の原義には當らない。Dialect に適當な譯語が

無いから、止むを得ず、意の近い方言といふ語を假に用ゐると考へなくてはならない。然るに言語學者の中に「方言を或る地方の言と解するのは、狹義に失する。階級語の如きも一種の方言である。」などと說く者があるのは、本末顚倒も甚しい。外國語の定義に盲從して、之を以て我が國固有の者を律しようとするのが、明治以後の西洋心醉者流の通弊であつて、其が此處にも顯れたのである。

さて（丁）白石の東雅に所謂「方言」は何を指して居るかといふに、其の指す所に二種が含まれて居る。一は卽ち前揭の（乙）に當り、次の如き者である。

又（我師）宣ひしは……京の人のものいひ、今の如くにあらず。今の人のいふ所は多くは尾張の國の方言相雜れるなり。……又近き程は三河國の方言のうつり來れるなりと。（吉川本東雅四）

足利殿の代の程、東國の方言相雜はらぬ事をも得べからず。（同）

風土記　萬葉　等にも、諸國の方言のみ見えし少からず。（同八）

谷讀てヤツといふ事は、播磨風土記に見えたり。されば其の始出陽の方言よりや出でぬらん。……今も陸奥國にはハサマといふ地名多かり。これら其始め東國の方言に出たるにや。（同五九）

其後城字讀てシロといひ　柵の字は音のまま讀て、サクといふが如きは、其始東北邊の方言にや出ぬらん。（同一〇〇）

萬葉集に雜の字讀てカケと云ひしは、東國の方言といふなり。（同四九一）

キサ、はもと大隅國の方言に出でしと見えたり。（同五八四）

此等は、何れも我が國の或る地方に限る言葉を指したのである。東雅中斯樣に用ゐた者も、無數といふべき程である。京都　江戸　等のを方言といつた例は見當らないが、中央のをも方言と認めたことは、五方の言＝五方の音といふ語が四方といふのよりは遙かに多く用ゐて居るので明かである。五方は四方と中央とを指すこと勿論であるから、中央と四方とを大體同列に見たのである。此の一面だけを考へると、白石の所謂方言は今日の用語（乙）と同樣であつて、何等異とするに足らないやうである。しかし一方に於て斯樣に解しては、甚だしく妥當を缺く者又は文意の全然通じない者が、多數ある。

三　白石特用の方言

白石は一方に於て、方言といふ語を、前述の如く今日の（乙）同樣に用ゐると同時に、一方に於ては、甚だ廣い（廣きに失する）意義に使用した。例へば次の如き者である。

韓地の諸國、本朝に服從せし後に及びては、彼土の人等此に來れるのみにもあらず、彼國に置れし官符を知りて、其の政を掌れる本朝の人々も多かりし程に、これかれの方言相雜らざるを得べからず。（吉川本三）

韓地の如きも、かの二神の代に、或は開き或は平げ給ひしに、其の海外にある所なれば、其の方言のまゝにこれを呼てワタといひ、其君をツミといひしなるべし。（同一九）

川また讀て、カレと云ひしは百濟の方言也。我國の語に川流をナカレといふ事も、彼國の方言に因れるなるべし。卽今も朝鮮の方言に川を呼びてカイといふなり。（同七三）

鑑の字讀てヨロヒといふは、百濟の方言に出しに似てけり。……カブトといふが如きは、もと韓國の方言に出し也。（同三〇四）

カサ、ギとは新羅の方言に此國の方言とを併せ呼びしと見えたり。卽ち今も朝鮮の方言に鵲を呼びてカシといふなり。（同五一二）

鶯讀でウクヒスと爲す事、既に此國の方言の如くなりしかど、（同五一三）

百濟王の孫酒君に見せ給ひしに、……俗呼て俱知といふと奏す。是今の鷹也。今の如きは、朝鮮の俗鷹をばマイといふなり。彼國にして古今の方言同じからぬ事ある、またかくの如し。（同五二二）

牛をウといふ事は、朝鮮の方言とこそ見えたれ。卽今も朝鮮の方言牛を呼ぶ事はウといふなり。（同五二八）

古の中の百濟の方言　新羅の方言　朝鮮の方言　などといふのを、今日の所謂方言と解しては、（甲）（乙）（丙）何れに見ても文義が甚だたど〳〵しくなるのみではない。今は亡びた　百濟の語　新羅の語　を知ることが、容易でない以上に、其の時代の或地方の方言の如き、之を知ることは不可能な筈である。東雅一部の中にかういふ説明が數十百に上つて上るのを右の如く解しては、牽强附會を徹底に嫌ふ白石の學的態度にふさはしくないことになる。某氏の國語學史に　ヨロヒ　カブト　に關する東雅の説を、

これは如何なる根據に基いたか不明である。と評して居るが、若し之を百濟の某地方の方言の如き意に見るならば、根據不明といふよりは、一歩進んで白石の獨斷臆測と評すべきであらう。ウクヒスを此國の方言卽ち日本の方言といふのも解し難いことになつて了ふ。

此の問題は、白石の所謂方言の一面には特殊の意義があると考へることによつて、大體解決出來る。卽ち白石は方言といふ語を、今日の方言の意（乙）に用ゐる外に、一國の國語 language の意にも用ゐたのである。百濟の方言といふのは百濟の國語、新羅の方言といふのは新羅の國語を指したのである。さうして三韓と交通が始まつて後に、我國に初めて出現したと思しき語や、今日の朝鮮語に似た語をば、百濟　新羅　の渡來した語と見たのであらう。俱知やカシの樣に、據が相當明かな者もあるが、數十百の中には、知らず識らず、其の强ひて説かざる方針に悖つて、想像を逞くした者も出て來たのであらう。

白石は三韓の語のみでなく、支那　天竺　南蠻（フランキー）等の國語をも、又我が國の國語をも方言と稱した。禪敎の來れる後、宋元代々の方言を以て……海外諸國の方言の如きも、……（吉川本三）

五方（此の中には中土卽ち支那をも含む。）の言の中、我國程其聲音少きはあらず。（同一七）

漢土の方言　韓地の方言　の如き、此間（我國を指す）の語となりし例は前にもしるせり。（同二〇）

天下（世界）の言もとより多し。彼是の方言を合せ聞たらんには、多かる中に相似たる事のなどか無からざらんや。（同二五）

かゝる類（ハカセ　ホフシ　ホトケ）はもと我國の上世より云ひつぎし方言あるべきにもあらず。（同一六五）

前に擧げた　ウクヒス　を此國の方言といふのも、我が國語の意に用ゐたのである。どうも名分に關する白石の考へ方には、不都合な者が少くない。足利將軍が名分を誤つて、日本國王と稱したのを、德川氏の初に日本國大君と改めた。其を白石が再び國王と稱することにし、同窓雨森芳洲が之を難じたのに對して「我が國の王といふのは親王より下位である。田舍學匠何を知らうぞ」といふやうな放言を敢てしたのは特に、恕すべからざる名分の罪人である。東雅の中に支那を中土といひ、日本を我が東方といひ、又支那の方言といつてもよい處を、多くは字の音といつて居るのも、又我國の音韻を說いた著書を東音譜と稱したのも、皆此の思想の臭味がある。其で支那の言葉をば方言の中に入れないで、其の他の國語だけを方言と稱したのではないかと疑つて見たが、さうでもない。四方といふよりは　五方の言　五方の音　といつた處が多く、特に前揭の如く　宋元の方言　漢土の方音　などと用ゐて居るので支那の言葉をも方言の中に入れたことは明かであるが、若干優位に在る者と見たやうに取れる。

四　白石の方音說

白石は、國語を方言と稱すると同時に、或國語に用ゐられる一般的の音聲をも方音と稱した。

我むかし海外の人こゝに至れるにあひて、其言を聞き其義を問ひし事どもありけり。[1]我東方の言ほど聲音の少きはなく、[2]西方の言ほど聲音の多きはなし。[3]中土またそれに次ぐ。[4]東南の方音は揚れり。[5]東北の方音は濁れり　[6]西北の方音も亦これに同じ。其の事たとへば鶯の啼く聲を聞に、初春には聲なを澁りぬる、春半たつ程やゝ滑になりて春暮ぬべき頃ほひには、百千の囀りの音あるが如し。東方の音は新鶯なり。中土の音は喬木に遷れる鶯なり。西方の音は流鶯なり。（吉川本五）

此は東雅總論中の有名な一節であつて、白石の國語學評價高轉の一因となつた者と見てよいが、どうも誤解する人が多いやうである。

近年國體の明徵されるのは至極結構であるが、現時の、日本中心の思想を以て、江戸時代頃の（國學者を除いた）一般學者の所說を解すると、大なる過誤に陷ることがある。古の所說を解するにも此の用意が必要である。然るに之を忘れて、右の文の中土を我が國の中央の如く解し、從つて　東方　東北　西方　皆我が國內の事のやうに說いた者を見たことがある。1 2 3 5は其でも解釋出來るが、[4]東南の方音　6西北の方音　といふのは　我が國內としては該當する者が無い。それで　西北といふのは　出雲　伯耆　地方を指すと說いて居るのも、隨分苦しい說

明であるが、東南といふのをば、説明の仕方が無い爲に、西南の誤であらうといふのは妄も亦甚しい。さうして「白石が我が國の方言についてかやうな卓見を述べて居る」と稱揚するに至つては、地下の白石も苦笑する外はないであらう。一の我東方といふ語は、東雅に相當多く用ゐられて居るが何れも日本の東方ではなく、我日本と解せずには意が通じない。2の西方は西洋を指し、3の中土は支那を指し、其の他の　東南　東北　西北　何れも皆支那を中土としての事である。白石が支那を中土と稱するのは名分を誤つた者で不都合であるが、其を日本と誤解するのも笑止である。

白石の所謂方言や方音のみでなく、古人の用ゐた術語を、今日の用例から推して、之を判斷し、とかくの評言を試みたり、或は之を基準として自家の學説を進展させたりする人が往々にしてある。自他といふ術語の如きも、今日では　自動　他動　の意にのみ用ゐられると言つてもよいが、其を以て「一歩」や「詞のつかね緒」等の自他を解しては、甚しい齟齬を來す。此等の書では述者又は主語を自とし、其の對者又は第三者を他とするのが普通である。之を悟らずして古人の説を怪しみもし輕んじもした筆者自身の體驗もある。單に語學に就いてのみでなく、あらゆる事物に就いて、正しく考察するには、先以て、其に關係あることばを正確に理解し正確に使用する用意が必要である。斯の如く考へて、數年前此の稿を認めたが、白石の用語論は些か小題に失するやうに考へて、其のまゝにして置いた。然るに最近特に此の感を痛切ならしめる者が眼に觸れたので、聊か增訂して之を公にする。（昭和一五、五、三）

第二十二　萬葉に關する富士谷派の學説

富士谷父子や五十嵐篤好の語法に關する學説が、我が國語學史上極めて貴重な者であることは言ふに及ばないが、此の派の人々の語法研究も、其の動機は同時代の他の學者のそれと同じく、矢張詠歌を目的とする者であつたので、萬葉の研究に相當の力を費し、萬葉燈其の他の著書の中に散在する卓見も少くない。自分はまだ此の派の學説が、萬葉學の上に如何なる地位を占めて居るか、又如何なる大家によつて如何なる紹介を受けて居るかも、よく知らないが、管見の二三を列擧して見る。

一　言靈説　倒言説

富士谷派の説によれば

1　かみつ世　2　中昔　3　中ごろ　4　近昔　5　をとつ世　6　今の世

さて山上の憶良が、

神代より　言傳てけらく　虚見つ　倭の國は　皇神の　いつくしき國　言靈の　さきはふ國と　語りつぎ　言ひつがひけり　今の世の　人もこと〴〵　目の前に　見たり知りたり……

と詠んで居るのを見ると、天平頃までは言靈の妙なるはたらきにつき、世の中の人が其のしるしを見もし、又必ずさうあるべき道理を知つて居たのである。然らば其の言靈とは何ぞといふに、言代主神の神靈であつて、人が歌をよむ時などに、言靈をかしこみ直言を捨てゝ倒言を用ゐれば、その倒言には必ず神の靈がましまして、人の志をさきはひ給ふものである。直言といふのは、所謂たゞ言であつて、ありのまゝに言ひ出づるのであるが、此は言を司り給ふ神の靈を殺すことになる。倒言は、詞のつゞけ樣を情より遠ざけて、うるはしく婉曲に言ひなすのであるが、かくして初めて、其の言の神靈を活かすことになる。

此の倒言といふ用語はやゝ首肯しがたいが、鎌倉時代の有心足利時代の幽玄などといふのと一脈相通ずる所がある樣に思ふ。此の言靈說が富士谷學派の基幹を爲すものであつて、次に擧げる歌の解も、枕詞の說も、語法の說も此の源から流れ出たものであることは、特に注意を要する。

倒語の大切な事を知つて初めて、卷四大伴家持が紀女郎に送つた五首の歌なども、神髓に入つた鑑賞が出來るのである。

1　吾妹子が　宿の籬を　見に往かば　蓋し門より　返してむかも　（七七七）

2　うつたへに　籬の姿　みまくほり　行かむといへや　君を見にこそ　（七七八）

3　板蓋の　黑木の屋根は　山近し　明日にも取りて　持ちて參ゐ來む　（七七九）

4　黑木取り　草も苅りつゝ　仕へめと　いそしきわけと　ほめむともあらず　（七八〇）

5　ぬば玉の　昨夜はかへしつ　今夜さへ　吾をかへすな　路の長手を　（七八一）

古の中吾妹子がの歌は、吾妹子を見に行くと直言に言はず、籬を見に行くことに爲しふせてよんだ點が、甚だ結構なのである。此を紀の女郎の方で、籬を見にではあるまい。我を見にであらうと思ひ取つて愈よ面白いのである。然るに家持の方で、吾妹子の歌だけでは、もしや此の情が通じなくはあるまいかと危ぶんで、うつたへにの歌をよみ、之を說明してしまつたのは、取りも直さず言を司りたまふ神の靈の妙用を疑つたのであつて、中昔以後のてぶりになる。此の二つの歌は、斯の道の本意のありなし、詞のつゞけ樣、近きと遠きとの區別を悟るのに、極めて都合のよい歌であるから、よく目をとゞめて味ふがよい。さて3 4の板蓋のと黑木取りとは、屋根の上に逃れたとも言ふべき歌で、至極面白い。之に反して5のぬば玉のの歌はまた直言である。

貧窮問答の歌が、何故に問答體に詠まれたかを明かにした說がない。思ふに問の方に、

我よりも　貧しき人の　父母は　飢ゑ寒からむ　妻子どもは　こひて泣くらむ　（八九二）

とあるのは、矢張り倒語であつて、父母や妻子のない孤獨の貧人であることが分る。又答の方は

父母は　枕の方に　妻子どもは　足の方に圍み居て　憂ひ吟ひ　（八九二）

とあるのを見れば、此は父母妻子のある貧人の上である。卽ち孤獨な者は、苦しいとはいひながら、自分だけ堪へればそれでよろしい。父母妻子の苦しむのを見るのは、一層苦しいであらう。されば之をよく辨へてそんな苦しさ

に立ち至らぬ樣に、心を用ゐよといふ意を、自問自答したものである。憶良は、決して自分の心やりに、之を詠んだのではあるまい。誰かは知らぬが、貧窮に陷りながら、一向心がけのよくない人があつて、其を諫めたものであらう。かくの如く考へられるのが言靈の活きである。

萬葉に、詠花詠鳥などといふ題をおいた歌を、後世の題詠と同一に考へるのは、倒語の妙用を知らぬのである。此等の歌も多くは相聞の歌であることは、よく玩味して見れば分る。例へば、

古に　ありけむ人も　我がごとか　三輪の檜原に　挿頭をりけむ　（一一一八）

往く川の　過ぎにし人の　手折らねば　うらぶれたてり　三輪の檜原は　（一一一九）

此の二首共に詠葉となつて居る。古にの歌は詠物と言はれぬこともない樣だが、矢張古人がかざしたかざゝなんだ、といふ區別を何故にたづねたのか、單に詠物としては說明出來ぬ。往く川のの方は、勿論檜原がうらぶれるといふ事などあるべきではない。此は男女贈答の歌であらう。此のみに限らず集中に題ありながら、題に反いた歌が多い。卷三の讃酒歌十三首中には、かへつて酒をおとしめた歌さへある。此が上つ世の手振であつて、後世有注の歌などといふことを言ひ出したのは、言靈の妙用を知らないものゝ業で、蛇足笑ふべき極である。」

二　枕　詞

枕詞は、たゞ歌を優艷ならしめる爲に用ゐるものと思ふのは、未だしい考である。つら〳〵考へて見るに、枕詞は所詮はよせ（序歌）の短いものである。よせ歌にはよせとうちよせとの二種ある。

ふる衣　著ならの山に　鳴く鳥の　間無く時無く　吾が戀ふらくは　（三〇八八）

かういふ風に心をよせたのをよせといふ。又

道の邊の　五柴原の　いつも〳〵　人のゆるさむ　ことをし待たむ　（二七七〇）

かういふ風に、たゞ詞の上だけよせたのを、うちよせといふ。枕詞にも此の二種類ある。例へばくれなゐのにほへるなどは、心のよせであつて、時つ風ふけひなどは、詞だけの打ちよせである。此の二種共に、所詮はその歌に用のない語であるが、其をわざと求め出して用ゐたのである。其の理由は、倒言を以て人に思はせる樣にするのが、我が大御國言の肝要である所から、何か言つては悪いと思ふことがある時、其を少しでも言へば、全然言つたのと同樣になる。さればとて、少しも言はなければ語がたらなくなる。そこで無用の詞をわざとおくのである。但し初から全然無用な詞を用ゐるのではない。何か必要の詞を用ゐたいが、其を言ふべきでない時に、無用の詞にかへたのである。

以上述べたのは御杖の說であるが、その門人五十嵐篤好は此の說を展開して、心のよせを更に二種に分ち、詞のうちよせをも更に二種に分ち枕詞の用についても、極めて面白い說明をして居る。枕詞の說は必ずしも萬葉にのみ關した者ではないが、其の引例が多く萬葉から出て居るから今少し述べる。

眞淵は枕詞といふ名稱は雅言ではない。枕は夜のものでかたより、冠は日のもので專らであるから、冠辭といふがよい。さうして此は歌の調の足らんのを調べる爲に起り、一つには詞を飾るものであると說いて居る。しかし此の說はよろしくない。枕詞は其の下にいふ事の情を深める爲のものである。例へば薄氷の薄き心といへば、如何にも薄き心と聞え、眞木柱ふとき心といへば如何にも太き心と思はれる。

元來枕は我がまくものである。肩より首の邊が枕にまきついた樣になるのである。それでたゞ著く　著るなどといふのとは違つて、しかと其の者に卷著いて其の者を力とすることであるから、情を示すに枕といふ語をつかふ事が多い。草枕　妹が手枕　などはいふまでもない。

沖つ浪　きよる荒磯を　敷たへの　枕とまきて　なせる君かも　（二二二）

といふのも枕といふ語で、あはれ深く聞えるのである。

いかにあらむ　日の時にかも　聲知らむ　人の膝の邊　われ枕かむ　（八一〇）

といふのも心を安くする意がある。平言の　枕を安くする　城を枕に討死するも　枕草紙　といふのも、源氏の枕ごとといふのも皆さうである。それ故に、まづ言ひ起す詞だからといふので、發語とか序言とか言つてもよろしいが、其の情を深める爲の詞であるといふことを示すのには、枕詞といふ名が最も適切である。冠辭といつたのでは、此の味がない。

枕詞には次の四種類がある。

其の一　そのものゝあるかたちをいふ類　霞立つ春　露　霜の秋　靈ちはふ神　天さかる鄙

其の二　他物をもてたとへていふ類　行水のかへらぬ　鳴神のおと　鶉なすいはひもとほり

其の三　他物の名に同言のあるのを重ねていふ類　いな舟のいなにはあらず　いかこ山いかが　ちゝのみの父

其の四　他物にあることゝ同言なるより言ひかけたる類　玉くしげ二上山　梓弓春　燒太刀をとなみの關

其の一其の二は御枕の心よせに當り、其の三其の四は御杖の詞のうちよせに當る。

さて霞たつ春といへば、只春といふのよりは、いかにものどかに聞える。しかしそれは言外にその趣があるので、直言ではない。又日にかゝる枕詞は幾つもあるが、天傳ふ日笠の浦　天傳ふ日の御子　といつたのでは、ちなみを失つて言外の妙趣卽ち倒言の妙用がない。

枕詞の成立　古今集に音にのみきくの白露とか思ひ出づるときは山などといふのは、枕詞ではなく言掛である。枕詞には必ず名（體言）があつて、言（用言）のみのものはない。前記其の一は名に言をつけたものが多い。それで枕詞を其の成立から分類すると次の如くなる。

枕詞
- 名の下に他の語をつけず直ちに下につゞくもの　言をつけたもの　梓弓
- 名の下に他の語をつけたもの　のをつけたもの　霞立つ
  - なす　じものをつけたもの　ちゝのみの
  - を、や、に、て、がをつけたもの　燒太刀を　鶉なす

以上篤好の枕詞說であるが、宣長の「頭のみならず、すべて物のうきて間のあきたる所を支ふる意」といふ說、雅澄の「語の頭をたすけもつ意」といふ說も、現代諸大家の說も、此に比して格別進んだ者ではないやうに思はれる。

三　ずはの解　ねばの解　其の他

以下は主として篤好の說であるが、何れも言靈の說　倒言の說　から、展開し來つたものであること勿論である。

かくばかり　戀ひつゝ不有者　高山の　岩根しまきて　死なましものを　（八六）

宣長　久老　守部　の諸大家が此を戀ひつつあらむよりはと說いてから、一般に疑ふ人もない樣になつて居るが、是はたゞ言ひ試みたのであつて、此の詞を解したのではない。只一通その意がわかるといふだけでは感心できぬ。

さて集中に戀ひつゝあらずばと詠んだ歌を一通りさがして見ると、約十四首あるが、大抵は皆不有者と書いてあつて、あらずばかあらずはか淸濁不明である。

中々に　人と不有者　酒壺に　なりにてしがも　酒にしみなむ　（三四三）

しるしなき　物を不念者　ひとつきの　濁れる酒を　のむべくあるらし　（三三八）

ことしげき　里に不住者　けさ鳴きし　雁に比ひて　いなましものを　（一五一五）

長き夜を　君に戀つつゝ　不生者（イケラズ）　咲きて散りにし　花ならましを　（二二八二）

中々に　君に不戀者　ひらの浦のあまならましを　玉藻かりつゝ　（二七四三）

中々に　人と不有者　桑子にも　ならましものを　玉の緒ばかり　（三〇八六）

此等も淸濁何れか分りにくいが、どうしても先づ此の淸濁から研究して行かねばならぬ。幸な事には卷二十に、家にして　戀ひつゝ安良受波　汝がはける太刀になりても　いはひてしがも

といふのがある。此の卷は全部　一音一字の假名書にしてあつて、淸音には波を用ひ、濁音には婆を用ゐて居る。故に此の歌が安良受波と書いてある以上、淸音に相違ない。然らば他の歌も之に準じて、淸音と考へるが當然であらう。

さて戀ひつゝあらずはといふ語の意義は斯程に戀ひつゝあるのが苦しいので、何うしたらよいかと思ひめぐらし

て見るに、如何にともせむすべがないから窮りはてゝ、さらば此のまゝ戀ひつゝあるか、戀ひつつあらずとする時は岩根を枕にして死なう。

といふやうに言つたものである。即ち外にせむ方なくなつて、思ひ窮つて石木にならう、土にならうなどとあらぬ事を思つて見るのである。

忍熊王逃無所入。則喚五十狹茅宿禰而歌ひて曰、いざあぎ　いさち宿禰　玉きはる　內のあそが頭槌の　痛手於破(メ)瑞(ヅ)破(ハ)　にほとりの　かづきせな　則共沈二瀨田濟一而死（日本紀）

のも同樣である。

今は武內宿禰の爲に痛手を負うて死ぬより外はない。さうするか。さうせぬといふ時には水に入つて死なう。

といふ意に相違ない。之を「痛手おはずば猶戰はむものを」といふ樣に見る說があるけれど、筋違であつて、倒言の妙趣を得たものでない。

先年橋本進吉氏の此の語について發表された說は、大體篤好の說と一致して居る樣に思はれる。さうして松下大三郎氏なども之に贊成して居られるが、百年以前の篤好に此の說のあつた事は、埋もれしむべきことではなからう。但し自分は此の說と少し違つて「此ノ樣ニ戀ヒツヽアルコトサヘ免レ得ルナラバ」或は「戀ヒツヽアラザルヲ得サヘスルナラバ」などと見たい（國語法論攻三九三頁以下參照）

見奉りて　未だ時だも　不更(カヘラネ)者　年月の如　思ほゆる君（五七九）

一年の　七日の夜のみ　あふ人の　戀もつきねば　夜のふけ行くも（二〇三二）

卷向の　檜原も未だ　雲居ねば　小松がうれに　沫雪ぞふる（二三一四）

此等のねばを宣長がぬにの意といつたのも、前條同樣　詞をあてただけで解したのではない。未だ時だに變らぬにと詠む時は、我より斷ることゝなる故に、そこを逃れる（直言をさけて倒言にする）爲にねばとよんだのである。

即ち

相見て未だ時だに變らねば久しとは思ふまじき理なるに

といふ意である。一年にの歌も夜が更けてはならぬにといふ詞を省いたものである。

霜雪も　未だ過ぎねば　思はぬに　春日の里に　梅の花見つ（一四三四）

斯の如くねばとぬにと兩方合せ用ひてあるのをよく考へたならば、思半に過ぎるであらう。又ねばばかりでなく、

おくれ居て　我が戀ひ居れば　白雲の　たな引山を　けふか越ゆらむ（一六八一）

なども同じ趣である。

右の外御杖の（1）をさ〳〵の說（2）人名の下のいは後へおしやる氣味といふ說、篤好の（3）霧禁(ナガメイミ)は禁房の意であるといふ說、（4）あきじこりは賣そこなひ懼さらしの意であるといふ說（此は古義も同說　暗合か）（5）さ男鹿　さ夜　さ苗などのさは生(ウブ)のまゝの意といふ說　など、何れも先人未發の者と思はれるので、創說の功を埋もれさせたくない。

第二十三　返し狀について

一　序　言

昭和九年の七月、校註かざし抄の附錄として、富士谷御杖の稿本と思しき裝抄を刊行した際、「あゆひ抄などに所謂かへしざまは、裝抄に說いてある通り、打消の意の助動詞　不　本末　靡　往　日　來　ぬ　に　ね　な　を形容詞風に認めた者であらう。保田光則などが之を　ほら〳〵　すぶ〳〵　ゆら〳〵　など重ねていふ狀と解したのは從ひ難い」といふ私見を公にした。其の後、廣島文理大關係の「國文學攷」（論者姓名及び號數を逸した失禮を謝する）に、あゆひ抄師說　奧呂丸ヶ條傳　を引いて、私見を補訂された。上野翁所傳の裝抄寫本の誤について、自分の下した想像說が誤でなかつた證明を得たことを喜ぶと同時に、見聞が狹く、藏書の乏しい爲に、奧呂などといふ書はあるまいとまで公言した管見を深く恥ぢた。其の後、松井簡治博士所藏の四具攷證錄　板垣勇次郎氏所藏の全然別種だといふ裝抄の事を聞きながら、或は怠慢の爲、或は借覽を許されない爲、そのまゝ今日に至つた。

然るに本年三月の「文學」誌上に菊澤季生氏が「裝抄と三身圖說に就いて」有益な報告をされたが、其の中に、私見にも論及された。成程とうなづかれる點も多いが、若干贊成しかねる點もあるので、聊か遲れ過ぎた感がありけれども、此處に一言所信を述べる。

二　かへすといふ語

かへすといふ語を、成章は常に打消の意に用ゐて居ること、次の如くである。」

何ず……かへす詞いふに及ばず。（あゆひ抄不倫）

何まじ……可倫をかへしていふ詞の心也。（同右）

何かは……心をかへして落著する詞なり。（あゆひ抄疑屬）

かへす伏や……なれや……ならんやはといふ詞なり（同右）

何やは……心かへりて落著するすることかはに似て（同右）

初の二つが打消の意であることはいふまでもない。後の三つは後世の所謂反語であるが、此も形は疑問であつて、實は一種の打消なのである。

嬰之詞有三差別。一屋波之波休不飜。二屋波之波雖略等飜。（手爾波大概抄）

飜とはいひくだしたる詞の下に、やは　かは　ゐや　の三つの中をおけば、其心うちかへすなり。……うちかへ

さず……ひるかへさず。（手爾波大概抄之抄）

一種やはと言てそくさ（即座）にはかへらず下迄言下して心のかへる有。（紺小路手似蒙傳）かへるかな……木がくれはせぬ物をとかへる也。（春樹顯秘增抄）

かへるや　いひ捨て上へ心のかへる也。花を見ましや　思ひかけきや（同右）

めやといふはかへるてには也。（同右）

やはは意のうらかへる靠也。（玉緒四）

めや　めやは　らめや　いづれも意のうらかへるときに用ふ。（同右）

右の用例から、古くは打消乃至反語を、自動としてはかへる、他動としてはかへすといつた。其が後にはかへるといふ自動の方のみ用ゐられ、遂には反語といつて打消とは別個の者を指すかのやうになつた。しかし成章は、手爾波傳等の影響により、かへすといふ古い語を用ゐ、其に普通の打消と反語とを含ませた者と信ずる。菊澤氏が、「反轉の意にも用ゐた」といふ反轉は、1反語とも解され、2上に意が返る意にも解され、3又反覆の意にも解されるが、成章がかへすを2や3の意に用ゐた例は見當らない。或は此も自分の見聞の不足かも知れないので、さういふ用例があつたら示教して下さる樣、大方各位に懇請する。

三　かへし狀と形容動詞

「あゆひ抄」大旨に

在狀　返狀　は、たとしへなく變れること多き故に、狀とのみいふ時は、多くは　芝狀舗狀　のふたつを指せり。とあるから、在狀と返狀とは類似してゐる筈である。さうして在狀（遙かなり等）に類似した形容動詞　早かり　戀しかり　は、形容詞の立本（阿列語幹）から立返つて、在狀の樣に活くから、返狀といふのであらう」といふ說は、一應傾聽に値する。しかし　在狀　返狀　が　芝狀　舗狀　と全然違つて居るといふのを以て、在狀　返狀　が類似して居ると解するのは「同じ水中に棲む者ながら、鯨や貝は魚とちがふ」といふのを、鯨と貝と類似して居ると解するのと同じやうな不合理に陷る恐がないだらうか。勿論類似して居る點もあらうが、甚しく違ふ點があると考へられる。又若し早かり等ならば、裝抄に「かへしざま末靡なし」とあるのは、裝抄其者を疑へば、問題外となるが、あゆひ抄おほむねに「かへしさまは末靡なき故に左のかたがき（屋書即ち活用圖）に省けり」といつて居るのに合はない。即ち　早かり　戀しかり　は末、その靡（連體）は　早かる　戀しかる　として擧げてある。此等の用例は少くはあるが、有倫の中にも「女郎花多かる野邊」「はかなかる夢」等の例を示して居る。次に立本から良變に移つて行つたのなら、かへるのではなく、勿論かへすのではない。移るとか行くとかいふべきではあるまいか。又

それ程在狀に似た者なら、在狀をかたがきに記しながら、返狀を記さないといふ理由もないと思はれる。

成章は、あゆひ抄有倫　有の類の助動詞）の中に、

何あり　凡ありはまたく孔（良變）なれば、此の抄に入るべきにあらねど、おほく脚にうちまじりてある詞なれば、ひかれて出す。

と言つて居るが、此は「良變を助動詞と混同するのではない。便宜上交へ說くのである」と斷つたものである。然るに、其の後に　こもれり　まされり　等のりの次に　何くあり　何かり　といふ所謂形容動詞を擧げて居る。孔と見たか脚と見たか、稍不明の點もあるが、此等が返狀であることを一言もして居ない所から判斷して、之を狀或は返狀と見たのでないことは明かである。

くは狀（形容詞）の往（連用）かはくあの引合（約）にて、二詞全同（これを襲の立本ともいふ）

と說き、約一頁に亙つて、數々の例により、形容動詞に當る者を說明し、特に立本の事をいつて居るのだから、其から返すといふことを說くのなら、實に一擧手一投足の勞に過ぎないのに、かへすとか返狀といふやうなことは、一言もいつて居ない。

四　かへし狀と助動詞

頭腦の秀れた成章程の者が、打消のぬ等を狀と見ることは、有り得べからざる事だ、といふのも如何かと思はれる。廣日本文典の助動詞活表中に、ずを動詞類の方に入れてから、此に從ふ人が多いやうであるが、自分は四十年前から之を疑つて、當時の國學院雜誌に之を發表したことがある。其の後更に熟考するに從ひ、益々ずぬね は、其の語形は形容詞と違ふが、用法は形容詞に酷似することを信ずる樣になつた。第一に　ずけり　ずけむ　等極めて古く、しかも稀に見る例外を除いては、下に助動詞が附かない。第二に連用形にても附くがしても附く。さうして　つつ、ながら　が附かない。第三に「思はず立ちどまる」などの連用法は、動詞の其が下の語と合熟するのとちがひ、形容詞の其が副詞となるのに近い。第四には知らずは等將然の下のはを濁らない點、形容の高くは等に近く、動詞の行かば等の濁るのと違ふ。第五に命令形が無い。此等の五點から　ず　ぬ　ね　を形容詞的に見た方が合理的である。さればこそ、江戸時代の學者も之を形狀言同樣に考へた者が多いのである。其の代表者ともいふべきは、義門であつて、其の和語說略圖には、無　正　といふ久活志久活形狀言の次に、き　ず　じ　を擧げて居る（此の點本居の紙鏡も同樣である）上に、

此の五種の活らきは、漢字に配すれば、大抵はかの形狀字而又は半虛字など云らんに當る詞ども也。

（和語說略圖上編注）

と明言して居る。漢文法の形狀字而又は半虛字といふのが、形容詞に當ることは、言を俟たないであらう。されば成章が之を形容詞的に考へたからとて其の頭腦を疑ふべきではない。

以上述べ來つた所は「返狀は　ぬ　に　ね　な　である」といふ私見を飽くまで主張するやうであるが、實は若干の疑を懷いて居るのである。あゆひ抄不倫に「何す　かへす詞いふに及ばず」とあるのは、私見を援ける者であるが、

何ぬ……たちぬ(活用)　何ね……(あゆひ抄不倫)

といつて居るのは、す　のみでなく、ぬ　ね　をもあゆひと見たので、返狀と見たのではないやうに思はれる。但し此の撞著は彼の裝抄に

不倫の裝につきて狀(原文裝)となれる也

とあるので大體解消されるであらう。即ち　ぬ　ね　などは不倫の助動詞であるが、此が動詞の下に附いて、形容詞となつたといふ說明と解して、よくわかる。上野翁の寫本には裝となれる也とあるが、其では意を爲さない。此は明かに裝と狀と字形が類似して居るので、誤寫したに相違ない。菊澤氏の紹介された所謂一條本に何うなつて居るか、知りたい者である。さて此はよいとして不倫の初の方に

すゑては何す　といひ、なびきては何ぬ　といふ。

とあるのは、返狀に末廉なしといふのと明かに矛盾するので、此の點特に私見の主張を躊躇せしめる。

五　餘　說

しかし一歩進んで考へると、成章程の大家でも錯誤に陷ることが無いわけではない。例へば

但裏にはキルと心うべきこと前にいふ。(有倫　何にあり　何なり　の條)

とある裏(自稱)は　內(有情)　といふべきを誤つたのである。前にいふに該當する者を、求めると

里言には外(非情)にアリといひ、內(有情)にキルといふを……(有倫何あり の條)

とあつて、明かに其の誤が認められる。此は一寸した筆の誤ともいへるが、他に筆の誤などと辯護出來ない者がある。其ははたといふ語をかざし抄ではかざしと說きながら、あゆひ抄では、特に八多隊といふ種目を設けて、あゆひと見て居ることである。尤もかざしのはたと同じからぬことは、かれは裝の廉を受け、これは末をうくるにて知るべし。(あゆひ抄八多隊)

といつては居るが、明かに廉(連體)の下に附いたはたの例は、かざし抄の方にも擧つて居ない。うらむらんはたを連體の下と見るのは無理である。特に甚しい錯誤は、

郭公　なく聲聞けば　あぢきなく　主定らぬ　戀せらるはた　(古今)

唐衣　きて歸りにし　小夜すがら　哀と思ふを　恨むらんはた　(後撰)

といふ同じ歌を、二首までも、かざし　あゆひ　雙方の例歌として擧げて居ることである。此の恨むらむはたは連體の下とも見られる樣であるが、玉緒に之を同じ後撰のわびしはた(形容詞終止の下)と同格に見た說が妥當である。此から推せば、成章程の大家もぬをあゆひ(助動詞)と考へた時もあり、上の動詞と合して、狀と(形容詞)考へた時もあつたのであつて、其のぬに末廉なしと考へたり、或は末廉ありと考へたりして、迷つたのではあるまいか。あ

らゆる學問皆之に類したことがある中でも、特に語の學問の品詞分類については、何んな人をも迷はせることが若干あるものであると言へる。

要するに返し狀を「ぬ」「に」「ね」「な」としても、腑に落ちない點があるけれども、早かり　戀しかり　等の形容動詞の如く見るよりは、撞著の度が遙かに輕く、「かへし」といふ名にも妥當し、且　裝抄　あゆひ抄師說　奥呂丸ケ條祕傳　等の說が生きて來ると信ずるのである。終に臨んで、菊澤氏が裝抄の異本と三身圖說とを紹介して、蒙を啓いて下さつたことを感謝し、併せて數々の妄言を重ねたことをお詫びする。（昭和一六、一、一六）

第二十四　義門の國語學史上の地位

義門は本居派の國語學を繼承し富士谷派の學說をも參酌して、用言活用の研究を大成した。卽ち江戸時代國語學の最高峰に立つと同時に、今日の用言研究も、此より歩を進めたこと幾何でも無いと言へる。其の學說について、如何に前人を承け、如何に後世に影響したかを、具體的に詳述することは、後項に讓つて、此處には、八衢及び玉緒の補正　假名遣倒重派との論戰　和語說及び略圖等　音韻の研究　の四項に分ち其の著書について、注意すべき學說一二づつを擧げることにする。各書の下に成立の年（紀元年數）卷數　木版　活版　寫本　燒失　當時の大家の歿年等を略記輪廓的紹介を試みる。

一　八衢及び玉緒の補正

詞の八衢疑問　文化十　2473　一冊失　（前々年春海歿）

七年前に出た本居春庭の詞の八衢は、動詞活用の研究書としては、空前の名著であるが、義門が其の中の誤乃至不完全な點についての疑問を記して、之を春庭の許に送つたのが本書であつて、二十八歳にして早くも卓拔な學識を有したことが分る。後之を整理增補したのが山口栞である。

山口の栞　文政の初一旦脫稿　三冊木版　（文政三藤井高尙の序文）

天保四年に至り、本居春庭の詞の通路を見て、初稿中の或者を省き或は改めて、同七年刊行した。本書の序文によつて、義門が高倚に師事した趣が分る。（本居太平の門人といふ說は誤であらう、門人帳に見えない。）本書の中注意すべき所說は

1　鎌倉時代から用言活用の事を、通音　音通　等といひ、契沖の頃から、はたらき　轉用　などとも言つたが、其の中には

（い）用言の活用

（ろ）天木月白眉　等、熟語となる時、變る者

（は）挽我歩く消す　等必然でない者を含めて、區別しなかつた。其を義門が判然と區別したのが、本で、現代では（い）だけを活用　はたらき　變化　等と言ひ、（ろ）（は）をば通音といふのが定說となつた。

2　「八衢におはすを佐行變格と見て居るが、おはさず（源氏少女及び大和）者にぞおはす（紙草子）等によれば、四段活らしい。又　おはせ給ひし由（宇津保）　おはせたれど（榮花）　等によれば、下二段活にも用ゐたらしい。此の二の事を一種の如く誤認したのではないか」と疑ひながら、「此等の異例は誤寫で、矢張佐行變格と見るがよからう」といつて居る。大槻博士の說も同樣であるが、山田博士は更に證を擧げて　おはすが　四段　下二段　兩活用であることを强く主張して居る。

3　用については、初め本居父子の波行上二段說に從つて居たが、閑居の友　蜻蛉日記　等の用例により、和行上一段と認めた。率は八衢の和行上二段說を取らず、上一段と斷じた。現代の學者多くは之を認めて居る。

詞の道しるべ　文政元　2478　一冊失

本書も八衢の補足を目的とした者であるが、稿本燒失して今は傳らないやうである。筆者も見たことは無いが、義門の言其の他によると、用言の活用形に

將然言　連用言　截斷言　連體言　已然言

と命名したのは、本書が嚆矢である。宣長以來　用言につゞく　體言につゞく　といひ來つたのを　連用　連體とすべきか　續用　續體とすべきかについて、相當考察を廻らした後、當時の漢學の大家　猪飼敬所　松本愚山　兩人の意見を聞いて、之を定めたのである。一體に概念を明かにするには命名が必要であるといふ西洋流學說の是非は別問題として、此等の術語が長く傳はるにつけて、義門の學的良心の程を忘れてはならない。

玉緒繰分　天保六　2495　五冊木版

本居宣長の詞の玉緒を難じた書を見て遺憾に思ひ、其の解し難い所を釋き明し、若干補正を試みた。玉緒にては不調の歌として擧げてある者は、多くは誤寫の本によつたのである事を指摘し、又「すべてなりはにありの約」といふのに對して、截斷（終止）の下のなりはさうではないと說いて居る。

友鏡　文政六　一折　木版（整年濱臣歿）

友鏡底の影　天保十二　二冊　寫本

友鏡は宣長の紐鏡に　將然言　連用言（欄外に使令即ち命令）を加へたので、本居の八衢の活用圖を兼ねた形になる。後に之を補訂したのが八衢友鏡　略圖會で、遂に和語說略圖となつた。其の詳しい事は後に讓る。

文政の頃から八衢補訂の爲、絕えず之に書入をして二十餘年に及び、一部の書として、刊行しようとし、天保十二年六月五日附で自序を書いた其の劈頭に

底の影　うくる言葉は　友鏡　あはせみてこそ　知るべかりけれ

と詠みながら、未成に終つたのが、友鏡底の影である。蓋し友鏡一折の圖表に照して、あらゆる動詞の活用を實證的に明かにしようとした者である。今日傳つて居る者は次の如き順序を經て居る。

義門の書入を門人青山茂春寫す――上野の新居守村寫す――深川富岡八幡の古川躬行寫す――小田清雄寫して整理す――寫者不明大槻藏とある本を正宗敦夫氏寫す――多屋頼俊氏寫す――妙玄寺現住義門曾孫東條義山師寫す。

之を成本と見ず、資料と見て書名を友鏡底の影料と名けたのは、小田清雄である。「おはす」が四段下二段兩活であつて、佐變ではあるまい」といふ疑も載つて居る。此が前記山口栞の條に說いたやうに發展したのである。「聞えごつのりごつ」は四段活であるから古事記傳にゴトスの約と言つてあるのは疑はしい」と說いて居るのも從ふべきである。「八衢に　こそ　の係に對する奈變の結は　ぬれ　ね　二つあるといふのは誤で、ねは常に命令でこそに對する結とはならない」といふのも首肯せざるを得ない。

二　假名遣偏重派との論戰

指出の磯　磯の洲崎　文政三　合本　一冊　木版

春海の琴後集に「琴馴らしゝ露分衣」といふ語がある。此は佐行四段に過去のしが附いたのだから、ししが正しい。然るに其の一方琴馴らせし」といつた處もある。其を義門の門人（義門は自分は門人など數へる資格は無いといつて友と稱して居る）石田千穎が疑つて、師にも尋ねた上、春海方の或人（清水濱臣らしい）に質してやつた。其の返事は「八衢はよい書ではあるが、活用といふことに拘泥すべきではない」といふ漠然たる者であつた。此の應答が動機となつて、義門は指出の磯を著し、例を擧げて、活用研究の大事なことを論じた。丁度其の頃濱臣は京都の學者から招かれ、其の師春海が發見して一世の學者の耳目を峙たせた新撰字鏡を講義する爲、遙々上京して來た。義門も京都に來合せて居たので、濱臣を訪ねて、指出の磯の寫本を示し、大に自說を主張した。しかし當時天下に名高い濱臣は、小濱の片田舍に居てあまり其の名の知られない義門の言に、さまで耳を傾けなかつたらしい。「活用といふこともよいが假名遣の大事に比ぶべき者ではなからう。自分の說は此の書に在る」といつて、自著の泊泊舍筆話を義門

に贈つて別れた。さて義門が此の書を見ると、其の中にも　辨へり（下二段の下にりを附けるのは誤）あおはへて（四段法だからひてが正しい）等の誤用があり、他にも所見を異にする者があるので、磯の洲崎を著して、濱臣に送つた。此の書は消息文體で鄭重極まる語を用ゐて居るが、其の内容は極めて鋭利な者であつて、相當濱臣を驚したらしい。此の事の詳細は第二十六項に讓る。

三　和語說及び和語說略圖

入言小補　天保三　2492　一冊寫　筆者藏
眞宗聖教和語說　五　天保三、四　合一冊　活版
末代無智御文和語說　一　眞宗全書　續第六卷

此等は義門の著書といふよりも、門人が其の講義を筆記した者であるが、義門の眞面目は寧ろ此の方に現れて居るやうである。元來義門の國語學は、聖教に用ゐられた和語を明かにするにあつたので、其の目的ともいふべき三部經　假名聖教中の四部（三經往生文類　銘文　一多證文唯信鈔）和讃　等の和語卽ち訓や古語の講說について、力を注いだのである。此の中有名なのは眞宗聖教和語說であるが、其の第一卷を、初めは無量壽經に「衆の言音を入つて一切を開化す」とあるのを基とし、未〓必無〓小補〓の意を取つて、入言小補と名けたが、後之を改めたのである。此の稿本入言小補には　行かまくをほり　君がめをほり　等のほりを良行變格有りと同じ用きと斷じて居る。此の說は尊重に値すると思はれるが、聖教和語說や活語雜話などによると、後之を捨てたやうである。詳細は第二十七項に讓る。

眞宗聖教和語說の版本が第一卷だけのやうにいつたり、三部經和語說ともいふと解題した者があるのは共に誤である。眞宗全書續第六卷中に採錄されて居り、又三部經だけではなく、第五卷には前記の假名聖教四部が含まれて居る。此の書の中に、「如是我聞をカクノゴトキ我聞キ給ヘキと訓ずるが、如くといひさうなのを如きといふのは、如き事をの略である。（筆者の考では古い者に如きを連體でなく、連用に用ゐた者がある此も其である）又給へは下二段の自己卑下の語であつて、普通の四段活の給ふが、他（主語）を尊敬するものとは違ふ」と說いて居る。此の外に　尊號銘文講說（天保二、眞宗全書　第十七回採錄）　唯信鈔假名文意講說　改邪鈔遠測（共に眞宗全書第二十三採錄）等もある。

和語說略圖　天保四　一折　木版

前述の如く友鏡を補訂した者である。兩者を比較すると次の如き相違がある。

友鏡

第五轉　已然言　けれ　しけれ……くれ
第四轉　連體言　き　しき　……くる
第三轉　殺斷言　し　し　……く

第二轉　連用言　く　しく　……き
第一轉　將然言　　　　　　　　こ
使　令（命令形但し稠外）

受けるてにをはを示さない。

和語說略圖

將然言	連用言	截斷言	連體言	已然言
無	く	し	き	けれ
正	しく	し	しき	しけれ
……	……	……	……	……
來	こ	き	く	くれ
希求言（同上）				

受けるてにをはを示す

語辭林香記　天保十一　一冊　謄寫版（前年藤井高尙歿）

活語指南　天保十二　二冊　木版

前者は京都高倉寮で和語說略圖を講義したのを、其の子の逢惇が筆記した者で、語辭は　テニヲハ、林香記は木香記即ち明書である。後者は上野の新居守村から略圖の說明が欲しいと望まれた時、門人平井重民が略圖講義を筆記した者が、自著の「詞の道しるべ」よりもよいといふので、若干之を補訂して、刊行した者である。初學にも分るやうに說明してあるが、各活用形の命名について「將然形といつても必ずしも將然の意になるのではない。（る　らる　しむ等を附けることもある。）連用といつても必ずしも常に下の用言につゞくとは限らない（中止法になつたり體言になつたりする。）」といふやうなことを注意して居る。然るに現代に至つてもまだ義門の本意を悟らず誤解して居る者があるのは嘆かはしい。

活語雜話　天保十——十三　三冊　木版

此は、小濱の　石田千穎　平井重民　京都の城戸千楯　等と活語について問答した覺書の中から、八十箇條を抽き出した者で『「名をや立ちなむ」「根を絕えて」は自動を他動に用ゐた者である。「名にめでゝをれるばかりぞ」を下れると解しては、假名もちがひ活用もちがふ。「寒はずんばあかず」等上が假定で下が既定な者がある。』等の卓說が散見する。

活語餘論　天保十三——十四　前三冊　活版　筆者校註　後　寫三冊

月人男　呼子鳥　百千鳥　異年號　等活語に關係ない者もあるが、はめなむ　知らず知られず　破り傘等活語に關係のある者が多い。冒頭に　題知らず　といふのは多く戀歌であるといふ說を述べてゐるので、書名も題知らずとしたのを後改めたのである。長い間三卷と認められて居たが、昭和十年になつて、四五六の三卷が發見された。

此は後篇と名けてよいやうである。詳細は第二十八項に讓る。」

四音韻研究

於平輕重義　文政十　二冊寫（翌年春庭歿）

鎌倉時代から五十音圖のオおとヲをとを、誤つて逆に配列して居た。流石の契沖なども氣が附かないで、あたご おたぎ や とをゝたわゝ を阿行和行の通音と誤解して居た。本居宣長は、三類八證を擧げて之を正したけれども、因習の久しい爲、之を疑ふ人も少くなかつたので、義門は此の書を著し、徹底的に之を論じた。卽ち上卷にはオおが阿行　ヲをが和行である證を二十箇條擧げた。

例へば

發語の聲音は、我が國語のみでなく、支那や印度でも阿行に限る。左傳にも越を於越といつて居る。源順集に

おもひをも　戀をもせゞに　祓する　人形撫でゝ　祓するおゝ

といふのがある。此はお音を沓と冠とに置いたのであるが、おゝは發聲であるから、阿行に相違ない。（第十五證）

阿行音は、發聲の時を除いては、同行相重なることがないけれども、和行音は　わゝく　たわゝ　くわね　の如く、重なることがある。然るにをも　とをゝ　をゝる　のやうに重なるから和行である。（第十八證）

の如く說き、下卷には、世人の挿む疑を除く爲に、釋疑二十箇條を擧げて居る。是に於てか何人も之を首肯し、今の如く正しくなるに至つた。

男信（たのしん）　文政十三　三冊　木版

上野國の鄕名ナマシナに男信の字を當てるが、男のンは唇內mの方であるから、マとなり、信のンは舌內nの方であるから、ナとなるのであると說き、更に各種の例證に及して居る。是亦本居宣長地名字音轉用例等の說を補訂大成した者である。此の研究に基いて、「萬葉の所思君（二一八四）の君は舌內であるから、おもほゆらくもと麻行によむのはよくない。おもほゆらくにと奈行に訓むがよい」と論斷して居る。

要するに義門は活用方面に於てばかりでなく、音韻の研究についても、本居父子の說を大成したのである。

以上の外義門の著書には　月草　日本魂　假名遣千代之古道　和讃　語路轍　語路徹生論　終年日並歌　覆瓿錄　（以上燒失）。蹤問之日記　。類聚雅俗言　內外胎敎略　。磯淸水　。袖濡之日記　宿士百首　。和語說略圖講解御傳鈔講說　等があるけれども、筆者は。印の外は見て居ない。。印の者も國語學史には格別の關係が無いから、此處には略する。（昭和一七、一〇）

第二十五　義門小考

一　東條といふ姓其の他の誤

出家には姓の無いのが原則であるのに、義門のことを、東條義門といふのは甚だ疑はしい。俗姓としても妙玄寺は眞宗であるから世襲で、義門は其の七世に當るので、出家前の俗姓を附けて稱へるのはをかしい。又俗姓を稱へるにしても妙玄寺の先考義門略傳には俗三浦氏也と明記してある。曾孫に當られる當主の義山師は勿論東條姓を名乘られるが、此は明治になつてからのことである。義山師の談によると

自分の父（好傳）は明治の初年小學校に通學して居たが、當時は祖先の俗姓三浦を名乘つて居た。然るに何うしたことか、小學校の朋輩たちが當時行はれた、三浦大助百八ッといふ俗謠を盛んに口にして調戯つてしやうがなかつた。子供心にいやでたまらなかつたものと見えて、家に歸つて類に祖父逢傳に之を訴へる。其でそんなにいやならば、祖先は三河の東條から出たものであるから、東條姓に改めようといふことになつたのださうである。其は、明治五年から九年までの間の事と判定される。

此によると、改姓の動機はやゝ薄弱のやうであるが、當時は姓も名も改めることを何とも思はない時代であり、且、新に姓を附けて間もないことなので、三浦といふ姓には格別執着も感じないで、改姓したものと考へられる。

明治版の友鏡に義門の肩書を住所不詳としてあるのも珍である。

其よりも更に珍なのは、某氏の書に「指出の磯」「磯の洲崎」を假名遣研究の書としてあること、及び義門の享年を八十五歳としてあることである。自分も嘗て此の年齢を信じて、病弱の身を以て八十五歳まで長壽を保ち最後まで著述をしたこと、逆算すれば、初めて、國語學上の著述八衢疑問を書いた文化八年は、五十二歳に當る。其の老年に及んでの研究が、江戸時代の國語學者中最も多くの著作を成したこと等に感激した事もあつた。しかし「妙玄寺歴世系譜」及び「先考義門傳」によれば、天明六年丙午七月七日生、俗姓三浦氏であること、天保十四年癸卯八月十五日五十八歳寂といふことが明かである。從つて、文化八年は二十五歳に當るが、其の前二十三歳の頃から於乎輕重義を起稿したらしいのには、別の意味で敬服せざるを得ない。八十五歳といふ誤傳は相當廣まつて居るやうであるが、其の俗を作つたものは國語學書目解題の誤植であるらしい。

義門に教を乞うた新井斯太郎守村といふのは、活語指南の序にも見えて居る通り上野の人であるが、袖ぬれの日記によると、高瀬一宮の人である。然るに平井重民や石田千穎までを上野の人といふ書があるのも甚しい誤である。

此の小濱の市町ながら、奥の山里と名づけたるもことわりに、靜なる家つくりして、そこにこもりては物まなびせし千穎は（活語雜話）

とあるので、千穎が小濱の人であることは明かである。千穎から

八ちまたの　道のことゞ〳〵　踏みわけて　猶も奥ある　道のしるべか

といふ歌をよんでよこしたので、活語指南の初稿を詞の道しるべと名づけたといふのも、上野から詠んでよこしたのではない。（本項六朗書の條參照）

平井重民といへるは、此小濱にて詞のはたらきをり〳〵語りあふ友にて、詞の道しるべをいさをしく書きなさんとせる人なり。（活語雜話）

とあるので、小濱の人であることが明かである。さうして醫を業としたこともくすし重民平井氏云々の語が活語指南の序にあるので明かである。此の兩人は義門の門人と見てよいのであるが、義門は「自分は門人など取立てる資格はない」と謙遜して常に友と稱して居るのである。

二　眞宗聖教和語說

普通には「一名三部經和語說ともいふ」といふやうに解題されて居るが、實は次の如くである。

第一卷　佛說無量壽經　發起序終まで　法順慧教　永願說言　等筆記（天保三年十一月廿三日より法順寺に於て）

第二卷　同右　上卷　終まで　筆受　法雲　說言等（天保四年四月十七日より妙玄寺に於て）

第三卷　同右　下卷　終まで　光德法雲　法順慧教　同記（同四月二十七日より）

第四卷　佛說觀無量壽經　終まで
佛說阿彌陀經　終まで　說言將了筆記（五月九日より）

第五卷
三經往生文類
尊號眞像銘文（天保二年）
一念多念證文
唯信鈔文意　佛子昇道謹記

故に、第四卷までを三部經和語說といふのはよいが、眞宗聖教和語說といふ時は、第五卷をも含むので、兩者全然同一ではない。又「天保三年から翌年にかけて」といふのも本書の內容に卽しない。卽ち第五卷は講說の場所を明記して居ないが、尊號銘文の部に

義門是を辛卯口述の後丁酉大味浦の眞本を拜寫す。他日これによて和語說せんことを欲す。大に得る處あるなり。

とあるから、眞宗聖教和語說收むる所の尊號眞像銘文の和語說は、辛卯の者である。辛卯は天保二年であるから、三部經を講說した前の年である。之を第五卷に收めたのは、三部經を重く見て、先にした爲である。

次に「第一卷は明治十一年に刊行されたが、他は寫本である」といふ解題も誤であつて、大正四年刊行の眞宗全書の中に、義門講纂として收められて居る。此の事は佛教方面の關係者中には知つて居る人もあらうが、他の方面には、廣くは知られて居ないやうである。

三　和語說略圖講解

本書は妙玄寺藏書であるが、內容は次の四卷から成つて居て、二卷づゝ、合せて二冊にしてある。和語說略圖開書四卷としたものがあるのは、此の講解四卷の中に、開書二卷が含まれて居るのを誤つたものであらう。

第一卷　和語說略圖開書　天保十年亥六月六日先師義門老師口授（半紙二十八枚十三行約三十字詰）

和語說略圖の名稱の由來や、あらゆる言を　用言　體言　に分つこと、活用の名稱を定めたこと、續用とすべきか連用とすべきかに迷ひ、猪飼敬所　松本愚山　に意見を求めて連用と定めたこと、截斷言も同樣であること、ありを形狀言と見るべきこと、などを述べて居る。

第二卷　和語說略圖開書　天保十己亥六月八日　家君義門老師口說（半紙十八枚字詰前に同じ）

體言　用言　の說が第一卷よりも詳しい。變格動詞の命令についての紐說、言語四種論と漢文家の四字面との比較、自說の異なる所、等を述べて居る。

第三卷　和語說略圖演說　天保十己亥夏六月十三日　家君義門老師演說（半紙九枚字詰前に同じ）

眼を病んで、書を讀むことが出來ないので、演說する次第、三部經等の延書や點の研究について、何卒御眞本の類を得たく、百方苦心したこと、幸にして其の苦心の報いられたこと等を述べて居る。

第四卷　和語略圖演說　天保十年亥六月仲浣先考義門老師口述　逢傳藏（半紙四十枚字詰前に同じ）

略圖について「經論釋共に和語を以て訓讀したるを辨へ、或は　御和讃　御文　等の御言遣を明むるに付て、入用あるが爲に認めたのが一枚の成れる所以也。」といひ、和讃に此をすなはち名づけてぞ香光莊嚴と申すなる」は御草稿には「……は……なり」とあることなどを說き、「みだりに筆を下し賜はず御意を深めて考へ云つたものと伺はれて」と斷じて居る。又「佛たすけたまへと申さん衆生をば」と「佛たすけたまふと信ずる衆生をば」を通音と說くのが謬說であることや「難思議を歸命せよ」と「難思議に歸命せよ」とを比較し、御草稿には皆にとなつて居たのを、義理を深めて書き分けたので、眞淵の　留別　送別　によつて　に　を　を區別する說も、遠鏡の附註にある橫井千秋の別なしといふ說も、共に之を斥けて藤井高尙の佐喜草の說に基き、調の上の相違であるが、「仰にしたがふ意とたのむ方との二義が、歸命の御釋にあるとしるべきが爲ならむと存ず。」と斷じて居る。

此の四卷共に西廣寺將了の筆記しておいたものを、義門の子法傳（逢傳とも書く）が前二卷は安政四年に、後の二卷は安政二年に寫したのが、妙玄寺に傳つて居る。

四　國語學研究の動機

義門の國語學研究の動機乃至其の目的が、眞宗經典類の正解乃至祖師心境の再現に在つたことは、今更改めてい

ふまでもないが、尤も著しい具體的の例證の一は　まもらんとこそ誓ひしかといふ語の論爭に根ざしたことのやうである。此の事は　入言小補　和語說　略圖開書（後篇）等に屢〻繰返されて居るが、之を要約すると

南無阿彌陀佛を　となふれば
佗化天の　大魔王
釋迦牟尼佛の　御前にて
護らんとこそ　誓ひしか（御和讃十八）

といふのを、華嚴の鳳潭が、諸宗門の祖師を毀謗するに當り、親鸞上人をも謗る道具として、「守らんとこそちかひけれといふべきを、ちかひしかなどといふのは甚しい無知である」といふやうに難じた。此は實に無理な批難であつて、こそをきの已然のしかと結ぶのは、決して誤ではない。「きのふこそ早苗とりしか」などといふ例は現代ならば中等學校の學生でも知つて居る。然るに眞宗の學匠達は、國語に通じた者が無かつた爲、之を反駁することが出來ず、西本願寺の桃溪などは「此は守らんと誓ひたることしかり」といふ意で、都のたつみしかぞ住むの　しかと同じであるなどと辯護した。難ずる者も、辯ずる者も共に笑ふべき至であるが、親鸞上人の和讃を毀られるのは、眞宗に取つて一大事なので、其の爲に、書を著して之を論ずる者さへ數多く

鈔字篇　同補闕　然字義　評然字義　咍糠粃　辨惑篇

といふ六部の書が出るやうになつたといふのは、實に失笑を禁じ得ない。義門は「こそをしかと結ぶのは、古來の歌文の正しい法則であるのに、餅屋は餅屋、酒は酒屋でなくては無いやうに、古今の名僧達の中に、明快に鳳潭の難を破する者のないのは甚だ遺憾である」といふことを幾度となく繰返し、又「こそをけれとも結ぶことなどは、上人は熟知して居たが、其では面白くない點があるので、しかと結んだのである。其は高僧和讃の五に

魏の天子は　たふとみて
神鸞とこそ　號せしか

とあるのは、御草稿には神鸞とこそ申しけれとあるのでもよく分る」といふやうに論じて居る。さうして「自分が言語の研究をするのは次の三箇條を目的とするのである」といつて居る。

一　爲レ妙ニ辨ニ語意ヲ故（第二十四項の三參照）
二　爲レ防ニ止ニ他謗ヲ故
三　爲レ或ニ闕ニ法義ニ故

此の三に當る者を求めると、本項四の難思議に關する說などもさうであるが、末代無智御文和語說に賴むといふ語を說いて居るのは、特に宗義に關する。卽ち眞宗の方で本願を信ずとか彌陀を賴むとかいふが、信ず　賴む　は同じか否かについて論爭があつた。其を義門は　萬葉　古今　大和　更科　和名抄　名義抄　孟子　戰國策　其の他を例證として

信ずは知受で受身的であり、賴むはよりかかる意で積極的である。

といふやうに論斷して居る。五十字十八行詰にして二十餘頁に亙る詳細な論である。此の點當時の國學者達が、多くは歌を詠む爲に語法を研究したのとは、大なる徑庭がある。宿士谷成章が歌を詠むことの外に、歌を解くことを語法研究の目的としたのに比しても、其の眼界を廣めた者であつて、斯道に志あるものゝ體得すべき所であると信ずる。」

五　研究發表の態度

義門の國語學に關する研究發表の態度は、單に國語學に關する研究發表の態度は單に國語學上の著述から判斷すると、謙抑穩健であつて、其の爲人も溫厚一邊の人であるかの如く見える。かのおはす變格說に關する疑の如きも、あれだけの材料を準備しながら、結論は八衢の說を生かして佐行變格として居る。山田博士が之を齒がゆく思つて、四段　下二段　併行說を高唱されるのも一理ある。用が波行であるといふ本居の說に早くから疑を抱きながら、山口栞には和行にも用ゐるといふ程度に說き、全然和行說を取り、自分の文にも和行を用ゐるやうになつたのは、活語雜話三篇後である。

しかし義門も、初から此の樣に穩健溫和ではなく、論鋒鋭利、向ふ所を斃さずんば止まない風があつたのを、足代弘訓などの忠言によつて、態度を改めたのである。其でも其の蘊蓄を傾けて、和語說を試みる場合は、舌端火を吐くといふ狀態であつたやうに想はれる。

彼毀謗の人をしも皆今降伏といふ風情に納得せしむること能はざるは……佛學中の一缺典と云ふべきか

（入言少補）

九州では大方雅語の方に（受くる・死ぬる・など）づかひ、長吉やおさんのものいひにも、俗言の方には自らあまり申さぬかと聞ゆる也。（同右）

（連體言で結ぶのは）向の方へ走りゆきて足のとまらぬものを、後ろから帶をとらまえてしやんと止らす樣なものなり。其の帶をとらまえる男がぞのや何の手爾波也。（然るにぞのや何なしに連體でとまるは、後帶をつかまえられずに止るやうな者、又截斷言の上にぞのや何があるのは、止まつて居る人の後帶をつかまえるやうなものである。）（聞書後篇）

清水濱臣が京へ出て、初め新撰字鏡の講釋する折、當地から石田千穎が挨拶を云つて遣りた時

子規　都になのる　初聲を　こゝに聞ても　うれしかりけり

とよめる歌をおくりしかば、其の返事に

子規　都になのる　初聲は　きかるもうれし　きくもやさしゝ

とよんでをこした。片田舍からよんでやりたのなれども、千穎が歌に疵はない。濱臣のは第四句又跡のしゝといふが惡い。（聞書）五六十年ばかり此の方加茂眞淵の說を信じて此（あさまし）はおぞましいといふことちや、針のあるおそろしげなる草のことをあざみ草といふみはましのつゞまりゆゑ、あれがあさまし草といふことで、……此を

又法談などにいふ人ある、愈みだりなる說でどうしたものか。……それこそあさましきひがごとにあらずや。」

（一多證文和語說）

玉の緒繰分のことかたりて、いとゞしくせめかたりぬ斗（？）例のくせにてさひづり、はてはいきどほろしきまでいひければ、（袖湍の日記）

などの講說行文で、其の一斑が窺はれる。元來文法の講義は人の餘り面白がらない者であるにも拘らず、義門の和語說はかなりの興味を以て迎へられたやうである。其は眞宗僧侶が說敎上手である例に漏れなかつた爲もあらうが、和語說の際は、著書の際とはちがひ、會釋なく他人の說を批評したことも一因となつて前記のやうに機智的の語が口を衝いて出て、極めて明快な熱のある講話となつたやうである。ともかく前記の語句は、興味をひくに足ると同時に當時の學者の口吻としては、可なり激しい部類に屬する。然るに國語學上の著述の上に表れたものは、筆致が極めて穩かである。

あさましについての眞淵に對する批難も、活語雜話のあさまし考の方には見えて居ない。又濱臣の歌の評も開書以外の者には見えない。此は最初から公刊する豫定である爲に、足代弘訓の忠言等により、當時の國學者に對して幾分か遠慮し筆端を愼んだのであらう。元來和語說略圖は其の名に似ず眞宗聖敎には殆んど交涉のない、純國語學上の著述のやうにも見えるが、之については義門自ら次の如くいつて居る。

世上の國學者・歌人・等の承知すべき樣に著した也。爾れども今指當り御互の上では何を申すもつまりは聊でも宗敎の學問の助成になる樣に志がもと也。（演說後篇）

要するに義門の全人格的面目は、純國語學上の著述よりは、和語說の類に、よく現れて居る。

六　あさまし考の成立考

あさましの語義は、本居宣長の

此言は善惡共に俗言に　ケシカラヌ　肝ノツブレタル　などいふ意也。（玉の小櫛）

といふ解が、定說となつて居るが、義門の頃までは、橋守部の鐘のひゞきをはじめとして、異說が行はれて居たので、義門は徹底的研究を試みて、トホウモナイ　ケシカラヌ　ビツクリスルヤウナ　などの意であることを明かにした。其の詳しい說が見えた最初のものは、一念多念證文の和語說である。而して最後に西廣寺將了の需によつて之を補ひ、委しく活語雜話三篇に載せたのである。

一念多念證文に關することは、活語雜話には言及して居ないが、右の三者を比較して見ると、一念多念證文の時に說いた約十一項は、唯心鈔文意の時には殆んど全部之を略して、活語雜話の方には其の中六項程を收めて居る。

即ち

一念多念證文和語說中の要項（假に分解したもの以下同じ）

(1)　淺猿と書くのは村鳥や鴨（感嘆）と書くのと同様宛字である。

(2)　記事珠（示珠指？）一帳目は俗説に從つて居る。

3　眞淵はおぞましの意と解き、あざみも同語と説くが其は誤である。

(4)　竹取物語「あさましがりてよりてかゝへ奉れり。」

5　枕草紙「あさましきもの」

(6)　源氏「あさましくめづらかなり」

7　拾遺「あさましきまで問はぬ君かな」

8　長明道中記「あさましの易さや」

9　發心集「あさましとまもり奉る」「あさましといひあふ。」

(10)　順德院御記「淺猿敷ことなり、更に同日の論にあらず。」

(11)　順集「かげあさましく」

右の中（　）を附けた者は活語雜話には省いてある。又3については活語雜話には、おぞましやあざみと同語といふのを、眞淵の説とは記して居ない。最後の割注に、守部の鐘の響の説といつて居る。一念多念證文の時は、眞淵の説でないのを眞淵の説と記憶しちがへたのであらうか。それとも活語雜話では、眞淵に對する遠慮であらうか。雜話では其の代り

通音あるは延約といふことを、考へていひはやすなかの一説にあなるを、是も用ゐられぬひがごとになんといつ居るのでは、間接に眞淵の學風を攻擊したものである。

唯心鈔文意和語説中の要項

(1)　和燈錄より數ケ條

(2)　順德院御記

(3)　いみじとの別

(4)　あさは淺、あは發語、さは驚の意、しは　うとまし　いさまし　などと同様のもの、

(5)　あさとましとに分けるのは、みやこをみとやこに分けるのと同様の誤、

6　暮歸繪詞「不思議にぞあさみける」

7　水鏡「あさむこと限なし」

8　宇津保「皆いひあさみて」

(9)　著聞集「驚きあさむこと限なし」

(10)　撰集抄「あさみのゝしること」

11　宇治拾遺「あさみほめ」

12　徒然草「あざけりあさみ」

13　藤井高尚の「かたちこそ　にくげにはあれ　草の名の　あさみはつべき　花の色かは」の誤

(14)　桐壺「あさましきまでめを驚したまふ」の湖月抄の註の誤

15　玉の小櫛の説

(16)　桐壺「あさましう思召さる。」「あさましううつくしげさそひたまへり。」

(17)　帚木「かくおぞましくは」

(18)　竹取　よはひ、あへなし、かひなし、などは戯解

(19)　示珠指　智慮淺短の解

活語雜話には、右の中（　）を附けたもの十項は之を省いて、八項だけ收めて居る。其の中13の藤井高尚の歌については、和語説の方では

さばかりの人には似合はず……誤といひつべし。

といつただけであるが、活語雜話の方では

將了更に問を起して「……近頃名偉れりし松齋翁の歌ならずや」とありけるに、「さればよ、その歌のことは我直ちに……その翁にいひしかば、まことにうべなはれし事也」といらへし事也。

といつて居る。雜話の方は師事した高尚を援護する爲の遠慮があるやうに認められる。さて雜話は、一多證文の六項と唯信文意の八項とを基として、更に、

1　通音延約のひがごと

2　伊勢物語「あさましくたいめせで」

3　若紫「あさましき御すくせの程心うし。」「命婦はあさましと思ふ。」

4　閑居友「あなあさましいましけるは」

5　沙石集「あさましがりけり」

6　若菜「よろづの事につけてめであさみ」

7　濱松中納言「おどろきあさむ」

8　狹衣「あさみさわぐ」

9　用言は虚字に　形狀言は半虚字に當る。

10　あるは心二かたにかよひ、三つ四つ五つなどあるなるべし。

此の十項を加へ、計約二十四項について、明快な論斷を下し、長く定説となつたものである。勿論前二書の所説を其のまゝ擧げて、後の十項を加へたのではなく、全體を融合統一して組立てたものである。

七　活語雜話四編及び活語餘論四卷目

兩書共に現存の者は、三冊づゝであるが、小濱の某氏所藏の妙玄寺藏書目錄とも見るべき者には、

活語雜話四編　伊藤鳳山序あり
活語餘論　四卷目
磯清水　橋立日記
月草
日本魂
友鏡底之影
假字遣千世の古道
跡問廼日記　文政六年末冬　江戸紀行
終年日竝之歌
古文後集之歌

妙玄寺

と記した一紙片がある。其の字體を考へると、どうも義門の子法傳の認めた者らしい。さうして此の紙片の所傳は義門の門下であつて且後援者であつた古河家から、出た者といはれる。此を以て見ると、兩書共に第四卷目が脫稿（少くとも起稿）されて居たに相違ない。就中雜話四編の方は伊藤鳳山の序があつたのであるから、脫稿したと思はれる。伊藤鳳山は京都に住んで居たが、義門の袖濡之日記三月四日の條に之を訪ねたことが見えて居る。此の日記は天保十四年二月京都より　讃岐　備中　播磨　等を旅行して七月に歸つた紀行文である。（其の年八月十五日寂）序文を書いたのは此の時でもあらうか。又和語說第二卷の頭註には、用の活用について

活雜四編にゐと定む

と記してあり、活語餘論にも

右に先云べしといひつるを、おほにはな心得そ。其心ありてなること、活雜四編に考へてよ。（活語餘論）

活語雜話四編に　人しれぬわがかよひぢ　人に知れつゝ　人知れずこそ思ひそめしか　などいふ詞づかひの事をいへるところ合せ考へてよ。（同右）

などといつて居るので見ると、決して、「なほ第四編も續いて著す心算らしかつたがその功を見なかつた」などと斷言すべき者ではなく、二度の火災に惜しくも燒失したものであらう。餘論四卷目の方は若干疑もある。袖濡の日記を見ると

きのふの如し、直養の金石志みて活語餘論年號の條補ふ。（二月三十日）

此瀧宮の事は事長きさためあり。別に活語餘に一條加へてこゝには略きつ。（三月二十一日）

古瓦に白鳳の文字の見えたる二あるにつきていはまほしき事ども多ありて、活語餘論一卷に補入をはりぬ。

（六月十六日）

此等は何れも現存の活語餘論に記述されて居る。此で見ると、義門は旅行中病にかゝり歸つて間もなく寂したのであるから、旅中活語餘論の稿本を携へて行き、絶えず記入したに相違ない。六ケ月に亘る旅行の先々に於て、略圖を說き、古今集を說き、其他の講說に寧日なかつたのである。其の暇を偷んで、著述の筆を取つたといふのは學問に忠實なこと驚くべき者であつて、病弱の身にかゝはらず、夜讀書に際して睡眠を儲す折は胡椒を目に附けて、眠氣を覺したといふ逸話と共に、敬服に堪へない。さて、貫之の眞蹟と稱する色紙に「かずならぬ我身一つの憂きからになへてのよをもうらみつるかな」とあるのに、箱がきを乞はれた際

扨初五文字のこと（拾遺には大方のとある）活語餘論にを。（六月十一日）

とあるが、之に當る說は、現存の活語餘論には見えない。此などが四卷目に述べられたのであらう。

（昭和一〇、二……第二十八項參照）

第二十六　義門の　春海　濱臣　に對する論戰

一　假名遣派と活用派

同じ縣居の門でありながら、鈴屋本居宣長翁と織錦舍村田春海大人とは、其の環境に於て、性格趣味に於て、縣居翁に對する師弟關係に於て、將學說に於て、大に異なる點があり、從つて其の相互の　見る眼　感情　も必ずしも肝膽相照す底の者でなかつたと考へられる。宣長の國語學は　春庭　太平　藤井高尙　に傳はり、此の三人より更に直接又は間接に義門に傳はり、こゝに大成を見た者といふことが出來る。一方春海の門下には一時大名を擅にした清水濱臣といふ後繼者があつた。春海も、其の流を汲んだ濱臣も、契沖以來詠歌は勿論釋歌にも、極めて假名遣を尊重し來つた學風を承け繼いで居る。其で兩人共に宣長が縣居門下の第一人者であることは認めない譯にいかなかつたが、（註一）本居派の國語學、就中其の活用尊重に對しては、常に冷かな眼を向け、八衢の如き名著をも輕んじて居た。從つて其の自ら物した歌文等にも破格の者が散見するを免れない。しかのみならず活用說に對する冷評の如きも、折々は筆に口に漏れ出でたのは自然の勢である。（註二）玆に奮然として織錦舍の師弟に對して戰を挑んだのが、鈴屋の流を汲む義門である。義門は今日に於てこそ鈴屋派語學大成の譽を博するに至つたが、（當時も

既に　男信　詞の道しるべの初稿成り、八衢疑問を本居家に送つて所見を述べ、類聚雅俗言が成つては居たものの）年齢纔かに三十五歳、邊僻の地小濱に在つて、其の學識は未だ廣く世に認められて居ない。然るに其の當の對手たる清水濱臣は大江戸に比類少き斯道の大家、遙かに京都まで招かれて、其の師春海が發見して斯界を驚かした新撰字鏡を講ずるといふ程、名聲を博して居る。此の濱臣に對する義門の取組は當時の學界からは、江戸大相撲の大關に對して、田舍の草相撲が飛入取組を申込んだやうに見えたであらう。

註一　吾師（春海）の常にいはれしは……契冲阿闍梨　縣居翁　まのあたり本居氏などの如き、……絕えておよばぬことは、三人のひとたちは、精神すくやかにして若きより老の身に至るまで、學の道にうむ事を知らず、極めてつとめし人たちなり。……（泊洒筆話）

高津阿闍梨は仁齋先生になぞらふべし。縣居翁は徂徠先生によく似かよひたる所あり。本居氏は春臺先生のおもむきあらん。芳宣園は南郭先生にもたとへんか。この中にもほかはおきて、本居氏はもとよりさらになぞらふべき人なきすぐれ人なり。……（同右）

註二　すべてかくさまの事は詞の八衢といへる書にむねと論ぜるなるを、かの書よき書にはあれど、あまりにこまやかなるにすぎて、かへりていにしへにかなはぬ事あ也、なづみたまふな。……（指出の磯冒頭、濱臣（カ）の言）

詞の活といふ事をかなづかひの大事なるにひとしめ云べくは猶思はれず。……（指出の磯跋、濱臣の言）

假字は一もじといへどもたがへばやがて其詞の義を誤るものなれば、いかにも〳〵深くその心を用ゐひろく古書どもを考てものすべきことなれども、言葉の活といふことは、さばかり義にあづかるものにもあらず。……（磯の洲崎冒頭、濱臣の言）

二　指出の磯

某氏の國語學史に義門の著書「指出の磯」を「假名遣の研究である」と解題して居るのは、評の下しやうもない誤である。又別人の著に

義門の友人なる石田千穎が、琴後集にきならしゝ露分衣ときならせしと兩樣に記したるものあるを、何れが正しきやと或人に問合せたるに、其の人の「これは八衢に說明しあるものなれども、過り居る點あり云々」と答へたりといへることを義門が聞きて、此につきて意見をのべたる序に、言葉の活きを正しくすべきこと及びかな遣の事などを述べたるものなり。

といふのも聊か服しがたい點がある。（イ）石田千穎は義門の友人といふよりは寧ろ門人といふべきである。義門は「自分は門人など敎ふべき者ではない」といつて、就いて學んだ人をも友人と記しては居るが、種々の著書に記してある內容から判じて、門人と見るべきであらう。しかし此は義門自らが友人と稱して居るから、强ひて言ふべき程のことではないかも知れない。（ロ）「これは八衢に云々」といふのは、指出の磯の文を誤讀したものである。

（前項註二）

せし　しし　など語の活用のことは、八衢に說いてはあるが、八衢の說は詳細に過ぎて、却つて古にかなはない所もあるから、其に拘泥すべきではない。

といふので、決して　せし　しし　に關する八衢の說が誤だといふ回答があつたといふのではない。(八)さて此の回答をしたかのゆかりの人といふのは、何人であるか、明言して居ないが、此の冒頭の文と同書の跋文とを照合して考へれば、せし　しし　の事を問にやつたのも、濱臣の許と推される。(註一)(二)さて之を問にやつたのは何時の事か、春海の生前か歿後か、判然しない。春海は文化八年六十六歳を以て歿し、指出の磯の成つたのは其の後四年を經た文化十二年であるが、此の回答は春海生前の事かとも想像される。若し然らば右の回答も春海濱臣師弟相談の上であらう。(ホ)更に想像すれば、之を問にやる前に、千穎と義門との間に談合があつたに相違ない。其は此の兩人が師弟であつたか、友人であつたかは別問題として、斯の道に關しては極めて親しく、事大小となく談じ合つたことは種々の點から極めて明かであるからである。(註二)

此の　せし　しし　問答は、言はゞ兩派の前哨戰である。村田派が著ならせしの誤用に關して、直接具體的の論戰を避けて、抽象的に「活用に關する八衢の說に拘泥すべきではない」といふ原理だけを述べて、敵鋒を輕くかはさうとしたのは、其の戰術が如何にも巧妙であつて、狡猾ともいへる。

是に於てか義門は其の若い血を燃して筆を執り、指出の磯を著して、敵の牙城に迫らうとした。其の陣容を見ると本書は十五項に分れて居る。其の中

一　二　五　六　の四項は、琴後集等の誤用乃至誤解を說いて居る。

三　四　七　八　の四項は　毒ごみに　來(こ)向きて　かにて　けせる　日數にそへて　等の用例が萬葉集に存するのに、八衢には說いて居ない。下知によを附けると附けないとの區別も、八衢の說は不十分である。たうべ　たうび　の用例なども、八衢の說と違ふ者がある。故に八衢に拘泥するのはよくないが、しかし詞の活は決して等閑に附すべきではなく、しし　せし　何れでもよいなどといふことは出來ない。

九――一四　の六項は眞名によつて假名遣を定めるのは、最も確かなやうであるが、一概にはいへない。置　尾　可笑　太和己止　宇留和志　沫　馬　梅　匂　仰　狹結　等の眞名には、疑ふべき點がある。言掛によつて定めるのも危險、傍例から類推するのも危險(をこ　おろか　おきな　をぢ等)詞の義に隨ふのも例外がある。此等からいへば假名に定格なしともいへるやうであるが、其は誤であつて、矢張假名遣は大體春海の假字大意抄の說の如く考へるのが正しい。詞の活用も同樣で、例外もあるが根本は嚴として動かすべからざる者である。

一五　てにをはの用法も　佐久安禮矢　つくし波やりて　あふにやかふ　等の例から見ると定格が無いやうであるが、根本原則は定まつて居る。詞の活用も同樣である。

斯の如き構成となつて居る。本書にかなづかひやてにをはの事を說いて居るのは、いはば傍證　餘論　に過ぎない。寧ろ假字大意抄といふ敵派の總帥春海の武器たる假名遣を取り、直ちに之を敵に擬して、戰つたのである。

註一　石田千穎云、近ごろ出たる織錦齋の琴後集の中にきならしし露分衣云々ともあるを、又同詞なるにきならせし云々とい

へる處もあるは、もとはいづれもきならししとありけんを、うつし誤れるなどにやと覺えて、かのゆかりの人にうらなく文かよはすかたの侍るまゝに……いひ贈りしに……（指出の磯冒頭）

……文政三年なりき、京に參りをりける夏、かの千穎が文かよはしゝ清水濱臣といふ人の江戸より登りて、錦小路室町の西にやどりて、新撰字鏡をかうさくせるよし聞しかば……（指出の磯跋文）

註二　第二十五項六の中程參照

三　兩雄の會見

指出の磯は成つたが、之を刊行する機會を得なかつたので、（註一）此の論難は春海門下の人々には知られなかつたであらう。六年を經て文政三年の夏（義門三十五歳）京都に居た時、濱臣は偶然にも新撰字鏡講義の爲に、招かれて、京都に來た。義門は喜び勇んで之を訪問したが、手許に自著の指出の磯が無かつたので、紙魚室（しみのや）（書肆姪子屋の主人で宣長及び久老に從ひ學んだ城戸千楯）方にある寫本を借り、之を携へて行つて濱臣に一覽を乞うた。此は義門が織錦舍門下の第一人者濱臣に對しての突擊白兵戰第一合とも目すべきである。第二十五項六に擧げた千穎濱臣の贈答（濱臣の返歌下句十四字中に　きかるも　やさしし　と二つまで誤があると指摘した者）と、義門の濱臣訪問とは何れが先か判然しないが、彼の歌が時鳥に寄せて居るのから推すと、贈答は初夏のことで面談の前であらうから、義門は或は既に之を知つて居て、濱臣何物ぞ眼に物見せようといふ意氣込であつたとも想像される。（註二）

此の會見は、兩雄共に辯論に長じて居たから、さぞ痛快な應酬もあつたらうと想像されるが、詳しい樣子の分らないのは遺憾あでる。唯

たちどころに親う成ぬる事ふるくよりも相識れるが如なりければ……（指出の磯跋文）

とあるが、一方又

文政六年に、われ彼江戸に出し時、そのささなみの屋をばしば〳〵立ちもならしつゝ、いと〳〵親しうかたみに何くれと物がたりあひし時に至りて、ひとゝせの事よと有て、かの詞八衢といふ書は、げにみずはあるべからざる書なりといはるゝなどいと睦じかりき。然にさとは知らざらん人の、若し爭ひ別れし事の樣に思ひがむるもあらんかと、それほいなさにかくまでもことわりはおくぞかし。（磯の洲崎十二丁）

と斷つて居る。即ち世人からは喧嘩分れになつたやうに思はれて居たらしい。此の點から想像すれば、相當の論戰であつたらう。既に大名を博した濱臣は、會見前は勿論義門を意に介しなかつたらう。指出の磯を一瞥した後も、其の所論の　構成　進行　が極めて晦澁なので、「此の田舍學匠が、我が師の假名遣說同等に八衢の活用說を重んずるのは、井蛙の管見に過ぎない。我が此の泊泊筆話を見せたなら、忽ち感服するだらう」位に考へたかと思はれる。即ち

此論も謂れたり。されど詞の活といふ事をかなづかひの大事なるにひとしめいふべくは猶思はれず。いかで今一

きざみ、さる謂れくはしう承らばやといひ、又これ見よとて其自らのさゝ波筆話と云物をもみせられければ……

（指出の磯跋文）

といふやうな狀態であつた。此等の語は甚だ慇懃であるが、其は當時の人の禮儀正しいのによる者で、內容は必ずしも穩かではあるまい。さて義門も此の位の事で納得する筈はなく、鋒を更めて磯の洲崎を草し、第二合の突擊戰を試みた。

註一　指出の磯脫稿は文化十二年四月四日、頭註を加へ跋文を附けたのは、二十六年を經た天保十二年の夏、磯の洲崎初稿の成つたのは文政三年五月二十一日京の旅館に於てゞあるから、會見後數日の事らしいが、之を訂正したのは、天保十二年九月で、兩書を合して刊行したのは、天保十四年八月である。義門は此の八月十五日に歿して居るので、此の書の成本を見たかどうか疑はしい。

註二　贈答の歌を見た上で、上京したのならば、指出の磯を持參して、訪問の用に供する筈であるのに、其の用意がなかつた所から見ると、濱臣上京の事を知らずに上京したに相違ない。又濱臣を訪問した後に濱臣が痾歌したのならば、濱臣も相當警戒する筈であるから、一首の中にあんな幼稚な誤を二つまでもするといふ不用意はあるまいかと思はれる。それで義門は上京中に濱臣上京の事を千楯か或は他の人から聞き、一方千鶴からの手紙によつて贈答の事をも知り、然る後訪問したかと想像される。

四　磯の洲崎

前記の國語學史に「磯の洲崎」を解題して、

指出の磯を示したるに……濱臣は……泊洎筆話を書きて、其の理由を聞きたしといへるに對し、義門の答へたるものにて、……

と說いて居るのも、半以上誤である。此では泊洎筆話は指出の磯に對し、義門に示す爲に書いたやうに見えるが、決してさうではない。指出の磯と泊洎筆話との內容には何等相關する所がない。思ふに濱臣が筆話を義門に送つたのは、自己の識見を示すのと指出の磯一覽の答禮との意に基いた者であらう。福井久藏博士の日本文法史に

文化十二年指出の磯を草し、假名遣と共に活語研究の必要を說き、……清水濱臣が……活用を假名遣の大事と同一視するは輕重を誤るものと云つた。義門はそこで磯の洲崎一卷を作り之を辨じた。

と解題して居るのは、前揭の者の杜撰とは違つて、さすがはと默頭かれる。强ひていへば、當時活用語輕視の風の記述と指出の磯の解題との中間に、八衢疑問の解說があり、又假名遣大意抄の關係に言及して居ないので、文面を卒讀すると、要點を逸したかの如くに見えるけれども、熟讀すれば要點に觸れて居るのは、多とするに足る。

指出の磯の攻擊目標は村田春海の琴後集に在つたといへるが、磯の洲崎の其は、春海の高弟清水濱臣の泊洎筆話

に在つた。

但し濱臣と面會の後ではあり、所見を先輩に言送り其の教を乞うた形になつて居るので、指出の磯とは全く其の構成を異にし、冒頭と末尾とは、先輩大家に對する消息文體で、用語は慇懃を極め、恭敬を盡して居るが（註一）其の內容は決して軟弱な者ではない。本文の構成は

一、きはけりの約ではない。春海の大意抄に居（ゐ）は居（をり）の反といふのも誤である。

二、玉ふと玉ふるとが違ふやうに、たのむとたのむるとも違ふ。然るに蘆庵は之を誤解して居る。

此等は直接の濱臣攻擊ではないが、次の如き泊洎筆話の用語を論難した者である。

三、「縣居翁……人はじめて古言の學といふことをわきまへり」はりが四段活と佐變とのえ列にのみつく法則に反する。

四、「あぢはへてといひおき給へること一卷の中に折々見ゆ」これは八衢の說も疑はしく、あぢはひてといふが正しい。若しあぢはへてといふ用例あらば示し給へ。

五、そこ〳〵にして　をかしきをこらへて　きはめて秀文にして　さはい〳〵　かへがへにして　いふならむなれど　それさへいかにぞや　さまでの秀逸　等の語づかひは、疑はしい。

六、つばくら　たか　の延約に關する逸話は、濱臣說の如く笑ふべきであるが、波と水皮との關係を、之と同一視するはよろしくない。

七、倭文子の死を悼む歌に關し、生前の情事を祕する爲、宇滿伎が其の歌をよみ人知らずとして置いたのを、筆話に暴露したのはよろしくない。

等の事を論じて、之を濱臣に送つた。濱臣も恐らくは義門の語學上の意見については、其の鋒の銳さに驚いたらう。筆話に關する問題に對してだけ、義門に答へ、「他は何れ改めて答へる」といふやうに巧に廻避して、休戰の形になつた。（註二）

後三年を經て、文政六年に、義門が妙玄寺の開祖妙玄尼公の事蹟調査の爲、江戸に出るに及んで、泊洎舍を訪ねた。此度は濱臣も義門の眞價を解して、相當之を尊敬して歡談した。（本項三所引磯の洲崎十二丁の文參照）

天保十二年になつて、此の二書を刊行しようとする時には、磯の洲崎初稿中

（イ）濱臣の答に滿足した者

（ロ）詞の活用に直接關係のない者

等は、之を省いてしまつたので、現行板本の磯の洲崎には、前揭の　五　六　七　に當る者は載つて居ないが、幸にも先年帝國文學第二卷第十號の誌上に、關根正直博士が之を發表されたので、明かになつた。惜むらくは、其の所傳について、博士は一言の說明もされて居ない。

斯の如くにして、織錦舍門の假名遣偏重說は、鈴屋門の活用尊重說に讓步して、此の戰は終を告げたのである。

註一　かしこき御論めをかへりて疑はしうはた思ひ聞えずしもえ侍らずなん……おもなのしれものよとはおぼしうとまで、あ

はれさるまどひをとき給ひてよ……（磯の洲崎二丁）

古書どもの中にあぢは（てなどいひたるあかし、またさいふべき語なる理などかねて明めたまへるやう侍らば、教へ給へ…。

……なほ此外にも、おのが心にはいかにぞや思ひ給ふるみことばづかひ數多なれど、恐くはわが思ひ至らぬならんかし。

今聞えさせつる二つは、かねて心に深くいぶかしみ居りし詞にて、いとせちにうけ給はらまほしきによりて、かくまで聞えさするになん。……（磯の洲崎十丁）

註二　さしも詞の活の事ともなくて……皆省きつ。……清水氏よりの答の趣よろしくぞありける。……（磯の洲崎十一丁オ）

清水氏におくりてしを其節に、これはまづとて明けき答のありし條もあり。（筆話につきての事）又これはよく考へてをいらへてんとありし事ども有き。……（磯の洲十二十丁）

第二十七　稿本「入言小補」について

一　本書と眞宗聖教和語説の二本

第二十四項の三に述べた樣に眞宗聖教和語説の第一卷は、初め入言小補と名けたのを、浪花の顯明寮司甚不可也といふ評により、眞宗聖教和語説と改めたことや、其の稿本を、小濱の某氏が所藏して居ることは、其の和語説の場所を自坊と見るのは誤であつて、「天保三年壬辰十一月二十三日開會脇袋法順寺」と記してあること、法順慧教といふのは、妙玄義門永願説言などと同樣、法順寺慧教の意である事等は、昭和十年一月號國學院雜誌「義門小考」中に一言した。然るに今回其の所藏主吉岡昌太郎氏（今は大阪住）から之を讓り受けることを得たので、之を齋藤愚氏所藏の眞宗聖教和語説（寫本で元東京帝大圖書館本系統の者）及び眞宗全書中の同書の第一卷と比較して見た。別に明治十一年逢傳校刊の第一卷だけの活字本もあるが、手許に無い上に、全書本は此の活字本をも校合してあるので、特に比較を試みない。

齋藤本と全書本とは大體同樣であるから、特説の必要の無い場合は、之を合して定本と稱することにするが、劈頭の序文には次のやうな相違がある。

一　本書と眞宗聖教和語説の二本

齋藤本

1　書名の由來

2　下記の者が、序の中にはなく、本文の第十六丁より第十八丁までに、收めてある。序としては無い方が體を得て居る。

3　「覺師眞和中御のべ書の本云々」以下四十一行、覺如上人延書原本のことを附說してある。

4　下記に當る者は第一卷には無い。他の卷にあつたやう記憶するが今見當らない。

5　最後に頁をかへて、「丹波より出で候三經御のべがきの原本云々」四行の文がある。

全書本

其の標題に「和語說のはしにかきつけて義門いふ」とある。

1の次に「給ふ給ふる云々」以下二十八行、及び右云々以下十行ある。此は入言小補書入の分の錯簡であらう。

同文であるが前項との接續、體を得て居ない。後項との接續も同樣

著聞集の繪師の文のコモチマキカケ云々等、誤讀の笑ふべき例數項を擧げて居る。

上記に當る者がない。

6　3の終の方「ワガヨム三經御ノベ大小二經ハ覺師ナリ視ハ覺如樣御遠化後ノ年時オク書アリ」とある。

……說ハ覺如樣御遷化後ノ……」とあつて、遷は遠より善いが、說は甚しい誤である。

說の字の頭註に「私云說字上恐クハ一ノ字を脫スルカ」と一說と見て居るのは、笑ふべきである。視は觀の略字であつて全書本二頁の初にも勢觀房などと校訂して居る位である。特に大小二經といふのに對して居るのであるから、觀經卽ち觀無量壽經を指したこと明かであるのに、眞宗全書としては、特に甚しい誤である。入言小補には右に當る序文は全然ない。

さて此の入言小補一卷は、三十四枚の半紙（表紙も半紙）に、十五行約三十字に細書し、行間及び上欄に可なり多くの書入があつて、字體は拙ではないが、粗を極めて居る。口演を筆記した者としては蓋し止むを得ないであらうか。標題は入言小補と表紙に記してある。一といふのは、最初の考では、二卷三卷等も入言小補と稱する積であつたからのことであらう。次のやうな略字が盛んに用ゐられて居るのも、筆記の便を求めた爲であらう。

會（論）ニカ、ラヌ旁（謗）リ、

衆（衆生）　羊尺（解釋）　婐（如來）

迟（釋迦）　平（評）　華ム（華嚴）　迂（聖道）

識語に

右大堅序文ノ御點和語ノ處ノ說也

天保　霜月御正忌中ヨリ次閏月五日マテ弁ヒ之妙玄寺義門尊衲　惠教　記言　筆記

とあり、最後に若州法順寺と記されて居る。表紙扉に二行、及び上欄數箇所の書入中に、義門の筆蹟と覺しき者があつて、青江（前記小濱の古老吉岡氏の號）は「義門法師の眞蹟に毫も疑なし。」と極め書して居る。

二　筆名　敬稱　推敲

該寫本全體の筆蹟は、稍義門に似た點もあるので、最初は義門が和語說を試みる時、自ら記して置いた口演の草稿かとも考へたが、よく見ると義門の筆蹟よりは、字體の曲折稍少く、且線が稍太い。上欄の書入中、本文と同筆らしい者に

教加フ唐ニ左右ヲ右キ左リト和國ニ稱ス　（二八ウ）

とある。此の教は本書の筆受者法順寺惠教（定本には慧教）のことであつて、惠教が書き加へた註であらう。從つて本文も同人の筆記かと思はれる。識語の最後に若州法順寺とあるのは、本書が元來法順寺所傳の者であつたからであらう。

誤字　假名の誤　が可なり多い。缺典とあるべきを欠傳と誤り、餅字を瓶と書いたのや、ぼはたことをモハナフ

と書いたのなどは別問題としても、二五丁裏に得辨出智とあるのは得攀出池の誤であるのを、書入に得攀出地と正して居るのなども義門の筆でないことを證するに足る。特に音便の假名は殆んど全部　ヒ　フ　を用ゐて居る。例へば　無ヒ　度ヒ　或は「夥ヒフ順メ知ルベシ」などと書き、又　ユヘ（故）　覺ヘ　下示（下知）などと書いてある。識語に妙玄寺祖衲云々の語あるのも本文と同筆と認められる。

敬稱　此の稿本では、存覺と記してあるのを、定本では多くは次の如く存覺上人と改めてある。（丁數及び表裏は稿本のを示す。西洋數字及び上下は全書本の頁數及び上欄下欄を示す）

（借エテ見付テ）

二二ウ　サテ存覺ノ御點本ヲ見付テ

（53下、サテ今日ヨリハ存覺上人ノ御點本ヲ取リヨセタルニツキ）

（存覺ノオカゲデ）

二三ウ　存覺デ祖意ヲ明カニスルト云モノ也

（36下、存覺上人ノ御蔭デ祖意ヲ）

此の例の中央の大字が入言小補の本文、右側（　）内が同書の書入、左側（　）内が齋藤本及び全書本の文である。義門は口演で存覺上人といつたらうが、筆受者が省いて、存覺と記したのを、後に公にするに當つて、上人の二字を補ひ、敬意を失しないことを力めた者と想像される。

推敲　稿本に彼是ナリとあるのを、書入にはロンナクと正し、定本には論なくとしてあるのや、稿本（二三裏）に俗諺ノ見ルトとあるのが、定本には、俗言ディヘバとなつて居るのや、又

（和リト穩ニキコヘ）

二〇オ　思ウ玉ヘ侍ルトシタカタガ語物文ナトテハ却テヤハリト聞ルヿカアリ。

（31下、却テ和リト穩ニキコエテヨキコト）

の如くなつて居るのなどは、其の内容の上からいへば、格別の問題ではないが、いまだの語釋の如きは二十八丁表にあるべきものが、稿本には全然之を缺いて居る。但し定本に

いまだ何々ならずは未にあたり、いまだ雪はふりつゝなどの如く、下にずといはぬは漢文には猶字などにやあたらん。（142下）

とある説はよいが、其の語源を「まだにいのそはれるなるべく」といふのは從ひがたい。今といふ體言にだにといふ助辭の付いた者に相違ない。又二九丁裏いましに　汝　今し　の二義あることを説いた條に、定本は正濫抄及び和訓栞の説を引いてあるが、稿本は引いて居ない。此等は最初之を説かなかつたのを、後になつて増補した者であらう。

三　定本よりも明快な處

音便のことを説いた條の本文は稿本も定本も、

物語文ヲ見ニ、音便ノ崩ト言フ方テ、文章ニハ書トリシ例、上ミニ申ス思ウ玉ヘ侍ルノ類夥ヿ也。歌ニハナヒヿ也。◎文ニハ結句音便言ノ方多ヒカラミレハスクヒテト云ヲハ、スクウテトスルヿ怪ムヘカラズ也。（123上）

と補つてある。又

一八オ　殊ニナニナンズ（云ヒナンズ　トリナンズト云様ナ）（云ヒナンズ　トリナンズ　死ナンズ　ト云ヤウナ）ズズルト云ヘ移ルトキハ、ムヲント云方ガ、却テ宜敷ト云ヿ源氏ナドニナキカト思ヘドモ（云ヘシコノナンストイフヿ）（コノナンスト云ヿ竹取物語）落窪物語ナドヨリ已以ノ書デハ共例アマタアリト覺ル也（127下）

右の（　）内は傍線の部に對する稿本の者、《　》内は之に當る齋藤本の者を示したのであるが、全書本も大同小異である。此も一旦「源氏になきかと思へども」と講じ、其のまゝ筆受されたが、後に義門が筆受稿本を檢し、之を改め又は改めさせたので、例の慎重な態度の現れであらう。

自分の原稿に滿足しないで、後から増補書入をするに當つて、原文との聯絡に面白からぬことが生じて來ることは、何人も經驗して居る所と信ずるが、本書にも其の例があり〳〵と存する箇處がある。ての上の音便の事を説く

條（一七表）に

上に辨ジタキハ　キ　シ　チ　ニ　ヒ　ミ　イ　リ　ヰ　ノ　九ツ　エ　ケ　セ　テ　ネ　ヘ　メ　エ　レ　エ

ノ十、此ノ十九音カラ續ト申シタガ、夫ヘ右ノ淺クテト　深クテ　嬉クテ　悲クテ　ナドト申スコノアルヲ合セテト云助辭（或語辭トモカクベシ）ヘツヾク聲ヘハ惣體廿音ニキハマレリトシツカリト覺ヘテ置ガ可也。（但シさてト云ハもてノ類ヒデ實ハさありてノ略約カトモ思ハル。爾ル時ハてノ助辭ヘカヽル音ハ廿音ナリト云ヘシ。カク解セサレバ　サテ　モテナトノてカサツル　モツル　ナドトシテハ難見譯モワカラヌ也。）（一八オ）（126上）

右の（　）内は行間或は下欄の書入であるが、廿音云々といふことが、元の文と重複した感じがある。しかも、右の○○に對しては上欄に

彼ノ而字ニ當リ、テ　ツ　ツル　と活用スル語辭ノてモジヘ惣テノ活語ヨリ連用スルハ廿音也ト知リ、其上ニシカ有テ又ハシカシテト云ガツヾマレル如キニテ、さてト云フ言ハ、恆ニ多キ、コノてモ右助辭のてトキコユレハ更ニ之ヲ加ヘテ五十音ナカニてトイフ語、（126上下）

とあるのは、重複が甚しく、文脈晦澁の感が生ずる。

四欲（注）り

二七丁表に

祖點ニハ明カナル鏡ミ淨キ影ケト讀テアリ、存師ハ當ノ本ニ明淨鏡影トアルマヽテ明カナル淨鏡トアリ。」

とあるが、定本には讀テアリの下に

蓮師御のヘニ「アキラカナルカヽミキヨキカケ表裏ニトホルガ如シ」（127下）

の二十九字を增補してある。又欲宣法を法ヲノヘントホチシテと訓じてあるのを譜じて、

ホリシテト云ヘキノヲ訛リテ、ホチシテトイヘルハ、宣ノ字訓ニノヘムト云ヘキヲ、ノヘント類シタモノナリト存ス（一六ォ）

と說いて居るのはよいが、上欄の書入に、

私コソ知ラネ、ホタン　ホチ　ホツ　ホテ　ト開ク言モ若ハアルベキカ。後賢ヲ待ツ。山口栞ニイヘルコトモアリ考ヘ給ヘ。モシイヨ〳〵ホチト云言ハナクホリスノ訛ニキハマラバ（128上）

といつて居るのは、むしろ無くもがなと思はれる。さて又

祖點ニハ問奉ルマクノミコノマクノ言遣ヒ未考得、存點モ此ノ經ノ下モニ至テ「故能而爾」ノ處ニハシカルマクノミアリ、定メテワケノアルコトナルヘシ、コノ義は後賢者ヲマツ、（今少シ辨スベシ云々）（コノ義少シ考ヘアリ下卷ニ至テイフベシ。128上）

（　）内は上欄の書入、（　）内は定本の者であるが、將然の下に附くべきまくが連體の下に附くのは、誤だ

と斷言しないで、コノ義ハ後賢者ヲマツなどと說いて居る。此は謙讓や存疑などを尊敬する餘り、其の用語（特に親鸞の）を神聖不可侵の者のやうに說く義門の、研究態度の一弱點の現れともいへる。しかし口演の時は別に定見が無かつたのを後になつて考究した者には相違ない。

稿本に見えながら改められた說明中、次のやうな者がある。十八丁裏に、

按スルニ欲字に中ル言ハホルト云言アリテソノ用キ樣ハ有リ字ト（定本取鈎ナドト）同ジ用キデ、萬葉集……欲爲物者……ユカマクヲ欲*爲……君ガメヲ保利ナドトアリ。（23ウ下）

定本によれば（　）内の如く、取鈎などと同じ活用といふのであるから、今日の定說同樣、欲るを四段活と見たので異とするに足らないが、稿本の如く有りと同じ活用といふのならば、欲りは良行變格となる。萬葉の用例によると、此の語の終止形は、欲るではなく、欲りではないかと思はれる者が多いから、此の稿本の說は尊重に値する。活語雜話第三編によると、義門の此の語に對する考は、三變したのである。卽ち第一に良變だらうと考へ、第二に萬葉のほりかもの例から、（かもは連體に附く箇なので）普通の四段活でもなく、良變でもなく、連體がりとなる特別の活用かと考へ、最後に、終止形らしいほりも連體形らしいほり（かも）も連用形と考へて　結局四段活と判斷した。さて、此の稿本の出來た時、卽ち三部經口演の當時は、良變格に傾いて居たのであるが、後に定本の如く、又活語雜話の如く、意見が定まつたのである。此の點から考へても、此の稿本は口演當初の者と見るべきであると同時に、欲るといふ勸詞の活用に關しては、再檢討の必要を示唆するに足る點もあるやうに思はれる。（昭和二、三）

第二十八　活語餘論後篇の所說について

一　序　言

江戸時代國語學の最高峰に立つと稱して差支のない澤義門は、天保十四年二月鄕里小濱を出て、京都より讃岐に赴き、崇德天皇の御跡を偲び奉り、備中に至つて、先師藤井高尙の遺族を訪ひ其の遺著の整理などして、播磨を經ての歸途、宿痾漸く重り（以上は袖濤廼日記に詳しい）七月に歸山、八月十五日に歿したのである。先年來、自分の言ひ度い事は、義門小考（昭和一〇・二國學院雜誌）稿本入言小補について（一一・三同上）義門中心の方言座談會（一二・三方言）義門雜考（一二・五學苑）等に述べ盡した感もあるので、此處には、未刊書の活語餘論後篇中の所說を、高島正氏の手寫本により、紹介することにした。此處に後篇といふのは、筆者が便宜上命名した者であつて、圖書の四五六の三卷を指すのである。一二三の三卷は、寫本ながら早く世に知られ、又兼者の校註した者を昭和十二年の九月から十三年の五月にかけて、之を一册に纏めて希望者に頒つたこともある。當時世に知られて居たのは此の三卷だけであるが、筆者は、小濱某氏藏の妙玄寺藏書目錄ともいふべき者や袖濤廼日記等により「第四卷もあつたに相違ない」と認め、其の旨義門小考中に述べて置いた。然るに其の年の夏、福井縣大野の義門研究家高島正氏が、六卷本の活語餘論を手寫して居られることを知り、又「文學」昭和十二年二月號に關政方の研究家野田實氏が六卷本のことを紹介された。此の六卷本は、義門或は其の門人の靑山茂春（成春とも書く。通稱伊左衞門、小濱藩士、家を弟に讓り、義門の門人となり、能筆なので師の著述の　謄寫　枚下書を多くして居る）篇宇倒の著者たる備中の關政方に送つて置いたのが、政方から其の門人の久我苗彦に、其から其の子孫へと傳つた者なさうである。此の六卷の中、早く世に知られた一二三を前篇といつても、義門のことを東條義門といふ程の不合理ではあるまい。

三卷を通じて、左の如く九十二項を含んで居る。

四卷　三十五項　五卷　二十九項　六卷　二十八項　之を其の內容から大體次の如く分類することが出來る。但し中には一項が二類乃至三類を兼ねた者もあるが、其の項の主眼と認められる點によつて分けたのである。

1　動詞に關する者　六項
2　副詞に關する者　十一項
3　助詞に關する者　十四項
4　字音と訓とに關する者　二十項
5　音聲と假名とに關する者　十六項
6　神儒佛三敎に關する者　十項
7　大義名分に關する者　十五項

右の中4、5の多いのは、男信や於乎輕重義の著者たる義門としては、怪むに足らない。活語餘論といふ書名から推すと、動詞　形容詞　助動詞　等の活用に關する者が、もつと多くて然るべきやうに思はれるのに、甚だ少いのは案外の感じがする。尤も他の類の中にも用言の活用に言及した者が無いではない。さて其の國語學研究の動機については、江戸時代の一般國語學者が、詠歌又は釋歌を国的として居るのとは、全然違つて、常に

一、爲レ妙ニ辨語意ニ故

二、爲レ防ニ止他誘ニ故

三、爲ニ或關ニ法義ニ故

といふ事を言明して居るのであるから、6に屬する者も、もつと多くあつてよい樣に思はれる。しかし多數の人は、以上の事よりも、大義名分に關する者が十五項に及んで居るのを、特に意外と感ずるであらう。其の身は眞宗の僧である。研究する所はことばの學問である。ことばと日本精神といふ者と、そんなに關係があるのは不思議であると考へる人もあらう。しかし此は甚しい謬見である。

我が國民は、武士道が尤もよく代表して居るやうに、非常に實行を重んずる。單に言と事（行）との一致だけではなく、此の誠（精神）が合致することを大理想とした。言事誠は三つではなく、一つなのである。我々の祖先は斯う考へた。それで我が國の語を研究して、其の神髓を得るに至れば、必ずや此の境地に到達する。少くとも此の境地にあこがれるやうになる。然るに世には之を悟らず、又「言語は君子の樞機なり」といふ敎を忘れて、言葉を疎かにする者が少くないのは、慨はしい至である。義門は佛者であり、且、其の國語學研究の動機から考へて、眞宗の敎義を明かにする熱意のあることは勿論であるが、一歩進んで　國體　大義名分　日本精神　に其の心を向けたのも偶然ではない。其の皇室を尊び重んじた佛は、他の書にも散見するが、此の後篇には特に其が多い。但し皇室を尊ぶと同時に、佛法を尊ぶやうになつて居る者があるのは、其の　敎養　境遇　の然らしめる所、是亦當然であらう。

二　動詞　副詞　助詞　に關する說

1　動詞關係の所說には、次のやうな者がある。（以下一字下は、凡て義門の所說を要約した者、二字下は其の引用した歌文である。）

後撰集の詞書に「前太政大臣によせて侍りける」とあるのを、本居の詞の玉緒では、よせてといふのは我が國風でないとして、よみて送りけると改めて居る。しかし「(春)うち給はん方に花をよせてん源氏竹河」「藥師佛によせ奉るに同手習」などといふ用例があるから、後撰のよせても認めてよからう。

詞の玉緒や自著の繰分乎卷に言つてある通り、連體形から體言につゞく時「用レ之ノ之術」等の如く、のを入れるのは誤である。しかし三代實錄の宣命に「方今百姓乃耕種乃時奈利」とあるのは、タガヘシウヽルノ時と讀むべきかと思はれる。萬葉の　居久乃　戀良久乃　など又おもたるの神なども似て居るが、此等は上を體言のやうに見たのである。

右の外　あやまつ　あやまる　けす　けつ　のぞく　のぞむ　のむ　くふ　いゆ　くふ　くはふる　などといふ動詞についても說いて居る。

2　副詞關係の所說には特に注意すべき者がある。

こち　あち　いづち　等は、助詞　に　へ　等を附けないで、此方へ　彼方へ　何方へ　等の意があるのである。「乞許世山萬葉」「乞通來同」「いづち行くらん古今」「いづちもまからで榮花浦々の別」「こちよりての事を同月の宴」「こち參らせよ源氏明石」「こちこ枕草子」皆さうである。其で萬葉の　何處行目なども　いづくと訓むよりは、いづちと訓むがよい。

筆者は若干之を疑つて調べて見たが、萬葉に　伊豆知武伎提可　伊豆知武吉氐　伊都知由可米　等といふ假名書はあるけれども、いづちに　いづちへ　などといふ語は、絶對になく、いづくが副詞となつて、動詞にかゝるいづく行くらむ等といふ語の假名書もない。其の一方いづちゆくらむは　古今　和泉式部日記　後拾遺　風雅　等にもあるが、いづくゆくらむ　いづこゆくらむ　は正續國歌大觀を通じて求め得ない。故に萬葉の「何所行良武四三」「何處將行五一一」などもいづち行くらむと訓むを要すると信ずる。同時に、現代諸家の語法書に　いづち　こち　等を方向の代名詞と說いて居るのは、方向の副詞と訂正する必要があらう。さういふ筆者自身も、之を誤つた一人である。

以上の說は如何にもよい說であるが、義門は此より一歩を進めて

信濃なる　淺間の山に　立つ烟　をちこち人の　見やは咎めぬ　（伊勢）

のをちこちを副詞（といふ語は用ゐないが）のやうに見て、アチラヘコチラヘケブリガ立ハアレ〳〵と解して居るが、此は行過ぎであらう。又

つひに行く　道とはかねて　聞きしかど　昨日今日とは　思はざりしを　（伊勢）

の昨日を今日と並ぶ語でなく「今日とは、昨日は思はざりしを」と解して居るのも趣が似て居て、珍しいには珍しいが從ひかねる。此の外　よりて　かつて　などといふ副詞についても、詳かに說いて居る。

3　助詞に關する說の中注意すべき者を次に擧げる。

ゆゑ　ゆゑに　から　からに　の四語共に、順的原因を表すだけでなく、逆な事（口語ヂャノニ）を表すことがある。

にからノニの意が生じて來るのではない。

甚だも　降らぬ雪故　こちたくも　天つ御空は　くもりあひつゝ　（萬葉二三二十三）

惜めども　遂に散りぬる　紅葉ゆゑ　風ふく毎に　物思ふかな　（躬恒集）

朝行きて　暮は來ます　君故爾　ゆゝしくも　吾は歎きつるかも　（萬葉六九三）

あふからも　ものは猶こそ　悲しけれ　（古今）

大方の　秋くるからに　我身こそ　悲しき者と　思ひ知りぬれ　（同）

此等はにの有無に拘らず、皆ヂヤノニの意である。

筆者の私見では　ものから　ものゆゑ　共に、元來は　から　ゆゑ　と同じく、順的原因を表すのが本義であるが、後には其の原因が案外の結果を生じたといふ意に用ゐられるやうになつた者である。此の事は拙著國語法論攷に細說したが、其の後義門の此の說を見て、其の示してある多數の例證から大に得る所があつた。

此の外　に　へ　については、第一項　第二項　第四項　を通じて、例證を　に二十九　へ三十三　も擧げて細論して居る。第一項の初に「には到り著いて居る時に用ゐ、へは途の程を言ふのに用ゐるのが、大かたの區別である。」と說いて居るのは、富士谷成章の

何へ　その所に未だ到らずして、其方をさしてゆく心也　（あゆひ纏家）

といふのに酷似して居るので、或はあゆひ抄から得來つた說かとも思はれるが、あゆひ抄ではに四例とへ十例とを擧げて居るに過ぎない。しかのみならず、義門は

物體此處に在て、いづくへにても向ひたるをいふは、へといふにぞあらん。

と說き、更に　に　へ　何れを用ゐてもよい例を若干揭げて居るのは、徹底的な研究といへる。

右の外　や　と　して　よな　なよ　著狹方言の　てえ　吾な　等の助詞についても說いて居る。

三　字音　訓　音聲　假名に關する說

4　字音と訓とに關する說の中注意すべき者は、

三代實錄に「倩思義理」とあるのについて、谷川士清が

倩をつら〳〵と訓ずるは……猜字の誤なるべし。字書に猜は疑也とも測也とも見えたり（倭訓栞）

といつて居るのよりは、南郭が

庚肩吾の詩に「倩視今移處」とあるのなど　熟視　坐視　の意があるから、倪をつら〳〵といふ訓も、今は傳らない古い字書にはあつたのであらう。（遣契）

といふ説の方がよい。和爾雅　諺草　等が、之をむげの誤とするのには從ひ難い。

倩以二夫太極元氣之初一（新撰字鏡序）

もつら〳〵であらう。

と説いて居るが漢和大字典には　うつくし　むこ　雇ふ　等と訓じて、つら〳〵を認めて居ない。

清水濱臣が

遊仙窟に「故々臨窓」の故々をねたましがほと訓んで居るのと、萬葉に　人妻姤（ゆゑ）　人子姤（ゆゑ）　とあるのを合せ考へると　故　姤　の二字通じて　ゆゑ　ねたむ　と訓むこともあつたのであらう。

と説いて居るのは從ふべきである。又、我が養父大憲に「令　今　具　俱　使　便　相通ずる」といふ説があるが、礒を磯　劒を釼　と書くのなども認めるがよい。

遊仙窟を調べて見ると、醍醐本には故々をねたましがほと訓ませた者が二箇處あるが、慶安本には之をかたましがほと訓ませてゐる。

聞香を香をきくといふのは、漢字に捉はれた者である。大無量壽經では「見色聞香」をイロヲミ、カヲカグと讀み、法華經では　聞聲　遙聞　等はキヽ、聞香　聞則　等はカグと讀み分けて居る。「花橘の香をかげば古今」「深さ淺さをかぎあはせ源氏梅枝」「異香をかゞれけり著聞集」等皆かぐである。此と同樣に花について　發　開等の字を用ゐてあつても、ひらくと訓むのは、漢字に捉はれた者で、さく又はゑむと訓むべきだと考へて居たが、

おそくとく　ひらくる枝の　花故に　身をもうしとは　何か思はん（元輔集）

ひとへづゝ　八重山吹は　ひらけなん　ほどへて匂ふ　花と頼まん（兼盛集）

などがあるから、ひらくも認めてよい。しかし下二段のみであつて、四段活の用例は無い。落も花に關しては大體ちると訓むべきであるが、

お前の梅は……すこしおちかたなり。（枕草子四）

といふ例もある。

此の外　盱（つゞらか）　諱字の音　話字の音（字典にはワ音がない）　漢音は奈良時代からあつたこと　伊勢物語の　ようなき　えうなき　やうなき　南無はなもともいふこと　俵の字及び其の假名　等を説いて居る。

5　音聲及び假名に關する説について、例を擧げる。

春海の假字大意抄に、乎字がヲであることを説いて居るのはよいが、本居の説の引方が誤つて居る。又、愛宕の二字を　アタゴ　オタギ　二樣に讀むのを、春海がアオ同行の證といふのはよいが、同一地名といふのはよくな

い。郡名としては常に於太岐、山名としては常に阿太古なのである。

候ふは佐毛良布（萬葉）から起つた語であるから、さむらふともなり、之を音便でさうらふといふのはよいが、さふらふは誤であらう。一年此の事を　本居太平　藤井高尙　兩大人に話したところ、藤井大人は「今後はむと書かう」と答へられ、太平翁は「尤ではあるが一般にふと書いて居るので、今後ふと書かないとも斷言しかねる」と答へられた。他の人にも尋ねて見たがはつきりした答は得られなかつた。

小話に過ぎないやうであるが、義門の徹底的な考察　高尙の雅量　太平の愼重　がよく分る。義門は此に關して、更に宣長の漢字三音考の音便の條に、さむらふからさうらふができたやうに說きながら、自ら書いた文の中には、常にさふらふとしてあることを指摘して居る。

尊む　疎む　等と　尊ぶ　疎ぶ　等とは、單なる音通ではない。前者は四段活であり、後者は上二段活である、と主張して居るが、此は俄かに從ひ難い。外に　あわ　ひはれ　大炊　等の假名や、新撰字鏡にうるわしが攙つかあることなども說いて居る。

四　神儒佛三敎に關する說

6　此の類に屬する者としては　韓退之の佛を信ぜしといふこと　庚申まち　符術まじなひ　海潮のこと　道趣雖異理致同歸　等の各項がある。其の著しい者を要約して左に揭げる。

內典　外典　又は　內敎　外敎　といふのは內を尊しとし、外を卑しとする趣意ではない。內は內心を修める解脫法を指すので、外は外儀行相を正しくするのである。然るに近頃皇國書を內典といひ、佛書などを外籍と稱する人があるのは、一種の僻みから起つたので、笑ふべき至であり、又我が國の正史の用語とも違ふ。

仁義禮智信を五常といふことは、董仲舒が言ひ始めたのではなく、其の當時廣く言つて居たのを取つたのであらう。易緯乾鑿度（鄭康註）に見えて居る。此の書を周末戰國の者といふのは信じられないが、王莽の頃の僞書といふ說に從つても、其の當時五常といふ熟語が廣く用ゐられて居たに相違ない。我が國では續紀十卷に見え、更に古くは、推古天皇の冠位十二階に　德　仁　禮　信　義　智　の六字が用ゐられて居る。提謂波利經等から來たのであらう。

五　大義名分に關する說

7　此の類の所說は、義門の思想を明かにすることが出來ると信ずるので、少しく詳細に述べる。

荻生徂徠が「福嶋正則國初功臣中最兇猛者」といふのは、名分を誤つた者である。何がしの漫筆に「足利十五代は開國より滅亡まで……虎狼の世界といふべし」といつて居るのは、尊氏を尊んだのではないが、道理を辨へな

い用語である。

此の何がしの漫筆といふのは、太田錦城の梧窓漫筆を指すのである。

又、同じ書に「東照神君は……四百年餘の亂を平げ玉びて、如此太平無事、鼓腹凱樂の世界と成し玉へり。其功德の高きこと、豈鎌足の比並する所ならんや」とあるのを、或人は

かの談峰にます神の御事を申に其の御名をば、おのが友などよぶやうにいひはなちて……

と批難した。

と言つて居るが、此の或人といふのは實は義門其の人であるらしい。又

藤定家　行尊のよみし歌　などといひながら、一方では　岡部翁のよまれし歌　云々したまふ　などといふ學者が居る。舍人親王に對して、いはれ　せられ　かゝれ　と輕い敬語を用ゐる其のつづきに、荷田の大人のの玉ひし玉ひ　書き玉ひ　といふのも不都合である。伊勢貞丈が

武士は格式をこそ正すべきのに、富と貧とを以て、人を上げ下げするのは、商賣人の風俗で、武士の禮ではない。（秋草、陪臣無禮の條）

と言つて居るのと同樣、雲の上の御方々の事を、さまで尊ばないのは、禮を辨へないこと甚しい。特に、書を著す程の人で、之を考へないのは、むしろ不思議である。無上世尊や文宣王の事まで無禮な言方をするのは、鳥や蟲が尊い玉簾の上にあがる類と許すべきか。

といつて居る。筆者なども、古の尊い人に對しての敬語を用ゐるのを怠ることがあるのは、誠に長多くもあり、又義門に對して恥かしい次第である。

みこのたまひける……とのたまひければよみて奉りて……返々ずし給ひて、かへしえし給はず。……（伊勢物語）

みこのいひけらく……といひければよめる……返々よみつゝかへしえせず。（古今集）

同じく惟喬親王の事を申上げるのに、伊勢物語には敬語を用ゐ、古今集には用ゐて居ない。此は撰集は天皇に奉る者であるから、天皇を重く尊ぶ爲に、親王であらせられても、其の方には敬語を用ゐないのである。

今の世、濫りに之に倣ふべきではないが、尊敬の度の相違によつて、敬語を用ゐ分けるだけの用意は、ありたい者である。

當世（江戸時代）は、天皇には、御宇　還幸　とのみ申すが、古くは、「天皇還御三代實錄」「くわん御はあけ方にぞなりにける　增鏡」などの例もある。又古くは某宮（アメノシタシロシメシ）御宇（アメノシタシロシメシ）天皇と申したのを、後世は某天皇御宇又は御治世とも申した。然るに當世、之を紛はしく用ゐるのは長多いことである。

此は江戸時代に將軍について　還御　御治世　などと言つて居たのが、名分に反する事を指したのである。義門は之を明言して居ないが、其のつゞきに次のやうな事を言つて居るので判斷出來る。

支那でも　朕　勅　など、古くは帝王に限らなかつたのだが、秦始皇のやうな暴君でも、人皆之を守つて居るではないか。然るに「其の唐國（もろこし）よりはたふとき御國にうれしくもすまひながら、いといとかしこき大御を申にまぎ

るゝ詞つかひなどをばよくえらみおかざるべけんや」

と言つて居る。其の志の深く皇室に存して居たことは、此の一條でも明かである。

今の世　懐紙　序　跋　等に、平某　源某　などと、濫りに姓を記す人が多い。かの允恭天皇の御代、探湯をして姓を正されたことを知らない筈はないのに、何としたことであらう。又昔は、姓は勅によつて賜はつたり、改めたりしたのである。玉勝間に「今の苗字は姓と同樣であるから、正しきを守れ」と說いて居るのは如何にも尤である。然るに其の人自ら小津といふのを本居と改めたのは、濫なる業をしたのでもあるまい。

此は宣長に對する皮肉である。此について想ひ出されるのは、義門の氏を東條といふことである。元來出家した以上は、姓氏が無い筈であるから、親鸞も日蓮も仙覺も契沖も姓氏を言はない。同樣に義門も、自身では妙玄寺義門又は釋義門とのみいつて居た。其が明治の初年、其の子逢傳の時に、僧侶も姓氏を要することになつたので、祖先の俗姓三浦を名のつたが、些細なことから、祖先が三河の東條から出たといふので、東條と改めたのである。今の世の人多くは東條義門といつて居るが、東條といふ姓は、義門自身は夢想もしなかつた筈である。往年名古屋の其中堂で、「指出の磯」「磯の洲崎」の有無を尋ねた時、店員が「あゝ義門大德のですか」と言つたのを聞いて、ゆかしく感じたことがある。其の序に「あなたも今頃義門大德の本をお探しの樣では、あまりはやらない方ですな」と言はれたが、此亦味のある皮肉である。

殷の湯王は夏の桀王に勝ちながら、德に慙ぢる所があり、又桀王が甚だ惡虐であつたから、其の放たれた時の夏人の悲はさまでで無い。周の武王は殷の紂王に勝つて慙ぢる色が無い。又紂王が亡された時の殷人の悲は、鴟鴞小瑟の詩に著しい。此彼思ひ合せると、國學者が常に湯武を並べ惡むのも、漢學者が之を並べ崇めるのも、共に從ひ難い。

我が國の昭宣公(藤原基經)の事を伊尹に準へる學者があるけれども、假に通說の如く「伊尹放二諸(其君太甲)桐一」としても、後に復辟させたのであるから、昭宣公とは大に趣が違ふ。特に、放は篆書が似て居る所から敎とあつたのを誤つたのだといふ說があつて、之に從へば敎へ導いて後復辟せしめたのであるから、尙更違ふ。支那の聖賢の事跡に似て居るからと言つて、我が國體を考へずに、濫りに昭宣公を賞めてはならない。

漢學者が應神天皇が稚郎子を皇太子に定めたまうた事や、村上天皇が歌合を好ませ給うた事を謗るのもよくない。推古天皇は女帝の御初であらせられたので、陰氣の盛な事が天道に通はず、其の三十四年の六月に雪が降つたりなどしたのである。

といふ批難も、支那本位の考方で、不合理千萬である。若し其ならは、其の二十五年に豐年であつたのを、何と說明するか。又かしこくも日の大御神が女神におはしますのを如何に考へ奉るか。

漢學者と所見を異にするのは怪むに足らないとしても、德川將軍に媚びない凜乎とした氣概のほの見えるのは、其の時勢に照して、誠に敬服の至である。

（昭和一七、七）

第二十九　義門中心の方言座談會

一　第一座談會

義門は若狭國小濱の妙玄寺の住職、其の子孫が明治以後、一旦、祖先の俗姓三浦を稱したが、後故あつて先祖が三河の國東條村の出なのに因んで、東條と改めた。義門自身は出家であるので、姓を名告る筈はなく、釋義門と稱し、他からは義門法師とか義門大德とか稱したので、東條義門などといふことは、其の生前は自他共に夢想もしなかつたのである。さて義門は藤井高尙の講筵に侍し、又、書信等で、敎を受けたので、其の門人と見てよい。本居家の　太平　春庭　にも私淑して、本居派の國語學を大成したことは、周知の通りである。

其の多くの著書の中、「活語餘論」半紙本三卷が、寫本として妙玄寺に傳つて居るが、門人青山恕の筆らしい。外に第四卷があつた筈であることは、自分が嘗て國學院雜誌に述べて置いたが、岡山縣金浦の久我於菟一郎氏方に四五六の三卷が傳つて居たのを、昭和十一年九月福井縣大野の高島正氏が傳寫した者を自分も寫すことを得た。

さて此の書は單に活語の研究のみではなく、歌集の　題しらず　よみ人しらず　を初として、音韻　古瓦　異年號　等の研究もあり、四　五　六　の方には、名分論といふべき者も見えて居る。其の中に方言に關する事が記載されて居るが、之を綜合すると、方言座談會といつてもよいやうな會が、二回程あつたやうである。その大體を紹介する。

其の第一は、第二卷の『じ　ぢ　のけぢめの條』に見えて居る。卽ち

時　文政の初年

處　鐸ノ屋　藤井高尙の京都塾

人　1　吉田　直堅（土佐人）　2　本居　太平

3　塙　保己一　4　大堀　正輔

5　義門

といつた構成で座談が行はれた。此の時の話題其の他が詳かでないが、次のやうな談話の行はれたことだけは解つてゐる。

吉田「自分の鄕里土佐では富士の山は必ずふじ山　藤の花はいつもふぢ　とかくこと、女わらべも間違はない。口で呼ぶのが區別されてゐるからである。然るに京に出て三年五年住んでゐた女などは、歸國してことさらめいて解らぬやうにいふ。

義門「土佐の人のみでなく一般の人にも區別が不可能ではない。卽ち、だ　で　ど　と　ざ　ぜ　ぞ　とにた

ぐへて云へばよいので、舌用のかゝり　齒用のあづかる所　を心えて試みるがよい。

或人「日向人に聞く所によると、かの國では治助と次助と區別して呼び、筑前でも十藏と重藏とはつきり別れてゐるといふことである。

義門「肥前人に聞くに　治右衞門　何次郎の　治　次　を皆いひ分ける。富士　藤　は勿論である。此の時の會のことは、此だけが分つて居るに過ぎないのは、會合者の顏觸から見て、特に遺憾に思はれる。」

二　第二座談會

第二の座談會は、第一卷の終にある『よぶことりもゝちどりの條』で、之は前者よりやや詳しく記されて居る。

時　不明

處　不明（或は京の高倉學寮でか）

人　1　行　馨（越前）　2　義　辨（肥後）

3　法　雲（若狹）　4　義　門（若狹）

6　備中の人（地理學者古川辰、即ち古松軒の代辯者）

話題は古今傳授の三鳥（百千鳥　呼子鳥　稻負鳥）のことに端を發した者と想像される。

行馨「私の國の越前の厨浦に、よぶ子鳥といふのがゐる。雀二つより少し大きく、つぐみに似て色は灰色で夕方から夜にかけてビツビイビイ／／／／／と優になく。ねざめなどにきくと哀である。山では鳴かない。鹽濱で鳴く。類題に浦喚子鳥といふのが是であらう。又山でカツポ／／となく鳥が居るのをかつぽ鳥といふが、芳野では之をかんこ鳥といふことを芳野の人から聞いてからは、心がらかカンコ／／と鳴くやうに聞える。

義辨「肥後でも其と同樣の事があるけれども、特別な鳥ではなく、鳩のことである。

法雲「山でカンコ／／となくのをカツポ／／と聞けばきかれる。それをかんこ鳥といふのは尤もだが、鳩といふのは贊成できない。實はカツコウ／／と聞えてひどく物淋しい。形は鳩に似て居るけれども少し細長い。夏冬は鳴かず、秋多く鳴き、春も稀に鳴く。

義門「自分の國のことだが一向知らずに居たのに、かうして諸國の人と京に集つた時に、之を聞くのは誠に面白い。

備中人「どうも自分の聞いてゐるよぶ子鳥は諸君のいはれるのとは大分ちがふ。奥州に行つた時、ある村の子供が「呼子鳥が鳴くは、あれ／／。」と云ふのを聞いて、「其はどんな鳥か。」と聞いた所が、「此と一つきまつた鳥ではないよ。何でも子供を呼ぶやうに聞える鳥を呼子鳥といふのだよ。」と云つたが、その子供のいふことは如何にも尤で、さう考へると「をちこちのたづきも知らぬ山中に覺束なくも呼子鳥かな」といふ古今の歌もよく分る。かんこ鳥などといふのは、喚子鳥の三字を音訓まぜて、湯桶讀によんだのが廣まつて、カンコ／／と鳴く

と思つて聞くやうになつたに過ぎない。閑古鳥などと書き、其の字に捕はれて、淋しい處のたとへにいふのは從ひ難い。

義門「子を呼ぶやうな鳥といふのは面白いが、若しさうならば、子呼び鳥といひさうなものである。（如何にも文法家らしい口吻）しかし、物の名となつた詞にはさういふ例もあるから、奥州の子供のいつたことも認めねばなるまい。けれども、日本中何處へ行つても子を呼ぶやうな鳥を、總てさういふのではなく、行馨さんのいふやうに、厨浦同樣、或一種の鳥をいふ地方もあるだらう。山中におぼつかなくも云々と詠んだ歌にはよし合はなくても、其は其で又別に考へなくてはならない。要するによぶ子鳥といふ名は一つで、指す所の者は一つではないのであらう。それにしても、よぶ子、どりかよぶ、小とりかの疑が起る。又よぶ子鳥とは話がちがふが、百千鳥は多くの鳥のことらしいのに、衙と國字を宛てるのは、一種の鳥であるから、百の衙と見てもよく、又百も千も數ではく、ちどりをさう云つたのかも知れない。その鳴く聲が君が御代をば八千代とぞなくといふ位でチ、ノ〳〵イと聞えるからの名であるとも考へられる。和泉式部集に「下水のほとりにちどりの唯一つたどるを見て」とはしがきがあつて、「友をなみ川せにのみぞ立ねける、百千鳥とは誰かいひけん。」とよんでゐるのは確かに鳥の名に相違ない。

義門「諸君はカツボ〳〵と鳴くといはれるが、あれはカツボ〳〵ではなく、クワツボ〳〵である。すべて京都の人は　くわん　かん　くわく　かく　など、入聲ツチク又平上去のンの上のは、よく區別するので、關東人の區別出來ないのを笑ふが、ウの上の　カウ　クワウ　は京都にも分らないのは、いはゞ五十歩にして百歩を笑ふのと等しいことだ。

義門「さうはいつても　香（カウ）　光（クワウ）　はやはり區別できないだらう。

義門「成程、其は面白い。如何にもカとクワとが區別できるならば、カウとクワウとも區別できる道理だ。

義辨「又肥後では、すべて言葉のおをの區別は出來ないが、いろは歌のをわかのをとおくやまのおとは判然區別し、をわかの方はウオのやうにいひ、おくやまの方は單にオと發音する。但し、いろはのいとうゐのゐとは區別しない。こえてのえとゑひものゑとも區別できない。

義門「其はちりぬるをの方は、上のるの母音がウであるから、其が下に及んでウオのやうになり、うゐのおくの方は、上ののの母音がオであるから、其のつゞきで輕くオと出るのである。其は肥後の人ばかりでなく、誰でもためして見れば分るであらう。石見の小篠敏が「天明頃五十音を和蘭人に唱へさせて見た所が、あ行おは單純なオに聞え、わ行のはウオと聞えたが、此は第一の音のあとわとにつれて、自然に分れた者だ。」といふことを本居翁にいつてやつたことが「玉勝間」に記されてある。

大體こんなことが記されて居る。

「活語餘論」中には、此の外にも　九州の方言コチラニ　若狹方言の我(ワ)ナ物やツラクラ　などといふ語について說いた所もあるが、會合の席の話題となつたのは上記の二回の事のやうに認められる。

（昭和一二年一月三〇日、國學院大學方言研究會に於ける講演筆記）

第三十　權田直助翁の國語學

一　略　傳

翁の鄕里は武藏國入間郡毛呂本鄕で、其の生れたのは、外警頻りに至り、長崎に砲臺を築き、津輕に烽火臺を設けなどした文化六年（二四六九）である。學界に於ては、塙保己一は其の前年に、上田秋成は當年に歿し、翌年には水戸藩が大日本史を獻上した。家世々醫を業としたので、翁も十五歲の年江戸に出で、幕府侍醫野間廣春院に學び、又漢學を安積艮齋に受け、二十二歲業成つて歸鄕、古醫道を以て世に立つた。時勢の刺戟か、學ぶ所より得たか、國學に志し、天保八年（大鹽平八郎の亂のあつた年）二十九歲にして、平田篤胤の門に入つた。斯くて古醫道と國學とにいそしんで、漸く名を成したが、天下の情勢は益々急を告げ、翁の奮起を促すに至つた。卽ち文久三年（高山定之が足利尊氏の木像を梟した年）五條家に聘せられて、京都に赴き、勤王の事に斡旋した。斯くて心を勞した維新の大業も成り、國學者の功績は世に認められ、それ〴〵擧げ用ゐられた。中にも翁は明治二年白川家學館を預り、刑法監察司知事、大學中博士、皇漢醫道御用掛として、從六位に叙せられた。然るに明治四年四月或論議の爲、罪を得、官位を褫奪され、前田侯邸に幽閉された。六年に赦されて後、相模大山阿夫利神社の祠官となり、家事は妻子に、

醫業は門人に委ねて名越舍塾に於て國學を講じ、明治二十年七十九歳を以て歿するまで、專念、著作と講義とに力めた。

二　語學上の著述

翁の幽閉は、一方に於ては、其の顯達を阻んだが、一方に於ては、其の國語學史上の地位を高め、之を不朽ならしめた。即ち翁の國語學的研究並びに著作は、幽閉中六十三歳の高齢に達してからの事である。まづ富士谷成章のあゆひ抄を熟讀玩味して、てにをは品定を著したのが其の發足點であると見てよい。今翁の國語學上の著書を擧げると、大體次の如き者である。

てにをは品定

詞の經緯圖（作用言、形狀言、受辭の活用表）

詞の眞澄鏡（體言六種三十六類の表）

詞の經緯圖
詞の眞澄鏡　解

國つ文學柱（修辭的語法、皇典講究所教科書となる）

詞の玉緒頭註

詞の八衢頭註

詞の通路頭註

形狀言八衢（寫本、自分の見た者は無窮會藏書で三卷、合綴一册。音樂學校藏は二卷との事だがまだ見るを得ない）

童蒙語學問答（語の經緯圖の問答體）

語學自在（獨習用、學修順序を定めてある。續史籍集覽採錄）

國文句讀考（寫本、一卷、國學院大學圖書館藏、井上頼圀增補訂正の國文句讀法が世に行はれた）

小學語學教授

翁の國語學は、賀茂、富士谷を先驅とし、本居父子の　玉緒　八衢　通路　の三部を祖書と仰ぎ、元木阿彌、義門、廣足、幻裡庵、朖、國雄、義言、重胤、守部、廣蔭、翁滿等合せて十五家の語を取捨して、自說を立てたのである。就中、本居父子の說を祖述した形になつて居るが、其の說の內容を檢すると、富士谷の說に據る所が少くない。元來富士谷派の學說は、其の內容の精緻と術語の難解との爲に、一般的普及を見るに至らず、本居派の語學が、獨り世に廣まつたとはいふものの、本居派の大家、例へば鈴木朖の如き、義門法師の如き、皆富士谷の說を取り入れて他山の石以上の助として居る。翁と同時代の堀秀成の如きも、亦さうである。故に翁の、此の研究態度も、敢て異とするには足らないが、本居富士谷兩派の比較研究を試みて、克く之を咀嚼し、折衷して、自說を立てたこ